
そばにいて

大平麻由理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そばにいて

【Nコード】

N1329F

【作者名】

大平麻由理

【あらすじ】

高校一年の石水優花は、初恋の彼を密かに思い続けている。でも、その片想いはまだ誰にも知られていない。そんな一見平穏無事に見える優花の高校生活にも徐々に変化が訪れて……。

プロローグ（前書き）

そばにいて　にお越し頂きありがとうございます。パソコン・携帯のどちらでも閲覧できますので、行間をやや多めにとっております。どうかご了承下さいませ。

ブローグ

「優花、忘れ物はない？」

「うん。ないない。じゃあ、行つてきまゝす！」

わたしはサイドが少しこすれた黒のローファーを履き、心配そうに見送る母さんに笑顔を返す。

そして元気よく玄関からマンションの廊下に飛び出した。

少し遅れて、パタンとドアが閉まる。

今日から二学期だ。宿題も入れたし、お茶も持ったし。

準備は完璧のはず……だった。

お気に入りの夏の制服の胸元のリボンをエレベーターホールの鏡で確認する。

いい感じに結べた日は、何かいいことがあるような気がするんだ。今日はまあまああってところかな？ 眠そうな目をした自分がちょっぴり情けないけれど。

「優花ちゃん、降りるけど？」

「あつ、おばさん、おはようございます」

はくるりと振り向き、ぺこつと頭を下げた。隣のおばさんだ。

片手にごみの大きな袋を持ち、もう片方の手で閉まるうとするエレベーターの扉を押さえながらわたしを待つてくれている。

ところがわたしは、手を振るだけで、一步もそこから動かない。だつてわたしは……。

「わたしは階段で行くから、いいです。おばさん、ありがとう」

「そうかい？ じゃあお先に」

おばさんは怪訝そうな顔をしながらも扉から手を離し、エレベーターの四角い箱ごと階下へ降りて行った。

わたしは毎朝登校の時、必ずエレベーター横の階段を使って下におりる。

わたしが住んでいるところは六階だから、ちよつと時間がかかるけど。だけど、平気。

足腰のトレーニングにもなるしね……。というのは家族や近所の人に訊ねられた時の建て前的な言い訳。

だって、このマンションの三階には……。

そう。三階には、あの人が住んでいるのだから。同級生の吉永真澄君だ。

わたしの初恋の人。

階段を下りていくと三階の廊下の前で少しだけ立ち止まる。

そして左手奥の通路を眺めるのだ。五つ目の扉が吉永君の家になる。

いちいち扉の数を数えなくても一目で彼の家が区別できる。

だって小学校一年生の時からここに住んでいるんだよ。

網膜にくつきり焼き付いていて見間違ひようがないんだから。

そして、ホントにホントに、たまーにだけど、吉永君がエレベーターホールに立って待っているところにはったり出くわすことだってある。

三階だと階段の方が早いかもしれないのに、彼は絶対にエレベーター利用派なんだよね。

そんな時は、踊り場にいるわたしをチラッと見て、黙ってそのま

まエレベーターに乗り込む。

もしかしたらチラツとも見ていないのかもしれない。

いつも、こいつ誰？　みたいな不思議そうな顔してるんだもの。

まあ、全く知らないとは言わせないけど、中学生になった頃からわたしたちはもう三年半も口をきいていないんだ。

それでもいい。無視されても知らんぷりされてもいい。

学校に行けばずっと同じ教室で勉強するんだし、クラスの仲間達としゃべっている声ならいつだって聞けるんだし……。

わたしは彼にどんなに冷たくされても、階段を使うのは当分辞めないつもりだ。

吉永君が生活してる三階を、ちゃんと自分の足で踏みしめなきゃ嫌なんだもの。

ささやかなわたしの幸せタイム。これくらい許してくれるよね。

それと、もしもだよ。エレベーターで吉永君と二人っきりになったらどうする？

とてもじゃないけど心臓がバクバクしすぎて耐えられなくなっちゃうと思うんだ。

おまけに三階でドアが開いて、わたしと目が合ったとたん、彼が身体を翻してどこかに行ってしまったなら……。もう二度と立ち直れない。

今日は、吉永君に会わなかった。

もう一本後のバスでも余裕で学校に間に合うから、きっとそれに乗るんだ。

わたしは、バスの窓から遠ざかっていくマンションを見上げながら、ふうっと小さくため息をついた。

1・クラスメイト

「優花！ おっはよー」

わたしの前の席に座って、くるりとこっちを向いたのは、本城絵里。高校に入学してすぐに仲良くなった親友だ。

「夏休みなんて、あつという間だよ。うちの大学生のアネキなんてさ、まだ夏休み続行中なんだよ。ずるいと思わない？　夕べ飲みすぎたとか言ってさ。あーん。はやくあたしも女子大生になりたい」

絵里はぷにぷにのほっぺを肘を突いた両手で支えながら、口を尖らせる。

夏休みにも何度が遊んだので、久しぶりというわけでもないけれど、尖がった唇がいつもと違う感じがするのはなぜ？　……あれ？　なんだかきらきらしてる。

「ねえねえ、絵里。グロスつけてる？」

わたしは彼女の唇を穴が開くほどじっと見つめて、そう聞いた。

「えへへ。わかる？　……内緒なんだけどさ、アネキの化粧ポーチの中からひとつ拝借してきちゃった。だって、すっごいいっぱい持ってるんだもん。ひとつくらいもらってたってわかんないって」

絵里はそう言って、大きな目をくりくりと動かす。

「次の休み時間に、優花にもつけてあげるね」

「ええ？ わたしは、いいよ」

「何遠慮してんのよ？ 無くなったらまた別のを借りてくるから大丈夫だって」

絵里はさっそくポケットをさぐって、本日の戦利品をわたしの目の前にかざした。

透明のチューブに入った明るいピンクのそれは、どこか大人の香りがするようだった。

「だってさ、絵里はグロスに負けないくらい美人だし、とても似合ってるからいいけど……。わたしがつけたらきつと変になるよ。似合わないって。わたしには薬用リップがちょうどいいんだってば」
「優花ったらさ、自分のことちつともわかってないんだから……。もう一度、よく鏡見なさいよ」

「鏡？」

「そう。優花はかわいいの。磨けば光るんだから。素材としてはクラスでも一、二を争うくらいにいい線いつてるし」

「そ、そうかな……。でも、誰もそんなこと言わないよ。妹にはブスブスって言われるし、よしな……。いや、近所の男の子にも、小学生時代にさんざんブサイクっていじめられたし」

危ない、危ない。わたしはまだクラスの誰にも、吉永君と同じマシヨンに住んでいるって言ってない。だっている詮索されたくないしね。

本当に同じ中学出身なの？ って、絵里にびっくりされるくらい疎遠な関係だから、今さら昔はそれなりに仲良しだったなんて言えないよ。

あれ？ 彼女の顔が真っ赤になって、目が吊り上ってきた。

「ひつどーい！ 誰？ 優花をいじめた奴。今から殴りこみに行つてやる」

「あ……。絵里、落ち着いて。昔のことだから、もういいんだってば」

そうだった。わたしはすっかり忘れるところだった。絵里が誰よりも正義感溢れるヒーローだってことを。でなきゃ、誰がこんなにきれいな顔立ちをした美人を放っておく？

自分のお姉さんには誰よりも辛口なくせに、一步家を出ると友達思いで、曲がったことが嫌いな絵里は、男子生徒からも一目置かれる存在なのだ。

その絵里がグロスをつけて来たってこと事態が本日の大異変なわけ。わたしの過去の話は今ここでは関係ない。

怒りに震えて立ち上がった絵里の肩をなんとか押さえこみ、再び席につかせると、とにかく話題を変えるため、隣のクラスのもう一人の友人、大園麻美おおぞのあさみの話を持ち出してみた。

「そうそう、マミったらさ、夏休みに家族で沖縄に行ったんだよね。うらやましいな」

本当はあさみって言うんだけど、しょっちゅう読み間違えられるので、いつのまにかみんなからマミって呼ばれるようになったんだって絵里が教えてくれた。

絵里と麻美は出身中学が一緒なので、わたしもいつの間にか仲良くなっていたんだ。

麻美んちのお父さんは開業医だ。お盆休みには、毎年家族でどこかに旅行に行くって言うてた。きつとうちと違ってお金持ちなんだ

ろくな。

沖縄のおみやげ買ってくるからねーと言っていた麻美の嬉しそうな顔が目には焼きついている。

わたしはこうやってちゃんと話題を変えたはずなのに。

吉永君のことはたとえどんな小さなことでも話題にいたくなかった……。だから麻美の話を持ち出したのに。

なのに、絵里ったら……。

「そうだったね。ほーんとうらやましいよ。でもさ、あたし、知ってるんだ。マミね、好きな人ができたって言ってたでしょ？」

「う、うん」

そういえばこの前、三人で買い物に行った時、麻美がそんなこと言ってたような気がする。

「その相手がこのクラスにいるってわかったの。誰だと思う？」

絵里が尖らせた口の前で人差し指を立てて、ぴこぴこと左右に動かす。

誰って……。あの時麻美は恥ずかしそうにして、まだ好きな人の名前は言えないって真っ赤になってた。

麻美は陸上部のマナージャーをしている。ということは、やっぱり、同じ部活の誰かってこと？

わたしはそういうことにめっぼう疎い。誰が誰を好きとか、言われるまで気付かないことが多い。

言われても、知らない人だったなんてこともあるくらい、世間知らずだ。

ましてや麻美は隣のクラスなんだよ。いくら仲が良くても麻美が自分から言わない限り、誰を好きかなんてわかるはずがない。

わたしはしばらく首を傾げ考えたあげく、絵里に言った。知らないってね。

「そうだと思った。優花はいつだってのん気だもんね。へっへっへ。ちよっと耳貸して」

絵里はわたしの方に顔を寄せて、きらきらした唇をぶると揺らしながらクラスの男子の名をささやいた。

「え、えー！ーっ！」

たった今聞いたばかりのその名前に、わたしは全身硬直状態に…
…なった。

2・ベストスリー

絵里がささやいた男子の名前は……。

わたしがこの世で一番敏感に、まるでパブロフの犬みたいに条件反射しちゃう名前。吉永真澄君……だった。

「吉永ってさ、まだ校内でそんなに騒がれてないけど、うちの学年で三本の指に入ると思うんだ」

「さ、三本の指？ それってモテるってこと？」

「うーん。それもあるけど、はつきりとモテだすのはまだもう少し先だと思う。そうじゃなくて、イケメンランクが上位ベストスリーってこと。もしあの目で見つめられたら、あたしだってときめきすぎて息が止まっちゃうかも」

そ、そんなあ……。絵里がときめいたら、わたしなんて到底勝ち目が無い。お願いだから、彼を、吉永君を好きにならないで。

わたしは心の中で、絵里がライバルにならないようにひたすら祈る。

「だからさ、あたしはマミって見る目あるなと思ったんだ。そうそう、優花は吉永と同じ中学出身だね。今度マミに情報提供してあげれば？」

じよ、情報提供？ どうしよう。困るよ、そんなの。

「何、ビクビクしてんの？ なんか優花って、吉永に過剰反応するよね。あんたが吉永嫌いっていうのはわかってるけど、ちょっとくらいマミに協力しなさいよ」

わたしって、吉永嫌い……って思われてるんだ。しかたないよね。片思いがバレないようにするためには、まずは身近な絵里に悟られないようにするのが先決だもの。

だからと言って、麻美に協力するってのは無理な相談だ。

だって、わたしの初恋の人なんだよ。いくら麻美が友人だからって、仲を取り持つようなことだけはやりたくない。

こういうことは最初にきっちり言っておかないと、後で辛い思いをすることになるのは、目に見えている。

この際、友だちがいがないと思われてもいい。

「情報ってたって、わたしは何も、し、知らないし。本当に吉永君のことは、何も知らないんだ」

そう。これでいい。ここは知らぬ存ぜぬでぐり抜けるしかない。

その時だった。わたしと絵里の頭上を人影が覆ったのは。

「おい……。これ」

突然わたしの横にぬっと現れたその人影の主は、目の前に見慣れた包みをぽんと置いたのだ。ピンクのバンダナで包まれた、二段重ねの弁当箱……。

なんでわたしのお弁当がこんなところに？　もしかして、落としたのかな？　拾ってくれたの？

わたしは恐る恐る、その親切な人物を見上げた。

よ、吉永……くん。

「吉永君。な、な、なんで？ わたしのお弁当、どこかに落ちてた？」

確か走ったのは、マンションのエントランスからバス停までの道だ。それと、学校に着いてからも廊下を小走りで駆け抜けた。そのどちらかで落としたのだろうか？ それにしても……。わたしのだってよくわかったよね。

わたしが不思議そうに吉永君を見上げていると、怖い顔をして案の定、ギロツと睨まれた。

「よしながくん、だと？ ……まあいい。エレベーターの中で、おまえのお母さんから預かった」

それだけ言うとは事も無かったかのようなすました顔をして、わたしの左斜め後ろの自分の席に座る。

にしても……。吉永君って呼んだのが気に障ったのだろうか。そういうえば、直接彼のことをそうやって呼んだのは初めてだったのかもしれない。

だって、ずっとしゃべらなかつたんだもん。苗字で呼ぶチャンスがなかつたんだから、しかたないよ。

「あ、ありがと。吉永……君」

わたしはまるでロボットのようにカクカクした動きで後ろを振り向き、小さな声で彼に向かってそう言った。もちろん、吉永君と言うのも忘れずに。

するとやっぱり吉永君は、いつものようにチラッとこっちを見るだけで、何も言わずに一時間目の授業の準備を始めるのだ。

吉永君、怒ってるよね。絶対怒ってる。

ああ、やばいよ。マジで気まずいよ、このどよんとした空気。よりによって、あの吉永君に、忘れ物の遣いっ走りをさせてしまったんだもの。もう、マジでどん引きされてる。

わたしは前方から、もうひとつの刺すような視線をひりひりと全身で感じていた。

しまった。ここにも関門が控えていたのだ。すべてを見ていた絵里のとげとげしい視線。

おっかなびつくり顔を挙げると、腕を組み、上から目線の絵里とピタツと目が合ってしまったのだ。

「優花、これはいったいどういうこと？ 今日の昼休み、覚えておきなさいよ」

怖い。絵里の顔が、二時間ドラマの女すご腕検事になってる。そんなに睨まないでよ。

っていつか、口元がにやにやしてグロスが不気味に光ってるんだってば。

ああ……。きつと今のこと、説明しなきゃいけないんだろうな。うちの母さんからお弁当を預かったって言ってたよね。それもエレベーターの中で。

それって、わたしと吉永君が同じマンションに住んでるの、バレちゃったってこと？

2 ペストスリー（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

吉永君、ついに初登場！

これからもどうぞよろしくお願いします

3・真澄ちゃん

「母さん！ どうしてどうしてどうして、お弁当を吉永……じゃなく、真澄ちゃんに預けたのよ」

わたしは、遅めのおやつを食べながら、台所で立ち働く母さんに文句をぶちまける。

我が家では吉永君のことは真澄ちゃんです通っている。でもわたしは中学生になった時に、真澄ちゃんって人前で呼ぶのを辞めた。

だってそんなの、子どもっぽいじゃない？ 友達からも馬鹿にされたりからかわれたりするしね。

それに漫画や小説で、恥らいながら好きな男の子のことを 君 と言って言っているヒロインに密かに共感してるんだ。

それ以来、家以外では必ず吉永君って呼ぶことにしている。もちろん、心の中で彼を思う時も……ね。

「優花ったら、いつまでたっても小さい子どもみたいだね。何もそんなに怒ることないじゃない」

母さんはちつともわたしの方なんて見ずに、トントンとリズム良く、キヤベツを刻んでいる。わたしは見られていないのをいいことに、おもいつきり頬を膨らませた。

「ほらほら、そんなにふくれっ面をしないの」

な、なんでわかるの？ 母さんはきつと背中にも目があるんだ。

「だって考えてもごらんなさいな。優花が忘れ物をするからこんなことになったのでしょ？ お弁当をバンダナでくるんだ後、自分の

勉強机の上に置き忘れたのは誰？ 優花に追いつくかなと思って、エレベーターに飛び乗ったら、ちょうどいいタイミングで真澄ちゃんが乗ってきたのよ」

「それで真澄ちゃんにわたしのお弁当を押し付けたってワケだね。あ〜ん。おかげで、学校ですつごい恥ずかしかったんだから」

母さんが吉永君の手に、強引にピンクのバンダナの包みを押し付ける様子が目に浮かぶ。

吉永君も吉永君だ。なんで、断らなかったんだろう？ 困りますって正直に言えはいいのに。

「優花。あなた、何か勘違いしてない？ 母さんはね、無理やり押し付けたりなんかしなかったわよ。真澄ちゃんが自分から言ってくれたの。僕が届けますってね。ちゃんとお礼言ったの？」

し、信じられない。吉永君が自分からそんなこと言ったただなんてでも、母さんが嘘つくはずないし……。

わたしの目の前には巨大なクエスチョンマークが消える事なくさまよい続ける。

「それにしても、真澄ちゃん。男前になったわね。惚れ惚れしちゃったわ。ねえねえ優花。真澄ちゃんってモテるでしょ？ どうなのよ？ カノジヨとかいるの？」

やだ、母さん。鼻歌まで歌っちゃって。そ、そりゃあ、モテる……わよ。今日だって、絵里とそのことについて話したばかりだもの。だからって、はいそうですなんて、誰が言ってやるものか。母さんはそんなこと知らなくてもいいの。

それに、カノジヨだなんて……。そんなの知らない。もしいたとしても、わたしが彼を好きなのは変わらないんだから。

「ねえ、優花。聞いてるの？」

「んもう！ しつこいなあ。真澄ちゃんのことなんか、わたし何も知らないってば。だってね、わたしたち、中学の時からずっと話もしてないんだよ。だから……」

わたしはそう言ったあと、重大なことに気付いた。そうだ。今日、久しぶりにしゃべったんだった。お互いにほんのちよつとだけど、会話をしたんだよね。

三年半ぶりの快拳！ よっしゃ！ と、膝の上で拳を作って気合と共に固く握り締める。

「だから？」

母さんは尚も背中を向けたまま、続きを知りたがる。

「だから、本当に、何も知らないの！ それと、ちゃんとお礼は言ったから。これから先、もしわたしが何か忘れ物をして、絶対に真澄ちゃんに言付けないでね。真澄ちゃんに睨まれるくらいなら、先生に叱られる方がまだよ。真澄ちゃんだって母さんの困っている様子を見て、嫌々申し出たんだって。そうに決まってる」

「そうかなあ？ そんな風にはちつとも見えなかったけど……。低い落ち着いた声で、ゆうちゃんの席は斜め前だからすぐに渡せます、とかなんとか言ってたわよ。にっこり笑ってね」

急に振り返った母さんが、意地悪そうな笑みを浮かべながら、わたしに言った。な、なんで、ゆうちゃんってところをそんなに強調するかな？ まさか吉永君がわたしのこと、そう言ったの？

ないない。ありえない。小学校四年生くらいの時を最後に、ゆうちゃんって呼んでもらった記憶はないんだもの。

だってその後は、ブサイクブッサーとかブス花としか言ってくれなかった。

中学になったらそれすら言わなくなつて。

何もしゃべらないまま、昨日まで過ごしてきたんだよ。

母さんったら、絶対カマを掛けてるんだ。わたしが吉永君のネタを何か話すんじゃないかって待ってるっばい。

その手になんか乗りませんよ。

わたしは、おもいつきり不機嫌そうに顔を歪めて、母さんに言うてやった。

「とにかく、もう二度とわたしの前で真澄ちゃんの話はしないでねっ！　今から宿題と、模試の勉強してくる」

そして、わざとスリッパの音を大きく立てて自分の部屋に向かい、力任せにボタンって戸を閉めた。

3 眞澄ちゃん（後書き）

4・幼なじみの定義

ついさっきまで、本当に勉強するつもりだった。

だって、あさつては全国一斉模試なんだもん。未来の夢を実現させるためにも、がんばらなきゃいけないのに。

でもさ、ちつとも集中出来ないんだよね。

お弁当を包んでいたピンクのバンダナは、すっかりわたしの手の中にある。吉永君が届けてくれたんだもの、すぐに洗うなんてできっこない。

結び目あたりを持つてくれたのかな？ それとも、底の部分に手を添えてくれていた？

あああ……。出来ることなら、ずっとカバンの中にも潜ませておきたい。そんなことしたら母さんに怪しまれるだろうけどね。

だからせめて今夜だけでも、こうやって眺めていたい。

わたしはバンダナをそつと膝の上に置いて、引き出しから二つ折りになったオレンジ色の鏡を取り出した。小さい子がするみたいに前髪をゴムでくくって、まん丸な顔を映してみる。

うーん。これがクラスで一、二を争う素材だって？ ほんとかなあ。

目はそんなに大きいわけではない。妹の愛花の方がパツチリ二重でずっと大きい。

唇も、絵里みたいにプルプルしてないし。顔の大きさだって、これまた愛花の方が小さい。

絵里にも愛花にも敵わない。何もかもが標準的な普通の顔だ。

自分の顔の中で一番気に入っているところといえば鼻かな？ 決して高くはないけれど、形はまあまあいい方だと思う。

ふふふ。やっぱり絵里は、わたしを慰めてくれたただけなんだ。お世辞にも美人とはいえないもの。ちよつとがっかり。

絵里は、二学期中にカレシを作るって宣言したんだ。今年のクリスマスは彼とロマンチックに過ごすんだって。

そしてお姉さんにそのカッコいいカレシを自慢するのが目標って言うってた。

そのためにはもっと女の子らしくなる必要があるので、グロスをつけて、女性であることを意識するように心がけているらしい。

絵里にはすでにお目当ての先輩がいて、その人に振り向いてもらえるよう、最大限、努力するのはもちろん、最後は自分から告白するのもアリとまで言う。

さすが絵里。わたしも見習わなくちゃいけないと思う。思うけど……。

吉永君に告白だなんて、逆立ちしても無理。どうせわたしのクリスマスは、愛花と一緒に家のリビングでクラッカーを鳴らして、チキンとケーキを食べて過ごすことになるんだろうね。

絵里がつけてあげるって言ったあのグロス。わたしには似合わないよ、なんて言いながらも、すっかりメーカーと商品名はチェックしておいた。

今度、同じのを買ってみようかな。学校が休みの日にこっそりつけてみてもいいかも。

わたしは持っていた鏡をたたんでバンダナを手首に巻くと、ベッドの上に寝転がり、昼休みに絵里に問いただされたことをひとつひとつ思い出していた。

「優花。この大嘘つき。すべて白状するのよ。いい？ わかった？」

図書室の裏手にある古びたベンチでお弁当を広げながら、絵里は情け容赦なく、わたしを攻め立ててきた。

でもね、わたしにはわかってたんだ。絵里が本気で怒っているわけじゃないって。だって、いかにも興味津々って顔だったもん。目は口ほどにものを言うってアレ。さっきの母さんみたいにね。

わたしは絵里の熱意に負けて、正直に全部しゃべった。あつ、でもね、吉永君に片思い中のことだけは言わなかった。そこまで教える必要はないでしょ？

そうは言っても、絵里のことだから、気付いちゃったかもしれないけどね。

わたしが、あーでこーでと吉永君との繋がりを簡単に説明し終わると、絵里がのっぴきならないことを口にする。

「それって、あんたたち、幼なじみじゃん。うわー、もえ〜っ！」

幼なじみ？ わたしと吉永君が？

それは違う。絶対に違う。そりゃあ小学校からずっと一緒だけど、それなら鈴木も城山も久木も成崎も、同じマンションに住んでる同級生たち全部が、もえ〜な幼なじみになっちゃう。

幼なじみっていうのは、ほら、アレでしょ？ 朝起きたら勝手に家の中にいて朝ごはんを食べてたり、何だかよくわからないけど、起こしにきたりする、家族同様みたいな付き合いのあるべったりした関係……だよね？

わたしと吉永君は、そんなに親しくないもん。

小さい頃だつて、ちゃんとインターホン鳴らして、おじやましま
すって言いながら遊びに来てたし、一緒にご飯を食べたのだって三
回くらいしかない。

母さんだつて、吉永君のおばちゃんに馴れ馴れしく話しかけたり
しないよ。この間はうちの子がお世話になりました……なんて、結
構他人行儀にお礼なんか言い合ってるんだもの。

これはもう、幼なじみの定義から大幅に逸脱してる。単なる近所
の同級生としか言いようがない。

だから絵里にはしつかりと否定しておいた。でも絵里は、わたし
の言うことなんかおかまいなしに、もえもえくって、ひとり盛り上
がってるんだよ。変なの。

絵里は中学の時に隣の市から転校してきたから、今住んでる家の
近所に幼なじみがいないんだって。だから余計に、わたしと吉永君
の関係がうらやましいってそう言ってた。

そんなものなのかな？ でもひとりでにんまりするような胸キ
ユンの思い出なんて何一つないんだよ。いっそのこと、もっと家が
離れている方が、謎めいててよかったのになってそう思う。

いつから吉永君のことが好きなのかもわからないくらい、昔から
好きだった。六年生の時には、もうすではつきり好きだと自覚し
てたから、それ以前なんだよね。意地悪ばかりされてたのに、なん
で好きになるかなあ？ 今もって、不思議で仕方ない。

天井を見ながらベッドの上でニヤニヤしていたわたしを、愛花の
けたたましい声が突如襲った。

「お姉ちゃん！ お客さん。はやく！ はやく！」

中学三年生の愛花が、あきらかにわたしよりニヤニヤしながら、ベッドから姉であるはずのわたしを、いとも簡単に引きずりおろした。

5・一生の不覚

わたしが愛花と一緒に部屋から出ると、玄関で母さんと誰かがしゃべっているのが見えた。どうもありがとつと言いながら、頭をペコツと下げた母さんの肩越しにわたしの目に映った人は……。

な、な、なんで、吉永君が、そこに？

「あらつ、優花。ちょうどよかったわ。真澄ちゃんがね、ぶどうを持って来てくれたのよ。今年もおじいちゃんの家畑でたくさん収穫できたんだつて。毎年頂いてるでしょ？ さあ、優花も真澄ちゃんにお礼を言つて」

わたしはドキドキしてるのを悟られないように極めて平静を装つて、短くありがとつだけ言つた。そして、横でいたずらっぽい目をしてニツと笑う愛花を睨みつけるのも忘れずに。

いつも愛花は、わたしが教えたわけでもないのに、お姉ちゃん好きな人は真澄ちゃんでしょ？ とひやかしてくる。

年の近い姉妹だと、お互いのことが何でもわかつちゃうのかな？ 愛花にしてみれば、吉永君に会わせてあげようと気を利かせたつもりなのかもしれないけれど、今日はいくらなんでもタイミングが悪いよ。

お弁当事件があつたばかりなんだよ。こんな風に顔を合わせるのつて、やっぱり気まずい。

なのに吉永君が、どういうわけかいつものふてぶてしい態度は微塵も見せずに、俯きながら、どうもとわたしに返事をするのだ。どうして？ なんか調子が狂う。

「久しぶりに一緒に夕食でもって誘ったんだけど、真澄ちゃん、今から塾に行くんだって。誰かさんと違って偉いわねえって、言ってたところなのよ」

一緒に夕食って……。小さい頃とは違うんだよ。今は吉永君と仲がいいわけでもないのに、勝手に夕食に誘うだなんて。母さん、どう考えてもおかしいよ。

吉永君、いつまでもこんなところにいなくていいから、早く塾に行って。

わたしは、どうしようもなく申し訳ない気持ちになって、心の中でごめんねと誤りながら、玄関にたたずむ吉永君をそっと伺い見る。

あれ？ 吉永君が笑った。確かに今こっちを見て、口元を緩めてにっこりしたのだ。

わたしもつられてやや引き攣りながらもこつと微笑み返した。その後も、吉永君は、どこか笑いを堪えるような感じで、時折肩が震えている。

なんでそんなに機嫌がいいの？

「それじゃあ、失礼します」

吉永君が母さんに軽く会釈をする。

「お母さんにもよろしく伝えてね。わざわざどうも、ありがとう」

母さんは吉永君を玄関先で見送り、戸を閉めた直後、わたしを見てプツとふき出した

「あら、やだ。優花のその前髪、どうしたの？」

「あははは！ ほんとだ。お姉ちゃん、ウケる。手首のバンダナもイミフだし。怪我でもしたの？」

お腹を抱えて笑い出す二人を無視して、わたしは大急ぎで洗面所に駆け込み、上半身を鏡に映してみた。

あ、ありえない……。

そうだ、さつき鏡を見た時、前髪を束ねて頭のとっぺんで結んだんだ。それに手首にバンダナもつけたまま……。

こんな格好、小学生ですらやんない。今どきの子はもっとおしゃれだからね。

この姿を吉永君に見られたってこと？ だから彼、笑ってたんだ。

わたしはその後、極度の自己嫌悪に陥り、夕食の母さん特製の串カツがほとんど喉を通らなかった。

翌朝わたしは、ベッドの中で身体を丸めて、ため息ばかりついていた。高校に入学して初めて学校を休んだのだ。

何度も何度も携帯を手にして、今何時か確認する。なのに、さつきから三十分しか経っていない。二時間目の授業が終わったところかな？ みんな、何してるんだろう。

吉永君も、元気に授業を受けてるのかな？

母さんはいさつき、仕事に行ったばかりだ。学生時代の友達が経営しているインテリアショップに、週に三回、手伝いに行っている。

る。

わたしがタベあまり食べなかったものだから、てつきりどこか身体具合が悪いと思い込んでいる母さんが、心配そうにわたしのおでこに手をやって、学校には連絡しておいたからね、と気遣いながら仕事に向かったのだ。何かあったらすぐに電話しなさいよと言って。

母さん。嘘ついて、ごめんなさい。本当は、どこも悪くないんだ。ただ、今日はどうしても学校に行きたくなかった。吉永君に会いたくなかったから。

昨日のあのひどい格好を見られたんだと思うと、玄関から一步たりとも外に踏み出すことが出来ない。いったいどんな顔をして彼に会えっていうの？

多分、明日は行けると思う。うつん、絶対に行く。だから、今日だけはわがママを許して……。

わたしは、母さんが用意してくれていたおかゆを食べて、冷蔵庫から冷えたぶどうを出してきた。黒い大粒のそれは、店で売っているのとは比べ物にならないほど甘くて、果汁がたっぷりあふれ出す。毎年、この時期になると吉永君ちからやってくる、大きなぶどう。わたしは果物の中で、このぶどうが一番好きかもしれない。

昼のバラエティー番組を見て、そのまま連続ドラマをつけっぱなしにしていたけど、ちっともおもしろくない。夏休みに母さんと愛花の三人で見た時は、あんなに感動して泣きながら見ていたのに。

学校のことばかりが気になる。やっぱり、休まずに行った方がよかったのかな。どっちみち吉永君とは学校では何の接点もないんだし、これから先もしやべることなんてないに決まってるのに、わたしったら何を怯えていたんだろう。

変な格好や最悪の顔なんて、とつくの昔に全部見られてる。今さらよそ行きの姿を見せたって、過去が消えるわけでもないし。だったら、昨日のことなんか気にせずに、堂々と学校に行けばよかったのだ。

そう思ったとたん、俄然元気が出てきた。

明日は模試だ。机の上の本棚から数学の問題集を取り出し、苦手な単元を復習する。わたしは小学生の時に、すでに将来なりたいののが決まっている。

だからそれを実現させるためには是非とも入りたい大学があるのだ。

よし！ がんばるぞ。わたしは、難しい数式と悪戦苦闘しながらも、なんとか集中して勉強に取り組んだ。

携帯からメールの受信を知らせるメロディーが鳴ったのは四時。絵里からだった。

身体、大丈夫？ 帰りにマミと一緒に優花んちに寄るね。

しばらく画面を眺めた後、ふと我に返ったように脳が超高速で回転し始める。

大変だ。こんなことしてる場合じゃない。

わたしは机の上の問題集を慌てて片付けると、ずる休みがバレないように再びベッドにもぐり込み、タオルケットをおでこまで引っぱり上げた。

6・友の見舞い

「意外と元気そうじゃん。安心したよ」

「ほーんと。いつも元気な優花が学校休むんだもの。びっくりしちやった」

ベッドの上に並んで座った絵里と麻美が、まん中に座るわたしの顔を心配そうに覗きながら言った。

「二人とも、わざわざこんなところまで来てくれて、ありがとう」

絵里と麻美の家は、学校をはさんでうちとは反対方向にある。通学定期のないバス路線を使ってここまで来てくれたのだ。なんだか胸がジンとする。

本当はずる休みだったの、なんて口が裂けても言えない。ごめんね、絵里、麻美。

「いつもの優花でよかった。熱出してうんうん唸ってるのかと思ってた。だって、昨日いろいろ聞いちゃったじゃない？ 吉永のこと根掘り葉掘りさ。優花はあいつのこと、あまり良く思っていないのに、あたしたら調子にのって、幼なじみもえゝとか言っただし……。そのこと気にして寝込んでしまったのかななんて思って、責任感じてたの」

そ、そうなんだ。ということは、まだわたしが吉永君を好きだっ
てことはバレてないんだね。

「でさあ、あたし気がついたんだけど……」

今度は何？　わたしは心持ちドキドキしながら絵里と麻美の顔を交互に見る。えっ？　麻美……。顔が赤いよ？　さつきから口数が少ないとは思っていたけど。

「昨日優花が言ってたじゃん？　小学生の時、いろいろ言われていじめられたって」

わたしの左横で赤い顔のまま下を向いている麻美をよそに、右隣の絵里が真剣な眼差しをわたしに向ける。昨日、今から殴りこみに行つてやるって怒りを露わにしていたあの話だ。

「そいつって、吉永のことじゃない？」

わたしの心臓が、ドクツと大きく鳴った。すると麻美も同時に顔を上げたのがわかった。麻美もわたしと同じで、もうすでに吉永君に関することに過剰に反応する体質になってしまったのだろうか？　わたしは言い当てた絵里にしぶしぶうんと頷いてみせる。だって話が嫌な方向に行きそうな気がするんだもの。

「やっぱりね。じゃあそのことがトラウマになって、優花は吉永のことが許せないんだね」

絵里は一人勝手に納得して、話を片づけていく。別に、トラウマじゃないんだけど……。いじめるつたって、ただ、変な呼び方をされただけで、叩かれたりとか陰湿ないじめを受けたわけじゃない。いや、逆にその頃が今までで一番仲が良かったんじゃないかって思っくらいだ。

ある日、学校から家に帰ったら、どっちの親もいなくて、ランドセルを玄関前に置いたまま、二人で隣街の大きな公園に行ったこともあったし、雨の日に階段の踊り場で、集めていたカードの取替え

っこともした。

でも、ここには麻美もいる。吉永君のことが好きだと聞かされている以上、彼との過去の出来事を必要以上に言わない方がいいよね。ここは絵里の思い込みに同意するのが賢明な選択なのかもしれない。

「う、うん。まあね。でもね、トラウマになるほどいじめられたってわけでもないんだ。わたしだって結構ひどいことを言い返してたからね。だから今はなんとも思っていないよ」

「ふうん。それならいいんだけど。でね、優花にちょっと頼みがあるんだ」

絵里はそう言って、麻美に何か目配せをした。それでもなかなか口を開こうとしない麻美に絵里がいら立ち始める。

「ママ、はやく言いなさいよ。ほら、もたもたしないで！」
「わかった。言うから……」

麻美はカールした長めのまつ毛をふるっと震わせて、ようやくわたしの方に向き直った。

「ねえ、優花。その……。昨日あたしの好きな人のこと、絵里から聞いたよね？」

「……うん」

なんでだろう。突然胸が締め付けられるような圧迫感に襲われる。声も掠れる。

きつとあのことだ。麻美も吉永君が好きだったこと。出来ることならば、この先ずつとそれだけは聞きたくなかった。

でも親友である以上、遅かれ早かれこの状況に直面せざるを得な

いのはわかっていた。でも……。その日が今日だというの？

「あたしね、吉永が……好きになっちゃったみたいなの。夏休みに入ってすぐの地区の陸上競技大会で、カレ、二百メートルで大会新記録出したでしょ。あの時、ビビビって来たの。マジでカッコよかったんだから」

記録のことは母さんから聞いた。まるで自分の子どもが快挙を成し遂げたみたいに喜んでわたしと愛花に半分自慢げに知らせてくれたのだ。

わたしも母さんに負けなくらい嬉しかったんだから。

次の日、朝刊の地域スポーツコーナーの小さい一角を、こっそり切り抜いて宝箱に保存しているのは家族の誰にも内緒なんだ。

確かに、吉永君の走りっぷりは凄まじくカッコいい。中学の時の体育祭は、別名吉永祭りって言われるくらい彼の活躍はすごかった。そんな彼の姿に麻美が心を奪われるのも仕方ない。

「優花が吉永と同じ中学出身なのは知ってたけど、まさか住んでるところまで一緒だなんて今朝まで知らなかったんだから。優花ったら黙ってるんだもの。もっと早く言ってよ」

「だって、別に言う必要なんてないでしょ？それに、ママが吉永君のことを好きだって知ったのは昨日だよ」

「それもそうだね。ふふふ。でもさ、今日絵里に聞いて、ひっくり返しそうになるくらいびっくりしたんだから。最近は部員の住所録もコピーしちゃダメって言われるでしょ？電話番号しか知らないんだもの。いきなり住所とか聞けないし。でね、優花の知ってる範囲でいいから、カレのこと、いろいろ教えて欲しいの。カレがどんな食べ物が好きだとか、好きなアーティストが誰だとか。あまり聞きたくないけど、カノジョがいるのかどうなのか……とか。もし、昔の辛いことを思い出すようなら無理は言わないけど……」

目を潤ませながら、切実に訴える麻美。いくら無理は言わないって言っても、このままはいそひそひですかって、目の前の麻美の願いを退けるわけにはいかない。

「まさか優花。優花も吉永が好きってことはないよね？ もしそうならあたし、優花にとってもひどいこと……言っちゃったかも」

麻美……。どうしよう。本当のこと言っただ方がいいのかな？ わたしも吉永君が好きだって。でも、もしそんなこと言ったら、わたしたち、これからどうなるの？ もう親友でいられないよね。

7・泣かない

「ま、マミだったら。なに言ってるのよ。そんなわけないじゃん。吉永君はね、わたしなんか全く眼中にないんだから。だって、カレとはもう三年半もしゃべってないんだよ。あ、昨日のお弁当事件は別ね。だからそんなのありえないって。わたしに遠慮することなんてないんだってば」

わたしはありったけの笑顔を振りまいて、哀しそうな目をした麻美を元氣付ける。

「そうかもしれないけど……。あたしが聞いているのは吉永の態度じゃなくて、優花の気持ちだよ。本当にいいんだね？　あたしが吉永を好きになっても」

「うん。もちろん。わたしはこれからの未知なる出会いに胸ときめかせてるんだから。マミを応援……。するよ」

「わかった。ありがとう、優花。あたし、一生懸命がんばる。カレにあたしのこと好きになってももらえるようにがんばってみる」

麻美がきつぱりとそう言い切った。これでいいんだ。もしかしたら吉永君も、マネージャーとしての麻美ではなく、ひとりの女の子として意識し始めるかもしれない。

そうになったら……。

吉永君は麻美と付き合うことになるのかな。

彼のあの真っ直ぐな視線が麻美だけに注がれる日が……。来るんだ。

「マミ。そうでなくちゃ！　あたしも先輩へのアタック、ますますがんばっちゃう！　優花も早くいい人見つけなきゃね。三人して、おもいつきりロマンチックなクリスマスを迎えるの。いいと思わな

い？」

絵里が腕をのばしてわたしと麻美の両方を引き寄せるように抱え込む。わたしは鼻の奥がツンとするのをなんとか我慢すると、両手を広げて、絵里と麻美の肩を抱き寄せた。

麻美は優しく、控えめで、それでいてとっても頭のいい女の子なんだ。

数学のわからないところも先生よりわかりやすく教えてくれるし、忘れ物をしたら体操服だったためらうことなくすつと貸してくれる。将来はお父さんの後を継いで、医者になるって言ってた。だから今やってる陸上部のマネージャーも高一の間だけって約束なんだって。

そんな麻美の頼みを即座に却下するなんて出来るわけがない。

それに、わたしだって吉永君にただ片想いしてるだけなんだもの。吉永君はわたしのカレシでもなんでもないのだから、麻美の彼への想いを咎める理由はどこにもない。

わたしは、本棚から中学の卒業アルバムを出してきて麻美に渡した。そして吉永君のクラスのページをめくって開く。

「写真は卒業アルバムくらいしかないけど……」

麻美が目を輝かせて写真に見入っている。絵里もどれどれと言って身を乗り出して覗き込む。

「きゃあー。かわいい。この写真撮ったときって、去年の秋くらいだよ。一年くらいしか経ってないのになんか幼く見える。カレシってハーフっぽいよね」

「マジで？ めっちゃかわいいじゃん。あたしも吉永に乗り換えよ

うかなー」

「もう、やめてよ。絵里は津久田先輩でしょ？ 吉永はあたしのものなんだから。絵里には渡さない！」

わたしはそんな二人のやりとりを聞きながら、小学校の卒業アルバムもあちこち引つ張り出して探していた。そこにはもったかわい
い吉永君が写っている。麻美にも見せてあげたい。

だって麻美があんなにも嬉しそうに笑ってるんだもの。吉永はあたしのものだって。

ああ、苦しい……。胸だけじゃなくて、胃も腸も、内蔵全部がギョってなって、息すらも出来なくなるくらいに苦しくて痛い。

やだ。目の前が霞んでくる。泣きそう。

「な、なんか、食べる物、持って来るね」

わたしはやつとの思いでそれだけ言って、顔を見られないようにして部屋を出た。何も知らない二人の明るい笑い声が、妙にクリアにわたしの耳に届く。

絶対に泣かない。わたしは天井を仰ぎ見て歯を食いしばった。そして洗面所の鏡に映る自分に向かってもう一度、泣かないと宣言する。

水でバシャバシャと顔を洗い、溢れそうになる涙を押し戻すことにどうにか成功した。

台所で冷蔵庫からジュースを取り出す。すると昨日吉永君が届けてくれたあのぶどうが、目の前にでんと姿を現すのだ。これだけはわたしのもの。麻美には悪いけど、あげたくない。わたしは見なかったことにしてそつと冷蔵庫を閉じた。

なのに次の瞬間、また冷蔵庫を開けていた。一瞬ためらったけれど、実が外れないようにそっと両手で抱えてボールに入れ、水道水で洗い流す。

大きめの皿に盛り付けて、ジュースとクッキーも一緒にみんなの待っている部屋に運んだ。

「お待たせ」

「わあっ！　優花、ありがとう。おいしそうだね？　このぶどう」

絵里が即座に手を出す。

「絵里！　ちよつと待った！　まずはママから。実はこれね、吉永君ちのぶどうなんだ。昨日、母さんがお裾分けしてもらって……」

吉永君が自ら届けてくれたとは、さすがにこの場では言いにくい。こんな言い方になったけど嘘は言っていないよね。

これで最後の房になるけど、わたしはまた来年だって食べられる。毎年食べられるんだからと言い聞かせて目の前の二人に差し出した。今日は麻美が全部食べていいからね。甘いんだよ。とってもおいしいの。

麻美が一粒食べた後、絵里も待ってましたとばかりにピンポン玉くらい大きい実を頬張った。

「おいしい。これ、最高！　そっか、吉永のおじいちゃんのぶどうなんだね。ママ、良かったね」

「うん。優花、ホントにありがとう。優花も食べて」

「うっん、わたしはいいんだ。さっきも食べたからね。ママに喜んでもらえて嬉しい……」

また目の奥が熱くなってきた。ダメだよ。絶対泣いちゃダメ。今ここで泣いたりしたらすべてが水の泡になる。唇を噛み締めて不自然に瞬きを繰り返す。

その時だった。玄関で騒がしい声がしたのは。

ほら、早く入ってよ。お姉ちゃんなら、部屋で寝てるから。

お、おい！ やめろよ。あいちゃん。

なに言ってるのよ。自分の目でお姉ちゃんが元気かどうか確かめなさいよ。真澄ちゃんの意気地なし！

絵里も麻美も、そしてわたしも。互いに顔を見合わせたまま、ドアの向こうの会話に黙って聞き入っていた。

8・おでこの代償

「お姉ちゃん。ただいま〜！ 具合はどう？」

愛花がわたしの部屋のドアをノックもせずに、いきなり入ってきた。

「あつ……。えっと、絵里さんと、マミさん。来てたんだ。こんにちは。いらっしやい」

愛花。いらっしやいなんて言ってる場合じゃないでしょ？　なんで愛花の後ろに、吉永君が突っ立ってるわけ？

マミなんて、ポカンと口を開けたまま、完全に固まってるよ。

「ほらあ。真澄ちゃん。そんなとこにいないで早くこっちに来て。あのね、お姉ちゃん。ついさっき、エレベーターで真澄ちゃんと一緒にあったんだ。真澄ちゃんったら、ゆうちゃん、大丈夫？　なんてマジで心配そうに聞くんだよ。そんなに気になるんだったら自分の目で確かめなさいって、ここまで連れて来たの。大変だったー。それじゃあ、ごゆっくり……」

そう言っただけで部屋を出て行ったはずの愛花がまたもやすぐに舞い戻って来て、ドアの隙間から顔だけ覗かせる。そしてとんでもないことを口走るのだ。

「絵里さん、マミさん。真澄ちゃんとお姉ちゃんって、周りがイライラするくらいもどかしいの。とつとくつつけちゃってください。よろしくー！」

愛花はそれだけ言うと、瞬時にそこから立ち去る。なんという逃げ足の速さ。でもこのまま見逃すわけにはいかない。なんで、麻美の前でそれを言う？ 麻美の表情がみるみる曇っていくのがわかる。

「あ、愛花っ！ 待って！」

「あいちゃんっ！ こら、待て！」

わたしと吉永君が愛花を捕まえようと部屋を出たのはほぼ同時だった。

「愛花！ 待ちなさい。わたしの友達に何でそんないい加減なこと言うの？ いますぐ謝って。真澄ちゃんにも、絵里にも。そして、マミにも！」

愛花の腕をひっ捕まえて、大きく息をしながらなんとかそれだけ言った。

あ……。わたし今、真澄ちゃんって言った？ ど、どうしよう。

絵里と麻美にも聞こえたよね？

でもそんなことを気にしてる場合ではない。とつとくつつけちやっってくださいって……。なんでそんな突拍子もないことを言うんだろ？ 麻美が……。麻美がなんて思ったか。

「お姉ちゃん。なんでそんなにムキになってるの？ 別にいいじゃん。あたし、嘘言ってないよ。あたしは真澄ちゃんが本当のお兄ちゃんになってくれたらいいのになって、小さい頃からずっとそう思ってたの。二人がくつつけばあたしの夢が叶うし……」

最後まで言い終わらないうちに、わたしの右手が愛花の左頬を打っていた。ハッとしたように愛花がわたしを見る。

「おい、何するんだ！」

わたしの後ろにいた吉永君が打った右手を掴んで、わたしを愛花から引き離れた。

その時、玄関のドアがパタンと閉る音が聞こえた。

「マミ！ 待って！」

絵里が玄関に向かって叫ぶ。

「た、大変。優花。マミが外に飛び出しちゃった。あたし、追いかけるね。そ、それじゃあ、今日はこれで。優花。お大事に。吉永。優花のこと、よろしくね」

絵里が顔面蒼白になりながらも慌てて靴を履き、麻美を追って外に駆け出す。

「お姉ちゃんのバカ！ お姉ちゃんなんか大ツキライ！」

次は目の前で左頬を押さえていた愛花が大声でわめきながら、玄関を飛び出した。

いったい何が起こったの？ わたしの目の前から、次々と人が消えていく。わたしはとたんに足の力が抜けて、その場にへなへなと座り込んだ。

その瞬間、わたしの右手を掴んでいた手がそつと離れた。リビングへと続く廊下にへたりこんだわたしを見下ろすのは、吉永……君？

「おい、大丈夫か？」

わたしの頭上に注がれる声の源は、間違はなく吉永君だった。わたしは力なく、遥彼方にある彼の顔を見上げる。

「吉永君……。ごめんね。愛花のこと、許してくれる？」

「許すも許さないもないよ。あいつ、俺達のことかなり誤解してるみたいだな。それとも、おまえ……。何か言ったのか？ あいちゃんに何か吹き込んだ？」

それって……。どういうこと？ わたしが愛花に、吉永君との関係を誇張して言ったとでもいうの？ そんなわけないじゃない。

「何も言わないわよ。だって、わたしたち。その……。昨日まで、何もしゃべらなかつたんだし、一緒にいることだつてなかつた。それなのに、いったい何を吹き込むって言うの？」

「それもそうだな。おまえがそう言うなら、信じてやるか。あいちゃんの思い込みも、あそこまでいくと、たいしたもんだ。で、マネージャーも飛び出したわけだけど。どうなってるんだ？ おまえのダチは」

そうだ。こんなことしてられない。わたしも追いかけるな。愛花もどこに行つたんだろう？

「わたし、行かなきゃ。愛花だって、捜さない」と

わたしは立ち上がって、玄関に向かおうとした。なのに。吉永君の手が、再びわたしの腕を掴んだ。

「マネージャーは本城に任せておけばいいんじゃないか？ あいつならうまくやってくれるよ。それにあいちゃんだって、もう中三だろ？ 迷子になるような年じゃない。好きにさせてやれば。今おま

えの顔を見たら、また反抗するぞ」

「で、でも」

「おまえ、具合が悪いんだろ？ そんなに心配なら、俺が捜してこようか？」

「いいよ。そんなの悪いし。そうだ！もしかしたら、母さんの仕事場に行ったのかもしれない。商店街のはずれのインテリアショップなんだ」

前にも留守番中にケンカをして、愛花が母さんの所に駆け込んだことがあった。

学校を休んだわたしが外を走り回るのも、おかしい話だ。ここは吉永君の言うとおり、様子を見たほうがいいのかもしれない。

「あとで、母さんに電話してみる。愛花だって無茶はしないよ。きつと」

わたしは自分自身に言い聞かせるようにして、こくりと頷いた。その時、自然と腕に視線が行って、まだ吉永君の手が添えられたままであることに気付く。

そのまま吉永君に視線を移す。すると彼もそのことに気が付いたのだろう。あわてて手を離し、少し頬を赤らめながら、参ったなあと頭を掻いている。

久しぶりに見る、彼の照れた顔。なんだかかわいい。昔を思い出す。

「明日模試だろ？ おまえ、学校行けるのか？」

わたしと関係ない方向を見ながら、吉永君が突然そんな話を振ってくる。

「う、うん。行くよ」

「身体は大丈夫？ 熱は？」

「……ない」

吉永君がわたしの方を見たかと思うと、だんだんいつものように意地悪な顔つきになっていく。

「ずる休み……か？」

やだ。バレた？

「もしかして……。昨日、俺が見たから？」

わつ。完全にバレてる。でも、認めたくない。そんなの悔しいじゃない。

「ち、ちがうもん。吉永君が何を見たのか、し、知らないけど……。ホントに身体の調子が悪かったんだもん。でも、絵里とマミの顔を見たら、元気になって、それで……」

「わかった。俺は、何も見なかった。それでいいのか？」

「も、もちろん。わたしは、何も気にしてませんから。おでこくらい見られたって、平気だもん」

わたしは廊下の壁にもたれながら、プイと顔を横にそむ向ける。

「それと……」

な、なんなの？ わたしのすぐ横に並ぶようにして壁にもたれたまま、首だけ曲げて顔を寄せてくる。吉永君……。近すぎるよ。恥ずかしいってば。

9・今日だけは

「俺のこと、よしながくんって呼ぶのがおまえのマイブームなのか？　じゃあ俺も、いしみずさんって呼んだ方がいい？」

「そ、それは……。別に、どっちでも」

わたしの右頬の数センチ先まで近付いた吉永君の顔なんて、到底見れるはずも無く、前を向いたまま答える。心臓に悪いよ。全く……。

石水さんか……。そう呼ばれたような呼ばれたくないような。でも、学校でゆうちゃんって呼ばれるのはもっと恥ずかしい。

「じゃあこうしよう。学校では石水って呼ぶ。帰ってきたら今までどおりってことでどう？　だからおまえも、家ではそのよしながくんっての、やめろや。どこかに別人のよしながとやらがいるみたいで落ち着かない」

「わ、わかった。そうする」

ようやく吉永君の顔が離れていった。彼に気付かれないようにそっと深呼吸をする。

それにしても……。なんて不思議な光景なんだろう。今日は朝から学校を休んで、絵里と麻美がお見舞いに来てくれて……。

愛花の暴走に振り回されたあげく、今こうやって、わたしの家の廊下で吉永君と話している。どう考えても夢の中の出来事のように、これが現実起こっていることだなんて信じられない。

さっき愛花が言ってたけど、吉永君がわたしのこと心配してくれてたってことも、もちろん、本当だなんて思ってたない。

だって、つい昨日まで、目すら合わさないほど吉永君は冷たくて、

わたしのことなんかちつとも見てなかったんだよ。ほんのちよつぴりも。

吉永君ったら、いつのまにかこんなに大きくなって、わたしの背もとつくに追い越して。わたしの知ってる吉永君じゃないみたいだ。でも、今日が終われば、またいつものようにお互いの気持ちが変わることなんて一切なくて、それぞれの高校生活を過ごしていくのだと思うと、今のこのひと時がとても大切に思えてくる。

「ずっと聞きたかったんだけど……」

「何？ よし……いや、真澄ちゃん」

たった今決めたばかりなのに、また吉永君って言ってしまうそうになる。だって、彼に直接呼びかけることはなくても、心の中で、毎日吉永君って言い続けてきたんだよ。

慣れるまで、少し時間がかかりそうだ。

で、何を聞きたかったのかな？ ちょっと気になる。

「おまえさあ、俺のことずっと避けてただろ？ エレベーターも乗らないし。俺、かなり嫌われてるって思ってた。いや、まだそう思ってる。昔、いろいろいじめたりもしたし、やっぱ根に持ってるのかなってな。その辺は、どうなんだ？」

「どうって……」

なんでそうなるの？ わたしが吉永君を避けてたって？ そんなのありえない。それを言うなら、全く逆だよ。

「今もこうやって俺といるのが、実はうざいとか思ってたない？」

「何言ってるの？ それは違う。わたしは真澄ちゃんのこと、そんな風に思ってたないよ。真澄ちゃんこそ、わたしを避けてたじゃない。わたしさ、絶対真澄ちゃんに嫌われてるって、ずっとそう思ってた。

エレベーターに乗らないのだって、その……。運動のためだよ。わたし運動部じゃないしさ、身体がなまっちゃうでしょ？」

まさか吉永君の住んでる三階を自分の足で踏みしめたいからだなんて、本人の前で言えるわけないしね。

「それ、ホントなのか？」

吉永君。何もそこまで目を見開かなくても。ってことは、わたしたち、お互いに勘違いしてたってこと？

「なーんだ。そうだったのか。俺はてっきり……。まあいいや。じやあ、仲直りってことで」

吉永君が手を出してきた。もしかして握手？ 吉永君って、こんなキャラだったっけ？ もっとこう、やんちゃな感じで、口下手で……。

三年半という月日が、こんなにも人を成長させるのだろうか？

わたしはためらいがちに手を出し、そつと彼の手を握った。二秒くらい握り合って、手を離す。

なんか心がほっこりしてきた。そうか。思い過ごしだったんだ。わたしのこと無視してたわけじゃなかったんだ。

頬の緊張が取れて、顔がにんまりしてしまう。照れ隠しにえへへと笑って、向かい合ってる吉永君を見上げた。

あれ？ どうしたの？ 今、仲直り……。したよね？ またいつもみたいに怖い顔になってる。

「俺、そろそろ帰る。そうだ。ゆうの携帯」

携帯？ いったいどうするつもり？ わたしはジャージのポケットから白い携帯を取り出す。
そして……。

固まった。

今、ゆうって言ったよね？ あれれ？ ゆうちゃんじゃなくて、ゆうなんだ……。吉永君が初めてわたしのこと、ゆうって呼び捨てにした。

ちよつと。いや、かなり嬉しいかも。

「どうした？ 俺、変なこと言った？」

しまった！ あんまりびっくりしたものだから、吉永君の顔、じつと見つめちゃったよ。

「い、い、いや、別に。なんでも……。ないよ。携帯、だよね？」

なんか、わざわざ名前のことを聞き返すのも恥ずかしくて、そのまま知らないフリをして携帯を差し出した。

「……もう俺達、ちゃん付けで呼ぶような年でもないだろ？ なんかおまえも俺のこと呼び捨てでいいけど？」

えっ……。わたしの心の中、見透かされてる。やだ。恥ずかしすぎるよ。吉永君って、確信犯だよ。このわたしが吉永君のこと、ますみなんて呼べるわけがないのも知ってる目だ。

「あ、いや、その……。わたしは真澄ちゃんでもいいよ。えつと、も

しかして、赤外線？」

なんなの？ この甘ったるい空気は。わたし一人が舞い上がってる。完全に。

わたしは早くこの話題から遠ざかりたくて、携帯に意識を集中する。

「ああ。おまえのメルアド知らないしな。あいちゃんを見つけたら連絡する。おまえもあいつと連絡取れたら、俺に知らせて」

「うん。わかった」

そうだった。わたしたち、お互いの携帯アドレスを知らないんだ。というか、クラスの女子は多分全員吉永君のアドレスを知らないはずだ。

男子にも滅多に教えないって、これは結構有名な話だったりする。二つの携帯をつき合わせて操作をした後、ちゃんと表示されるか確認して、じゃあと言って家を出て行った。

わたしはまだ雲の上を歩いているようなふわふわした感覚を引きずっていた。

昨日のピンクのバンダナどころの騒ぎではない。

ついさっき、吉永君の手を握ったのだ。たとえそれが握手という挨拶の一種であつたとしても、大きくて温かい吉永君の手が、わたしの手を握り返してくれたのは夢でも幻でもない。

麻美、ごめんね。あれは仲直りの握手だからね。わたしは麻美の恋を応援するって決めたんだから、今日を限りに吉永君のことは忘れるよう努力する。

あきらめるのは無理かもしれないけど、麻美を悲しませるような態度だけは絶対に取らないって誓う。

だから……。

今日だけは、吉永君のことを想う気持ちを許して欲しい。彼のアドレスも愛花のことが落ち着いたら、消去する。

わたしは心の中で麻美に謝ると、愛花の居所いじょを確かめるため、仕事中の母さんに電話をかけた。

10・よかつたな

朝から一度も目を合わせずにプイと横を向いたまま家を出た愛花を、こつそりリビングの陰から見送ったわたしは、忘れ物がないか何度もカバンの中を確かめて、いつものように母さんに行つて来ますと声をかけた。

今日は学校に行くつて決めた。麻美の誤解を解くためにも。

昨日愛花は、やっぱり母さんの仕事場に駆け込んでいた。負けず嫌いな愛花はわたしにぶたれたことは一言も言わずに、ただ悔しそうに泣き続けていたらしい。

でも、すぐに姉妹げんかだと察した母さんは、夜寝る前にこつそりわたしの部屋に入ってきて、けんかの理由を尋ねた。

だからといって、いくら母さんでも、吉永君のことが原因で愛花をぶつただなんて言えるわけもなく。

どうでもいいことで言い合いになって、つい手が出してしまったと話したら、明日から一週間、夕食の支度を手伝うようにって罰を言い渡された。

ここで反抗して、今日あったことを全部話すことになったらもつと大変だ。わたしはしおらしく、わかったと返事をして、なんとか許してもらったのだ。

ちょっと不本意だったけど、しかたないよね。

ぶつたのは本当だし、愛花も悪気があったわけじゃないんだし。

わたしは、昨日のことをいろいろ思い出しながら、とぼとぼとマンションの階段を下りて行つた。そして三階の踊り場に着いた時、左手の廊下を見るのを……やめた。

今日は麻美に昨日のことを謝る予定だ。夕べ絵里から電話があった、麻美に事情を説明する段取りもすでに決めている。

愛花の早合点でショックを受けた麻美にせめてもの償いだと思って、吉永君の家を見ないようにしたのだ。なのに……。

それは、わたしが三階から二階に下りかけた時に起こった。

「ゆっ」

遠くで誰かがそう呼んだような気がした。まさかそんなはずはないと思ってそのまま下りようとしたら、またもや聞こえるのだ。「ゆっ」って。

階段のまん中で立ち止まったわたしは、ゆっくりと後ろを振り返った。そこにいたのは。

吉永君……だった。

「ピッタリだな。俺の予測どおりのタイミングでおまえが下りてきた」

意味不明なことを言いながらも、やたら機嫌のいい吉永君。いったいどうしたの？ わたしが不思議そうに彼を見ていると、彼もまた同じようにわたしを覗き見る。

「何でそんなに驚いてるんだよ。別に待ち伏せしてたわけじゃないから。わかるんだよ。おまえの下りて来るタイミングが」

い、いや。別に待ち伏せしてたとか、そんな風に思ったわけじゃない……。だから。そうじゃなくて、そんな真っ直ぐな目をしてわたし

を見ないでよ。

せつかく今日から吉永君のこと、これ以上好きにならないように努力しようって決めたのに。

……だめだ。

絶対、昨日より好きになってる。

「よかったな」

「……」

よかった？ いったい何がよかったんだろう。吉永君の言うことは謎めいている。わたしが母さんにあまりきつく叱られずに済んだこと？ でもそのことはまだ彼には言っていない。

「おまえ、鈍くない？ だから、あいちゃんが見つかってよかったなって言ってるんだろ？」

「あつ。そうか。そうだよ。ね。なーんだ、そのことか」

昨日愛花が見つかったと吉永君にメールで知らせたら、「そうか」ってたった一言返事が返ってきたんだった。

吉永君との初めてのメールはその一言だけ。そりゃあそうだ。付き合ってるわけでもなんでもないんだもの。用件さえ伝え合えば、それ以上は必要ない。

本当ならこのたった一言のメールも宝物にしておきたいんだけど、今夜で消去するつもりだ。もちろん、アドレスも一緒に。

「おまえさ。やっぱ、昔と全然変わってないな」

「えへへ。みんなにもよく言われる」

母さんにも父さんにも。愛花にまで言われてる。進歩がないって。

ついに吉永君にまで言われてしまった。これって、さすがにヤバイよね。

「なあ、ゆう……」

「な、何？ 真澄ちゃん」

ゆうって呼ばれるたびに心が震えて、なんか、涙が出そうになる。

「俺、空白を埋めたいんだけど……」

また……。そんな難しいこと。

わかんないよ。何なの？ 空白って。

吉永君が横に並んで一緒に階段を下りてるってだけでも、緊張のあまり心臓が口から飛び出しそうなのに、なんか、わけのわからないことを言われて、拳句、頭の中が真っ白になって……。あろうことか、階段から足を踏み外し、身体が大きく揺らいた。

「おい。しっかりしろよ」

「ごめん。……ありがとう」

突然差し伸べられた手にしがみつくと、その反動で吉永君に抱きかかえられるような格好になる。慌てて体勢を立て直し、瞬時に彼から離れた。

心臓が早鐘を打ち、息をするのも苦しくなる。何やってるんだろ、わたし。

「おまえ、相当ふらついているぞ。本当に具合が悪かったのか？ 無理するなよ。昨日はする休みだなんて言ってごめん。そうだ。カバン、こっちによこせ。持ってやる」

昨日麻美からもらった沖縄土産のゴーヤのマスコットをぶら下げたカバンを、ひょいと持ち上げて、瞬く間にわたしの手から奪っていく。

瞬間、何が起こったのか、全くわからなかった。

何も持っていない自分の手を見てようやく状況を理解したわたしは、片手に二つのカバンを重ねて持った吉永君に先導されて、そのまま一緒にバスに乗り込んだ。

11・わたしのカバン

バスはいつの間にか学生で満員になっていた。そして同じ学年の顔見知りの何人かがこっちを見ている。

先にバスに乗り込んだ吉永君が窓際で、わたしは通路側。もちろん二人掛けのシートに並んで座っているわけで。

初め、隣に座るのを少しためらったのだけど、わたしのカバンを持っている彼と離れるわけにもいかないしね。

わたしは、座ってもいい？ と了解を取るように吉永君の顔を見て、なるべく身体がくっつかないように、端っこにそつと腰を下ろした。

だからと言って、何を話すでもなく、お互い黙り込んだまま前を見て座っていたんだけど。それまでは誰の視線もわたし達に注がれてなかった。たまたま偶然、吉永君と並んで座ったくらいにしか見えなかったのかな？

わたしが吉永君の膝の上にあるカバンに手を伸ばして定期入れを取り出そうとした時だった。

カバンの外側のファスナーを半分くらいまで開けると、急に吉永君の手が伸びてきて中に手を入れてわたしの定期入れを探り当てる。そしてわたしにそれを手渡してくれたのだ。

「あ、ありがとう」

わたしはそれだけ言うのが精一杯で、受け取った定期入れをしっかり握り締めて再び黙り込む。すると、すぐ横に立っていた男子生徒が腰をかがめ、聞き覚えのある声でわたしたちにささやいた。

「おまえら、いつから……」

いつからって……。えっ？ それって、アレだよ。いつから付き合ってるんだって意味だよ。どうしよう。勇人君が誤解してるよ。

「勇人。おまえの予想がはずれて悪いが、こいつ、病み上がり。フラフラして階段ずっこけそうになって。放っておけないだろ？」

間にわたしが座っていることなどおかまいなしに、吉永君と勇人君が顔を寄せてこそこそ話している。

「ふーん。そういうわけか。いやな、俺はてっきり……」

「んなわけないだろ。こいつはただの……」

そこまではつきり否定しなくても。あの、わたし。ここにいるんですけど。途中で運転手さんのアナウンスが入って、吉永君の言葉が聞き取れなかったけど、ただの同級生って言ったのかな？

真実だけど、そこまできっぱり言い切られるとちょっと寂しい気がする。

この吉永君に勝るとも劣らないイケメン君、絵里が言うところのイケメン度ベストスリーの一人でもある成崎勇人君も同じマンションに住む同級生だ。確か、麻美と同じクラスだったはず。

わたしの住んでいる地域は、高校受験がわりと穏やかなところなんだ。成績がクラスで中程度以上だと、好きな高校を選択できる。総合選抜制度ってやつ。

わたしはもうすでにバレバレだけど、公立受験組ギリギリライン

の悲惨な成績で、奇跡的に吉永君と同じ高校に滑り込めたクチ。

特に希望がなければ、家から近い高校に振り分けられるので、中学でトップの成績だった勇人君もわたしと同じ高校……なんて不思議な現象が起こる。

同じマンシヨンの同級生の八割くらいが一緒の高校に通ってる。

隣の市みたいに、単独選抜のシステムだったら、わたしは絶対に吉永君と勇人君の行く高校に通えなかったはずだ。

でも残念なことに愛花の学年の受験から、単独選抜に変わるんだよね。

なのでわたしは、最後のラッキーガールってわけ。

バスがアイドリングストップして、車内が一瞬静かになった。高校前に着いたのだ。乗っている客のほとんどが我先にと降りていく。わたしが先に立たないと吉永君がシートから出られない。その前にカバンを受け取らなくちゃともたついていると、吉永君が早く行けという。でも、カバンが……。

「教室までもって行ってやるから、さっさと行け。このグズ！」

そう言っつて、カバンで少し乱暴に背中を押される。ついに吉永君の本性が姿を現したのだ。でもまあ、つい数日前まで、一言もしやべらなかつたんだもの。

それに比べたら、これくらい平気。照れ隠しにわざとそんな態度をとってるのかもしれないしね。

わたしは口元を緩ませながら、定期を機械に通し、取り出し口から引き抜く。そして、バス停に降り立った。

「優花！ おはよー」

反対車線にある向かいのバス停から手を振りながら絵里と麻美が駆けてくる。

「あつ、絵里、マミ！ おはよ。昨日は……ごめんね」

わたしは自分のおかれていますとんでもなく非日常的な状況など、どこかに忘れ去ってしまい、すっかり絵里と麻美に気を取られてしまっている。

「ううん。ちつとも。ほら、マミ。あんたも謝らなきゃ。何も言わずに勝手に優花の家を飛び出したりしたんだもの。優花もマミのこと、すっごく心配してたんだよ」

絵里に諭された麻美がゆっくり顔を上げて、多少ぎこちない様子を残しながらも微笑みながらごめんねと言った。
よかった。麻美が笑ってる。絵里から話を聞いたのだろう。少しは誤解が解けたみたいだ。

「今日はわたしのおごりで、放課後いつものバーガーショップに行こうよ！ マミの部活が終わるの、待ってるからね」

わたしはまかしといてとばかりに、パンと胸を叩く。もちろん、満面の笑みを振りまくことも忘れずに。

なのに……。麻美？ 絵里？ 急に黙り込んでどうしたの？ 何か……あつた？

「おい、石水……。行くぞ」

わたしの後ろから聞こえるその声は……。
そう。吉永君だ。完全に彼の存在を忘れていた。

わたしが振り返った時、彼が肩に担ぐようにして持っているカバンから、ゴーヤのマスコットがゆらゆらと大きく左右に揺れた。

12・何も言わなくていい

「ねえ絵里。マミ、来るかな……」

「どうだろ。五分五分つてところかな？　だって今日一日、廊下で会っても目も合わさないんだよ。体育の時だって、あの調子だもの」

わたしと絵里は、授業が終わるとすぐに学校を飛び出して、いつものバーガーショップに来ていた。麻美との約束の時間は五時半。あと三十分ある。

せつかく麻美が昨日のことを許してくれたと思ったのも束の間、わたしが吉永君と一緒に登校して来たのがバレた瞬間、振り出しに戻ってしまった。

今日の体育の授業は、バスケ。麻美のチームと対戦した時、必要以上に麻美に体当たりされたような気がするのだ。絵里もそれに気付いていた。

「にしても優花。あんた、タイミング悪すぎ。なんでまた、昨日の今日で、あんなに堂々と吉永と登校してくんの？」

「だから……。さっきも言ったでしょ？　吉永君が、勝手にわたしのカバンを持つちゃったからって」

「それがわかんないのよね……。いくらなんでもそれじゃあ、あいつ。泥棒と一緒にじゃん。ひったくりってことだよ。違う？」

あつ……。そ、そうだよ。わたしの言い方だと、そうとられても仕方ないよね。

「ご、ごめん。言い方が悪かったみたい。その……。わたしがマンシヨンの階段から落っこちそうになって……。それで吉永君が、ま

だわたしの体調が悪いと思って、カバンを持ってくれたの。わたしが持つって言っても無視されて」

「なるほど。……優花？」

「は、はいっ！」

それでも説明不足なのかな？ 怖いよ。絵里のその不気味な笑い顔。

「優花が階段から落っこちそうになった時、吉永がまるでスーパーマンのようにどこから飛んできて、カバンを持ちましようって言ったんだよね？ それっておかしくない？ あたしは騙されないわよ。少なくとも、優花が落っこちる前に吉永と一緒にいたってことでしょ？ ねえ、優花。もしかしてあんたさあ……。マミに気兼ねして、とっても大切なこと、内緒にしてない？」

「大切なこと？ な、ないよ。そんなもの」

わたしは大慌てで否定する。多分絵里は、わたしが吉永君が好きだってことに気付き始めたんだ。今それがバレたら、絵里はわたしと麻美の間に入って、辛い思いをすることになる。そんなの、ダメに決まってる。絵里にこれ以上迷惑はかけられないよ。

「マミが来る前に、すべて洗いざらい、ぶちまけてもらいますからね。おっと、黙秘権行使ですか？」

絵里はわたしが口をつぐんだのを見逃さない。絵里、お願い。これ以上、何も聞かないで。

「では仕方ありませんね。じゃあ、あたしの口から言うから」

「ダメだってば。ねえ、絵里。何も言わないで。ね？ お願い」

「やっぱり、怪しい……。優花、付き合ってるでしょ？」

「えっ？」

今、なんて？

「んーんもうつ！ 何度も言わせないでよ。あんたさあ、実は吉永と付き合ってたんでしょ？ って言ったの。違うとは言わせない！」

わたしが？ 吉永君と？

ありえない。なんですぐに話がそうなるのだろう。朝の勇人君はやとといい、絵里といい。あきれて物も言えない。

「絵里。話が飛躍しすぎだよ。それ、絶対に違うから。だって今日の朝、吉永君が言ったんだ。わたしのことはただの同級生だって。だから付き合うとか、ありえないって……。シヨックだったけどね」「ふーん……って。ちよつと、待った！ それって、いったいどういうこと？ 優花が告ったの？ 吉永に？」

「違うってば。告ったりなんかしないって。だって吉永君は、わたしのことなんて、何とも思っていないもの。想いが叶うことなんて、この先、一生ないよ……」

あれ？ わたし、絵里に何言ってるんだろ。

「優花？ あんた……」

「え、絵里……。わたし、違うんだ。あの……。だから……」

絵里は何も言わずに、ただわたしをじっと見ている。そしてわたしの手を握ってくれた。

「優花。もう、何も言わなくていいよ。そうだよ。普段の優花を

見てればすぐにわかることなのに……。あたしったら、優花の言うことをそのまま鵜呑みにして。なんてバカなんだろう。優花、もう今日はいいからさ。早く帰った方がいいよ」

「絵里……。わたしは、別に、吉永君のこと……」

「もういいって。優花の気持ちはわかったから。後のことはあたしにまかせて。マミにはうまいこと言っておくからさ」

とうとう絵里にバレてしまった。ああ、どうしてあんなこと、言ってしまったのかな。

絵里はちつともバカなんかじゃない。わたしが最後まで隠し通せなかったのがすべての間違いのもとなのに。

「たとえ二人が同じ人を好きになっただとしても、あたしにとっては、優花もマミもこれまでと変わらず大事な親友なんだし。きつといい方法が見つかるって。……ってことは、もしかしたら……」

もしかしたら？ 何？ まだ何かあるの？

「吉永も優花のこと……」

「吉永君が、あたしのこと？」

「そう。えへへへ……。まあいいか。そのうちわかるよね……」

「絵里？」

絵里が何か言いかけて、途中でやめる。気になるよ。でも、その後続く言葉が何かってことくらい、わたしにもなんとなくわかる。吉永君もわたしを好きって言いたいんだよね。

絵里、ありがと。それが本当なら、どれだけ嬉しいか。でもね、残念ながら違うんだ。吉永君が、わたしのことなんて何とも思っていないのは、今日の朝の様子でよくわかった。

本当に好きな女の子の前で、あんなに平静を装えるはずないもの。

勇人君にもはつきりと言ってたしね。

「さあ優花、早く帰って。夕食のお手伝いがあるんでしょ？ また今夜電話するから」

「絵里、ありがと。それと今まで、ごめんね。嘘つくつもりはなかったんだけど、吉永君のこと、なかなか言い出せなくて……」

「いいって。じゃあね、バイバイ！ 気をつけてね！」

絵里が元気良く手を振る。わたしも胸のあたりで小さく振り返した。そしてジューズの紙コップを出口近くの棚の下のダストボックスに捨てて、トレーを重ねた時だった。

「ゆづか……。帰る気？」

わたしの目の前には無表情な麻美が、見たことも無いような冷たい目をして立ちはだかっていた。

13・お願い。信じて。

「ママ……。部活、早く終わったんだ……」

「行つてない……。部活なんか、行けるわけない……。あたしは優花のこと、ずっと親友だと思つてたのに。なんで？ どうして嘘なんかついたの？」

麻美がわたしの方に一步詰め寄るたびに、自動ドアが開閉を繰り返す。

「ちょ、ちよつと、あなたたち。そんなところで何やってるのよ。店に入ってくるお客さんの邪魔だよ」

絵里が血相を変えて、わたしと麻美のところにやって来た。

「とにかく……。こんなところで言い合いしてもらちが明かない。外に出よ」

絵里が麻美の腕を掴んで、店を出る。こうなることを予感していた絵里が、せっかくわたしを先に帰らせようとしてくれてたのに、とうとうその心遣いさえ台無しにしてしまった。

仕方なく、わたしも二人の後について行く。

ここは、大きな複合型ショッピングセンター内だ。各所に休憩コーナーがある。自動販売機がある一角のベンチにカバンを置き、わたしは麻美と向き合った。

「ママ。わたしは、その……。嘘つくつもりなんてなくて。たまたま、朝、マンションで吉永君と一緒にになっただけなんだ」

「……………」

「ねえ、マミ。お願い。信じて。マミを困らせようとか、こっさり付き合ってるとか……。決してそんなんじゃないの」

「……………」

「マミ。ねえ、なんとか言っつて。わたし、わたし……。どうしたらマミにわかってもらえるの？」

麻美は黙ったまま、わたしをじっと見ていた。時折、瞳が揺れるのがわかる。怒っているような、それでいてどこか寂しそうな目。わたしがわざとやったことじゃないにしても、こんなにも彼女を傷つけてしまったのは、紛れもない事実だ。どうしたらいいの？

「優花……………」

麻美がようやく、その重い口を開いた。

「あたしね、昨日あいちゃんが言っつたことは、何の根拠もない口からでまかせだっつて、自分にもそう言い聞かせたの。絵里も彼と優花は何でもないっつて代弁してくれたし。あたしの早合点だった、優花に謝ろうっつて、そう思っつた。なのに……。彼にカバンまで持たせて、いったい何様のつもりなの？ あたしに二人の仲のいいところ、見せつけるつもりだったとしか言いようがないよね。それで親友だっつて言えるの？ 信じられない……………」

「そんなあ。見せつけるだなんて……………」

「マミ。優花がそんな子じゃないっつて、マミも知ってるでしょ？ 信じてあげてよ」

わたしが言葉に詰まったのを咄嗟に察知した絵里が、助け舟を出してくれる。

「優花が病みあがりだから、吉永がカバンを持ってあげただけだつて。そんな親切な吉永だからこそ、マミも彼のこと、好きになっただけでしょ？」

「でも……」

「マミの気持ちもわかるよ。好きな相手が、違う女の子の世話を焼いてるのを見るのは相当辛いと思う。ただ、優花がわざとやったんじゃないってことだけ、信じてあげてよ。でないと、優花が、優花だつて……」

え、絵里っ！ 言っちゃダメ！ わたしが吉永君を好きってことだけは、絶対に麻美に言わないで。

「え、絵里。ありがと。わたしは平気だから。だつて、麻美が怒って当然なことをしたんだもの。配慮が足りなかったよね。いくら同級生で、家が近所だからって、吉永君に今朝みたいに甘えるのはよくないよね。わたしがはつきりとした態度を取っていれば、マミを嫌な気分にすることもなかった。これから気をつける。だから、お願い。もう、機嫌を直して。これからもずっと親友だつて、そう言つて」

「ゆうか……。そ、そりゃあ、あたしだつて、優花がそこまで言うなら……信じる。だつて、もし吉永が、体調の悪い子を見て見ぬフリするような冷たい人間だったら、それこそヤバイよね。……じゃあ、最後に一つだけ確認するけど」

少しだけ頬に赤みが戻ってきた麻美が、念を押すようにわたしに言つた。

「本当に、いいんだよね。あたしが、吉永を好きになつても。あたし、彼に気持ちを伝えるつもりなの。もちろん、すぐにうまくいくなんて思つてない。ずっと両思いになれないかもしれない。それで

もいいの。思いを伝えないことには、何も始まらないし……ね。だって、あたしには、もう時間がないんだもの……」

「時間？」

わたしも絵里も初めて聞く麻美のその言葉におもわず顔を見合わせた。

「どういうこと？　なんで時間がないの？」

絵里が麻美の首根っこを掴まんばかりに詰め寄り、聞いただす。

「あつ、それは……」

「なんなのよ。言いなさいよ。あんただって人のこと言えないわよ。隠し事するのなら、吉永のこと応援してやらないから！」

「絵里！　ちよつと、落ち着いて」

わたしはムキになる絵里を、麻美から引き離した。

「絵里、優花、あたし……。来年、転校するかもしれないの。いや、転校させられそうなの」

「えっ……」

あまりの衝撃的な告白に、わたしは絶句する。

「今のままでは、パパの出た医大に現役合格が難しいかもって言われてて。今日の模試の結果と二学期の成績が思わしくなければ、来年から私学の医科歯科大特別進学コースのある高校に行けっ。だからなんとしても今のうちに、彼に気持ちを伝えなきゃならないの……」

「ママ……」

絵里も目を見開いて、呆然としている。

なんでそんなことになるの？ 麻美は今でも充分に成績がいいんだよ。しっかり学年で十番以内に入ってるしね。

それとも麻美のお父さんの出身大学が、恐ろしく偏差値の高い学校なんだろうか。医学部のことはよくわからないけど、きつとんでもなく大変な道のりなんだろうなって、おぼろげにそう思う。

「マミ、わかった。わたし……。吉永君にマミのこと、お願いしてみる」

麻美がはっとしたようにわたしを見る。

「な、何言つの？ 優花、あんた何言ってるかわかってるの？」

今度はわたしに絵里が噛み付いてくる。

……わかってるよ、絵里。わたしに出来ることはただひとつ。自分が言ったことに後悔はない。

絵里の驚きの声が、その後、わたしの耳に何度も繰り返しこたました。

14・新たな決意

絵里、ありがとう。わたしのこと心配してくれてるんだよね。…
…わかってるよ。自分の言ったことくらい。

でもわたしの苦しみなんて、麻美とは比べものにならないくらい、
日常茶飯なちっぽけなこと。だって転校なんだよ？ 吉永君と同じ
高校じゃなくなるんだよ？ 好きな人とも会えなくなるんだよ……。

麻美のためなら、言える。吉永君に麻美の気持ちを伝えることくらい、簡単だ。

「優花……。いいの？ 本当に？」

麻美の目から涙が零れ落ちた。

「あたりまえじゃん！ 今夜家に帰ったら吉永君に言うよ。それともママが自分で言った方がいいのかな？」

「ううん。さつき告白するなんて言っただけど、彼を目の前にしたら、
きっと恥ずかしくて何も言えないと思う。だから、優花に言っても
らえたら、助かる……」

麻美が涙を拭いながらわたしに言った。

「優花、ちょっと……」

怪訝そうな顔をした絵里がわたしの肩を後ろから押すようにして、
麻美から少し離れたところで尋ねる。

「優花、あんたの言ったこと、とても本気だとは思えない……」

絵里がわたしの耳元でボソツとつぶやいた後、麻美にちよつと待
つててねと言つて、彼女を休憩コーナーに残したまま、無理やり手
を引かれて、トイレに連れて行かれた。

「優花、いったいどういうつもり？ 自分のことはいいの？ 吉永
だつていい気はしないよ、きつと……」

化粧室の鏡の前で絵里が顔をしかめる。

「もう決めたんだ。だつて麻美は転校するかもしれないだよ。あ
のまま放っておけないでしょ？ わたしはね、もう脈がないつてわ
かつてるから、いいの。麻美の想いが吉永君に伝わるようがんばっ
てみる」

「優花つたら……。わかつた。そこまで言つなら、好きにしたらいい。
どっちにしろ後は、吉永の気持ち次第つてことだから。もしも
だよ、吉永がマミじゃなくて、優花が好きだつて言つたら、ちゃん
とその気持ちに応えるんだよ。いい？ わかつた？ 遠慮はなしだ
よ。そんなニセモノの優しさの押し売りは、マミだつて嬉しいわけ
ないし……」

「絵里……。わかつた。そうする。でもね、絶対にそんなことあり
えないから。１パーセントだつて可能性はないよ。そうと決まつた
ら、早く帰んなきゃ」

絵里つたら、わたしが落ち込まないように気を遣つてくれてるん
だ。なんでもわかつてくれる親友がいると心強い。もっともつと麻
美のためにがんばろうつて、素直にそう思える。

その後、すぐに麻美のところにもどり、それぞれの家の方向のバ
スに乗り込んで、ショッピングセンターを後にした。

帰ってくるの遅かったわねと母さんにさんざん厭味を言われながら、食後の洗い物を手伝って、台所から解放されたのが八時頃。

わたしは、自分の部屋のベッドに座って、カバンから取り出した携帯を手にする。

吉永君に、あのことを告げるために。

あれこれ文面を考えた末に、結局送ったメールはとてもシンプルなものだっただ。

今から、一階エレベータ横の階段の踊り場に出て来れますか？
話したいことがあります。ゆうか。

最後の名前は、「ゆう」で切ろうとして、やっぱり後から「か」を付け足した。だって吉永君に、これからもゆうって呼んでもらうのを期待してるみたいだもの。

もし麻美との話がうまくいったら、吉永君がわたしのことをゆうって呼ばなくなるのも時間の問題だってわかってるしね。

すると、すぐに着信を知らせるメロディーが鳴る。わたしは一呼吸おいて、そっと画面を開いた。

わかった。すぐ行く。

やっぱり短い。これが二度目の吉永君のメール。わたしはじっとその画面を見つめた後、昨日のと一緒に削除した。そして、登録していた彼のメルアドも……きれいさっぱり消し去った。

わたしは母さんがお風呂に入っているのを確認して、そっと玄関

に向かった。愛花は塾に行っている。仕事の忙しい父さんは、いつも十時を過ぎないと帰ってこない。

わたしはこの願ってもないチャンスに、心の中でこっそりと感謝した。

静かな階段をゆっくりと下りて行く。わたしの靴音だけがやけにはつきりと聞こえてくる。そして三階の踊り場でいつものように立ち止まり、吉永君の家の方向を見た。

今夜で見るのは最後にしようと思った。明日からは、エレベーターを使おうとも。

吉永君とはちあわせしないように、早めに家を出ればいい。そう
だ、そうしよう……。

わたしは、決意も新たに待ち合わせ場所に向かって、残りの階段を一気に駆け下りた。

15. ごめんね、呼び出したりして

「何？」

階段横の壁にもたれるようにして吉永君が立っていた。わたしを見つめるなり、不思議そうに尋ねる。

袖のところが黒く切り替えてあるスポーツメーカーの白いTシャツにハーフパンツ姿の吉永君は、いつもより少しだけ、子どもっぽく見えた。

お風呂に入っただけなのかな？ 髪も学校で見るのと違って、パサパサと無造作にいろんな方向を向いている。

「あつ。ごめんね。急にこんなところに呼び出したりして……。あの……。そうだ、今朝は、ありがとう」

「ん？」

きょとんとした顔でじつとこっちを見る。そうだよ。そんなこと言っただけに呼び出したわけじゃない。吉永君もきつと困ってるよ。

「あつ、いや、今朝はいろいろお世話になっちゃって……。もうこれから、気を遣わなくていいよ。わたしも子どもじゃないんだし、一人でも大丈夫だから……」

やだ。どうしよう。ちゃんと麻美のこと言わないといけないのに。関係ないことばかりしゃべってしまう。吉永君もきつと変に思ってるよ。早く言わなきゃ。

「何か話があるんじゃないのか？ 用がないなら、俺、もう帰るけ

ど。明日から部活の朝練始まるから、とっと勉強して寝ようと思ってる」

「ま、待って……」

もたれていた身体を壁から離して、階段を上がろうとする吉永君を引き止めた。

「あの、あのね……。マミのことなんだけど」

「まみ？」

上りかけた階段の途中で止まって、吉永君が振り返った。

「うん」

「誰？ それ……」

えっ？ 誰って……。もしかして知らない？ でも陸上部のマネージャーだよ？ あそこでもみんなからマミって呼ばれてるはず。同じ部活の吉永君が知らないはずない。

「四組の……。そうそう、^{はやと}勇人君と同じクラスの大園さん……。なんだけど」

「ああ、大園か。あいつがどうかしたのか？」

「うん。そ、その……。真澄ちゃんのことか……。す、好きだって。だから、真澄ちゃんも、マミのこと、どう思ってるのかなって、そう思っ……」

吉永君がそれを聞いた瞬間、はっと息を呑んだのがわかった。そして開きかけた口をそのまま閉じてしまった。

こんなこと突然言われたら誰だってびっくりするよね。でも、どっちなんだろう。嫌だったのかな？ それとも……。

「ねえ、真澄ちゃん。気を悪くしないでね。わたし、でしゃばりすぎたかも……」

「……………」

こんなこととして、麻美の印象が悪くなったらどうしよう。わたしのせいだ。

「こんな話、迷惑だったのかな？ ホントにごめんね。忘れて……。今言ったこと、全部。ね？ 真澄ちゃん……」

「……………」

吉永君はじつとわたしを睨むように見つめた後、天を仰ぎ、大きくため息をつく。そして同じ段のところまで追いついたわたしを真っ直ぐに見て、おもむろに話し始めた。

「話って、そのこと？ それで、俺はどうしたらいいんだ？ 大園と付き合えばいいのか？」

「真澄ちゃん……。無理にとは言わないよ。ただわたしは、ママの願いを叶えてあげたくて」

「友情の証か？」

「そんなんじゃないよ……。もし真澄ちゃんもママのこと、少しでも興味持ってくれたらいいなって、そう思っ……」

「……………」

吉永君が、ずっとわたしを見ている。何かを探るような、強い眼光が……。怖い。

わたしと吉永君の間に長い沈黙が横たわる。居たたまれない。これ以上彼を見ていられなくて、視線を逸らした。

「あ、あの……。乗り気じゃないなら別にいいんだ。マミだって、片思いでもいいって、そう言ってたし」

うつむきながら、やっとのこと、それだけ言えた。

「おまえはどうなんだ？」

「へ？ どうって……」

急に吉永君の声がわたしの頭上に降りかかる。なんでわたしのなの？ そんなこと聞いてどうなるの？

「大園のために、いい返事を持って帰らなきゃならないんだろ？」

「えっ？ べ、別に、そんなことない……と思う。ダメならちゃんとそう伝える……。でも」

「でも？」

「マミはいい子だし、それに、真澄ちゃんのことを、大好きで、それに、スタイル抜群でかわいいし……。それに、勉強だって、できる。わたしなんか比べ物にならないくらい、すべて揃って、それに、それに……」

ああ、ダメ。なんだか泣いてしまいそう。我慢しなきゃ。わたしのせいで、麻美が吉永君に嫌われることにでもなったら一大事だ。ここはなんとしても踏ん張らなきゃ。

「それに、真澄ちゃんのこと……。誰よりも大切に思うと思う」

言えた。声が震えてしまったけど、わたしの言いたいことは伝わったよね？ 吉永君、それでも、ダメかな……。

「わかった。付き合っよ」

え。

付き合っただ……。。

「後で、大園のアドレス、俺の携帯に転送しといて。ゆう？ 聞いているのか？」

「あつ、う、うん……」

「じゃあ。おやすみ、ゆう」

吉永君が階段の上まで上りかけた時、わたしの心臓が凍りついた。吉永君のアドレス……さっき……消した。

「真澄ちゃん、ごめん！ 転送……できないっ！」

わたしは吉永君の背中に向かって大きな声で叫んだ。

「なんで？」

「真澄ちゃんのアドレス、わたし、その……。消しちゃって」

「はあ？ 消した？ なんで？」

「それは……」

吉永君。あなたのことを忘れるためだよ、なんて、言えるわけなく。

「わかったよ。もうおまえには頼まない。勇人にでも聞くよ。おまえとせっかく仲直りできて元の鞘に収まったと思っていたの、俺だけ

だっ たっ てわけだな。 そんなに大園のことが大事なら、おまえの言うとおりにしてやる。俺は、俺は……」

「真澄ちゃん……。ごめんなさい。わたし、そんなつもりじゃなくて」

「言い訳はもういい。おまえにとって俺は、所詮それくらいに取るに足らない存在なんだよ。もう、俺の前をうるつくな。俺も二度とおまえには話しかけない。いいな！」

吉永君が、階段を駆け上がっていく。そして瞬く間にわたしの視界から、彼の後ろ姿が消えていった。

16・好きな人

わたしは吉永君がいなくなった後も、しばらくそこにたたずんでいた。足が前に進まないのだ。今夜もまだ熱帯夜だと天気予報で言っていたのに、ロビーから吹き抜けてくる風が冷たく感じ、ぶるつと身体を震わせた。

Tシャツのそでから覗く腕をさすりながら、ゆっくりと階段を上り始めた。二階に着いてそのまま三階に向かおうとしたけど、ふと思いつき、エレベーターのボタンを押していた。

わたしはその日から、もう階段を使うのを……やめた。

次の日学校に着くや否や、待ち伏せしていた絵里に校門のところで捕まえられる。

「ゆ、優花！ まさかと思ったけど、そのまさかなんだよね？」

教室に行かず、そのまま図書室裏手のベンチに無理やり座らされ、尋問が始まった。

「優花、本当に実行したんだ。吉永も吉永だよ。マジでオッケーするなんて……。信じらんない」

「タベ遅くにマミから電話もらって、ありがとって……。すごく喜んでた。これでいいの。うん……」

「優花。あんたよくそんなに平然としてられるね？ このままでいいの？ 優花の気持ちはどうなるの？」

「正直、辛い……。でもね、これでよかったんだ。吉永君、ちつと

も嫌がつてなかったし。わたしが彼のアドレスを消しちゃったことは怒ってたけど、きっぱり言っただんだもの。マミと付き合うつて。どうせわたしのことなんて、彼の眼中にはなかったってことだよな」

絵里が口をへの字にしてあきれたようにため息をつく。吉永君もわたしもどっちもどっちだって不服そうに文句を並べるけど、もう元にはもどれない。わたしはすでに彼から、絶交状も叩き付けられているのだから。

その日、吉永君とはもちろん一言も口をきかなかったし、目を合わすこともなかった。でも、一学期と同じ状態にもどったまでのこと。この数日の出来事は夢だったと思えばいい。

なんとか気持ちを切り替えて明るく振舞ってみた。絵里にこれ以上心配をかけるわけにいかないしね。

授業が終わると、部活にちょっとだけ顔を出し、今週の予定だけ確認して部室を出た。

すると、誰かがけたたましく追ってくる。

「おい、待てよ！　なんでそんなに急いでるんだよ。俺も帰るから、スートープ！」

わたしを呼び止めて、カバンを取りに教室にもどったのは、学校イチの秀才ともてはやされている勇人君^{はやくと}だった。

「お待たせ」

廊下を教室二つ分くらい進んだところで、カバンを持った勇人君がわたしに追いついた。メガネをかけているけれど決してがり勉には見えないその爽やかな顔つきは、絵里がイケメンランキング一位だというだけあって、惚れ惚れするほどかっこいいともはや認めざるを

得ない。

「どうしたの？ 勇人君。部活は？」

いつも部活熱心な勇人君がこんな時間に帰るなんて珍しい。

「それを言うなら、おまえも部活はどうしたんだよ」

「わたしは……。今日は早く帰ろうと思って」

わたしの所属しているボランティア部は、サークルみたいなもので、活動そのものは週に一回しかない。土曜か日曜に介護施設を訪問したり、夏休みや冬休みに保育園や児童館に行つて、本の読み聞かせや、遊び相手になったりするのが主な活動内容だ。

同じくそこに籍を置いている勇人君は、わたしと違って毎日のように部室に足を運び、運営の中心的役割を担っている。

その責任感を買われて、次期生徒会執行部への立候補をも打診されているらしい。

「今日はつて……。二学期になつて、全然来てないくせによく言うよ。まあいいけどな。ちょっとゆうちゃんに尋ねたいことがあつて」

「なに？」

「真澄のこと……」

わたしはその名前を聞いたとたん、さつと血が引いていくのがわかつた。なんで勇人君が吉永君のことを聞くのだろう？

夕べのことと、何か関係があるのだろうか。

下校途中の他の生徒もたくさんいたので、お互い口をつぐんだままバスに乗り、わたし達の住んでるマンションの裏手にある公園に向かつた。

「吉永君が……どうかしたの？」

錆び付いたブランコに腰を下ろし、ゆっくり揺らしながら隣の人君に尋ねる。

「夕べ、あいつが家に来てさ。俺のクラスの……大園のアドレス教えてくれて言うんだ。一学期に俺が委員長で大園が副委員長だったから、もちろんアドレスは知っていたよ。で、その理由を聞いてマジかよって、あいつを問いただしたら、ゆうちゃんのためだって言うんだ。なあ、いったいどういうことなんだ？俺にわかるように説明してくれよ。おまえ、大園と……確か、親友だよな？」

「そうだけど。でも、わたしのためって、そんなこと……。確かに、マミに代わって彼女の気持ちを吉永君に伝えたのだけだ。でもね、吉永君もマミのこと、悪く思っただけじゃないみたいだし。付き合ってた言ってくれたから、よかったなあって、そう思ってた」

勇人君があまりにもすがるような目をして訴えかけくるので、わたしもあるのまま答える。

「そうか……。大園は、やっぱり真澄が好きなのか……。陸上部のマナージャーだもんね。そんな気はしてたけど……。なあ、ゆうちゃん。新学期早々に進路希望調査しただろ？俺、なんて書いたと思う？」

「わかんないよ、そんなこと。でも勇人君は昔、研究者になりたいって言ってたよね？」

「ああ。そんなことも言ってたな。でも、もうはつきりと決めただ。医者になるってな。大園が行くって決めてる大学の医学部を俺も書いて出した」

「は、勇人君……」

「俺な、大園麻美が好きなんだよ」

16・好きな人（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

このたび優花を応援してくださる温かいメッセージを頂きましてとても嬉しかったです。

アドレスが記載されていませんでしたので、こちらでお返事させていただきますね。Aさん、ありがとうございます！ これからもよろしく願います。

皆様の評価・感想、お待ちしております。

メッセージは、右下にあります作者紹介ページというところをクリックしていただきますとメッセージを送るというリンクがあります。何か気がついたこととかありましたら是非お声を聞かせてくださいね。

17・夕焼け空

「^{はやて}勇人君が麻美を好きだなんて……」。

このことは麻美もきつと知らないのだろう。わたしだって、今、初めて聞いた。

「勇人君。吉永君はそのこと知ってるの？」

「知らない……と思う。あいつとはあまりそういった話はしないんだ。向こうは陸上のことしか頭に無いし、俺も自分の部活のことしか話さない。男同士なんて、大概そんなもんさ。女子は好きな男の話とかいつもやってそうだもんね」

「そうだね。そういった話をしてる子は多いかも……。でも、わたしはあまりしないよ」

「そうだ。わたしは吉永君への想いを、誰にも話していない。もちろん絵里に知られるまでは……だけだね」

「ふ〜ん。そうなんだ。でも俺、ゆうちゃんは真澄のことが好きだとばかり思ってたよ。真澄だっておまえが好きで、両思いなんだとずっとそう思ってたんだぜ」

「は、勇人君！ そんなわけ、な、ないじゃん！」

何てこと言うの？ せっかく静まった心臓がまた暴れ出したじゃない。言っとくけど、わたしと吉永君は仲が良かったためしがないのに、どうしてそんな風に思われるんだろ。誰にもこの想いがバレないようにって、すっかり隠してきたつもりだったのに。

「そうだよな……。真澄のことは何とも思っていないから大園の想いを伝えてやったんだもんね。でも真澄は絶対におまえが好きだと思

う。これ、俺の勘。結構当たるんだけどな」

残念だけど今回は当たらなかったみたいだね、勇人君。もしそれが本当なら、タベみたいにひどいこと、言われたりしないよ。

「昨日おまえらさ、バスで仲良く並んで座ってただろ？ やつとくつついたか……ってほっとしたのによ。真澄の奴、夜には違う女と付き合うって言い出すし……」

「そのことだけど……。勇人君から見れば、わたしって、相当ひどい人間だよ……」

「まあな。でも、おまえは何も知らなかったんだし、仕方ないよ」

知らなかったとはいえ、勇人君にとってわたしは面白くない存在に決まってる。好きな女の子を彼の親友の彼女になるようにしむけたのは、紛れもなくこのわたしだというのに。なのに責めるでもなく……。

「本当にごめんね、勇人君」

部活でも自分のことは二の次で、みんなのために地味な裏方を一手に引き受けてくれているのも知っている。そんな彼に常に甘えている自分が恥ずかしくなる。謝って済まされることではない。

「もたもたしてた俺も悪かったんだし。振られたらどうしようって弱気になって、告白できなかったんだ。それに、大園が俺を見てないってのも薄々気付いてたしな。ああ。俺。人生初の挫折だよ」

そうだよな。今は文化部だけど、中学時代はサッカーもやってて、運動神経も抜群な勇人君は、よくもてた。当時、付き合っていた子もいたはずだ。挫折なんて言葉とは無縁の人生。

なのに、麻美に告白できないくらい弱気になってただなんて、到底信じられない。わたしが勇人君だったら、その持つてるものを最大限に生かして、もっと自信に満ち溢れた人生を送るだろうな。そしてわたしが女版勇人君だったら絶対に吉永君に告白してると思う。吉永君だって、そんな生き生きした明るい性格のわたしだったら、本当に好きになってくれてたかもしれない。

「でもさ、勇人君は偉いよ」

肩を落としてしょぼくれている勇人君に向かって言った。

「なんで？ こんな煮え切らない男なのに？」

「だって、頭も良くて見た目もかつこよくて、みんなから一目おかれてる立場なのに、それをちつとも鼻にかけなくて……。それに自分に嘘ついてないし」

「えらい褒め言葉だな。ゆうちゃん。あまり関心のない男に向かってそんなこと言うもんじゃないよ。俺は昔からおまえのこと良く知ってるからそれなりに受け止められるけど、そうじゃなければ自分に気があるのになって誤解されるぞ」

「ええっ？ そうなの？ でも、ホントのことなのになあ……。わたしっているんな面で案外誤解されやすいんだよね。勇人君、ありがと。これから気をつける」

男女のことなんてよくわからないことばかりだ。思ったことを軽々しく口にはいけないってことだね。なんかいろいろと勉強になるなあ。

「で、ゆうちゃんは自分に嘘ついてるのか？」

へ？ なんでそうなる？ でも……。確かに、わたしが吉永君を

好きなことは勇人君には内緒のままだ。勇人君が吉永君の親友であれば尚更知られたくない。それに、まだこんなにも吉永君のことが好きなのに、気にならないふりをして強がっている自分がいるのも事実だ。

「いや、そういうわけじゃ……」

「ホントに？　なんか無理してない？　やっぱり、真澄のこと、気になるんだろ？」

ダメだ。やっぱりバレてる。だからって、はいそうですなんて、言えるわけないしね。ここは否定し続けるしか残された道はない。

「違うって。ホントに違うんだってば！」

わたしの嘘なんてとくに見抜いているだろうけど。

「わかったよ。もういいって。それにしても意味不明だよな。おまえも真澄も……」

勇人君はブランコから降りると、ショルダータイプのスポーツバックを背中側に回して腕を組みあきたように首を横に振る。

勇人君だって失恋したばかりで辛いはずなのに、わたしのことを気遣ってくれてばかりだ。彼が男女問わず人気者の理由が少しわかったような気がした。

「さあ、日も暮れてきたし、俺達もそろそろ帰ろうか」
「うん」

砂場で遊んでいる小さい子が、黄色いバケツにスコップやカップを入れて片づけ始める。すでに西の空には夕焼けが広がっていた。

「ゆうちゃん。いろいろありがとな。でも俺、まだあきらめないぞ。いつかはきつと彼女を振り向かせて見せる。だからおまえもがんばれ！」

「ええっ？ だから、わたしはそんなんじゃないって……」

いくらがんばって肩を叩かれても、もうどうしようもないのに。わたしが少しふくれて口を尖らせていると、勇人君がお腹を抱えて笑い出す。

そうだった。昔からこの人は笑い上戸だったんだ。吉永君にかかわれて、ふくれたわたしを見て笑いこけるのはいつも勇人君だった。

「あははは……。ゆうちゃん、昔と変わんないな。おもしれえ」

17・夕焼け空（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

なんか優花と勇人がいい感じなのですが、どうなりますやら……。嵐の前の静けさということで、許してやってくださいね。次回、またまた修羅場？ です。

18・行き違う想い

「はやて 勇人君ったら、ホント、失礼しちゃう。」

でも……。まだ笑い続ける勇人君の少し後ろを歩くわたしまで、なんだかおかしくなってきた。

プツて吹き出すと、いつきに笑いがこみ上げてきて、それを見てまた勇人君が笑い、わたしも笑う。失恋した者同士、こうやって笑っているのもどうかと思うけれど。おかしさが収まらないままマンションのエントランス前で部屋番号を表示させ、家の中にいる母さんにロックを解除してもらった。

最上階に住む勇人君もわたしに便乗して横をすり抜けるようにして中に入っていく。

「ああ、勇人君。ずるいつ！」

「へへへ。ラッキー。こうやって人が開けてくれたところを通り抜けるのがオートロックの醍醐味なんだよな」

「なに、それ。小学生の頃とちつとも変わってないじゃん」

「だろ？ お互い成長してないってことで」

「やだ。わたしまで一緒にしないでよ……。あつ」

わたしが勇人君とじゃれ合うようにエレベーターホールになだれ込むと、その先に見知った二人の目がこちらに注がれているのがわかった。

「ま、真澄！ 大園……」

勇人君が突如視界に入ってきた目の前の二人に驚いたように立ち止まる。わたしだってびっくりした。なんで、麻美がここにいるの？

「優花？ 優花じゃない。それに、成崎も！」
「マミ……」

吉永君の横でこぼれんばかりの笑顔を見せる麻美が、わたしと勇人君の名を呼んだ。

「優花、昨日は……ありがとう。あたしさ、真澄君にくっついてこんなところまで来ちゃった」

真澄……君？ そう言つて麻美がほんのりと頬を赤らめながら吉永君の腕にしがみついた。わたしの心臓が、止まるかと……思った。

「おい、大園。やめろよ……」

吉永君が怒つたような顔になり、突如、麻美の手を荒々しく振りほどく。

「真澄君……。ご、ごめんなさい。あたし……」

麻美が行き場を失つた手をもう一方の手で支えながら、怯えるような目をして吉永君を見た。

「あつ、いや。別にそんなつもりじゃ……」

吉永君が幾分申し訳なさそうにそう言つと、突然勇人君が彼の前に立ちはだかつて、吉永君の腕を捻り上げた。

「おまえ、彼女に乱暴するなよ！ 付き合ってるんなら、もっと優しくしてやれ」

目を疑うような光景にわたしも麻美もその場に立ち竦むことしか出来ない。

「勇人……。おまえ何言ってるんだ？ 俺、そんなに乱暴なことはしてないつもりだけど？ その手、離せよ」

「あつ、ああ……」

勇人君は吉永君に言われて、初めて自分の取った行動に気がついたのか、慌てて捻り上げていた手を離れた。

「勇人。おまえこそ、やけに楽しそうじゃないか」

捻られていた方の腕を回しながら今度は吉永君が皮肉っぽくそんなことを言う。

「はあ？ 俺のどこが楽しそうに見える？」

「そいつと、よろしくやってるんじゃないのか？ おまえらさつき公園にいたろ？ なあ、勇人」

そいつって、わたしのこと？ 吉永君がほんの一瞬だけわたしを見てそう言った。よろしくやってるだなんて、そんな……。

「おまえ、何を見てそんなこと言ってるんだ？ 俺とゆうちゃんがどうこうなるわけなんかないだろ？ おまえこそ、そんなにゆうちゃんのことが気になるんなら、しっかり手元に繋ぎとめておけよ」

「こいつ、言わせておけば……」

「何をっ！」

「やめてーっ！ 二人とも！ なんでマミの前でそんなげんかなんかするの？ マミが、マミが……かわいそうだよ」

わたしは今にも掴みかかろうとしている吉永君と、挑発的な態度ではむかう勇人君の間に入って、なんとか二人の暴走を止めることに成功した。

マミが青白い顔をして、がたがた震えている。

それに気付いた勇人君が先に吉永君のそばを離れて、マミの前に立った。

「ごめん。大園。俺、なんてひどいこと言ったんだろ。今言ったことは忘れて……。俺が一人で勝手に思い込んでいただけ。真澄とゆうちゃんは何も関係ないよ。その証拠に、真澄が選んだのは間違いない。大園なんだから」

それだけ言うと、勇人君は力なくエレベーターに向かって歩いて行った。彼は、マミを傷つけないために、自分の言ったことを完全に否定したのだ。

「吉永君。マミのこと……頼むね。お願いだから、マミに優しくしてあげて……」

わたしは残された勇気をふりしぼってそれだけ言うと、勇人君を追いかけて同じエレベーターに乗り込んだ。

ドアの窓越しに、ホールにたたずむ吉永君と目が合う。最後まで吉永君の視線が、わたしから逸れることはなかった。

19・誰？

今日から中間テスト一週間前だ。部活動は一応基本的に活動休止になる。試合前の運動部はそんなことも言ってられないのか、マミも、……吉永君も普段と変わらずグラウンドに姿を見せている。

わたしはこの一カ月間、信じられないくらい熱心に部活に打ち込んだ。それは勇人君^{はなこ}も同じだ。エレベーターホールでのあの出来事にはお互い全く触れないけれど、何も言わなくてもわかる。

全てを忘れるためには、部活に没頭するしかないのだから。

わたしがボランティア部に入っただけにははつきりとした理由があった。それは、絵本の読み聞かせと朗読のボランティアがあっただけ……だ。

わたしは将来、アナウンサーになりたいと思ってる。いわゆる女子アナってやつだ。容姿端麗でない分、実力でその地位を獲得しなくてはいけないので、前途多難なのは言うまでもない。本当なら放送部に入ってバリバリ活動したかったのだけれど、残念なことになったの高校には放送部なるものは存在しない。その代わりに放送委員会があるにはあるけれど……。

学期ごとにメンバーが変わるし、なりたくないのに無理やり推薦されたり、くじ引きで適当に決めるクラスもあつたりで、必ずしもやる気のある人ばかりではない。

そこで、ボランティア部に迷わず入部を決めた……というわけだ。

勇人君は、これまた変わった動機で、ボランティア部に在籍している。この部は、設立されたきっかけが生徒会の発案だったということもあつて、部長、副部長ともに、生徒会の執行部の人が兼任し

ている。

なので中学で生徒会長をしていた勇人君が、どうも入学と同時に、リーダーシップを買われて引き抜かれたみたいなんだ。

つまり、生徒会執行部予備軍としてボランティア部にいるということ。もともと彼はボランティアにも興味があつたらしくて、その手腕は誰もが認めるところだ。

テストが終わった後の施設訪問に間に合うように、訪問先の介護施設で使う紙芝居を手作りしたり、誕生日カードを作ったりと、昨日までは目が回るほどの忙しさだった。

がんばったかいがあつて、今日からテスト最終日の前日まで部活はお休みだ。あとは個人個人が家で自分の担当を練習しておくことになっている。

わたしは家に帰る前に、朗読のための夏目漱石の本を取りに行くと、部室に向かった。

「よっ！　なんか用か？」

勇人君が何か書き物をしながら軽く左手を上げ、ちらつとわたしを見てそう言った。

「本を取りに來ただけだよ。勇人君は今日も部活？」

「いや、あと一行書いたら帰る。今度の介護施設の誕生会は企画もすべてまかされたら？　その時の進行予定計画を立ててたんだ。えっと、こうして……。おお！　出来た！　後はこれを副部長に見てもらったらパソコンに打ち込んで印刷して完成だ」

わたしは勇人君の肩越しに、紙に書かれた計画表を覗き込んだ。時系列にそつて、細かく内容が書き込まれている。勇人君ならではの見事な仕事ぶりだ。

そこにはわたしの名前もある。ちょうどプログラムのまん中あたりで朗読が割り当てられていた。

「ゆうちゃん、一緒に帰ろうか？ 誰かと約束してんの？」

「ううん。マミは部活だし、絵里は先輩と図書館」

「絵里って、めちゃくちゃ美人な本城さんだよな？」

「そうだよ」

絵里はお目当ての先輩にテスト範囲のわからないところを教えてもらっただって。そうやって少しずつ仲良くなつて、十二月までには気持ちを伝えるつもりだって言ってた。

一緒に図書館に行こうって、わたしも誘ってくれたけど、それはさすがにね……。いくらなんでも、のこのこついて行くなんてKYなまねは、出来ないよ。

美人な本城さんとして学年中にその名を轟かせているけど、これが絵里の初口マンスだから大切にしていあげたいんだ。

「じゃあ、寂しい者同士、そろそろ帰りますか」

メガネの奥の目を細めて、勇人君が立ち上がった。

別に一緒に帰るのは構わないんだけど……。周りの視線が痛いのが少々辛かったりするんだよね。

部員は、わたしたちが付き合ってるわけでもない、ただの同級生だって知ってるから何も言わないけれど、そうじゃない人に時々ギロリと睨まれる。

校門に、卒業した中学の後輩が待ち伏せしていたこともあった。

同じ高校の先輩からも誘われて困っているとも言ってた。

そんな勇人君の現状を考えれば、本当なら学校で並んで歩いたりしない方がいいんだけどね。

まあテスト前だし、もうあまり生徒たちも残っていないだろうか

ら大丈夫かなとついつい気を緩めてしまった。

わたしはちょうどチャンスだとばかりにバス停までの道のりを使って、化学のわからないところを勇人君に尋ねようと思いついた。ロビーで靴を履き替える時、カバンから教科書を出して、勇人君ににじり寄る。

「ねえねえ、勇人君。お願いがあるんだけど。ここのね、この化学式なんだけど……」

「何？ ああ、これ？ これはね……」

さすが勇人君だ。わたしのわからないところをすぐに察知して、噛み砕いて説明してくれる。なるほどね。やっぱり化学式はある程度暗記しなくちゃ始まらないんだ。

とっても基本的なことなんだけど、嫌な顔ひとつせず丁寧に教えてくれる。

そりゃあ、学年トップだもん。特に化学と物理は先生より勇人君の方が詳しいって噂もある。部室で、入試レベルの問題を三年生の先輩に混じってすら解いているのを見た時は、腰を抜かすほどびっくりしたもんね。だから、ちよつとやさつとのこと、もう驚かない。

「教科書に出てるくらいは全部暗記した方がいいよ。それから問題集をやって、応用問題を押さえておけば九十点は確実だから」

へえ、そうなんだ。でもね、多分応用問題までは手が回らないよ。取りあえず平均点を目指してがんばるね。こんなこと恥ずかしくてとても勇人君には言えないけど……。

次は日本史。全部覚えてたら寝る時間がなくなっちゃうので、ヤマをかけてもらおうと、カバンの中にある教科書をごそごそと探す。

すると勇人君がきよきよと辺りを見回して、ポケットからシルバーの携帯を取り出した。

一応学校内では携帯の使用は禁止ってなってるので、先生が近くにいないかどうか確認したんだと思う。

「ゆうちゃん。ごめん！」

携帯の画面を見た勇人君が突然謝る。急用かな？

「一緒に帰れなくなった。副部長に呼び出されたよ……。俺、部室に戻るわ。また何かわからないところがあったら夜にでも電話して来て。じゃあ」

そう言って、勇人君は、瞬間にわたしの視界から消え去る。バイバイって言う間も無いほど、あっという間にいなくなった。

いつまでもじっとここに立っていても仕方ない。わたしは教科書をカバンにしまうと、ふっと息を吐き、バス停に向かって歩き始めた。

「いしみず……さん」

誰かが後ろからわたしの名前を呼んだ。誰だろ？ 振り返って口ビーを見渡したけど誰もいない。

「石水優花。こっち。こっちだけとお。あははは。やだ。マジ、気付いてない」

「ちよつとー、こっちだつてばー」

靴箱の陰からどこかで見たことのある二人組みの女子が現れて、わたしの顔を見ながらけたけた笑っている。いったい、何なの？

20・ミイとサリ

「あたしたちさあ、鳴崎と同じクラスのミイとサリ。あんた、ウチのクラスの才女マミと友達だよね？」

「そうだ……けど」

「あははは。やっぱそうなんだ。で、そのマミが吉永と付き合ってるって噂じゃん？ あんたが鳴崎に馴れ馴れしいのは、マミに対抗するためなんでしょ？ だって所詮女の友情なんて見せ掛けのものなんだからさ。吉永の上に行く男なら後は鳴崎くらいしかこの学校にはいないし」

「いったいこの人たちは何が言いたいんだろ。わたしが勇人君と親しいのはそんなんじゃない。なんで麻美に対抗しなきゃならないの？」

「何とか言ったらどうなの？ それともあたしの言ったことが図星すぎて、何も反論できないとか……」

「わたしは……。あなたたちが何を言ってるのかさっぱりわからない。いったいどういうことなの？」

「どういうこと、だって。ねえ、サリ、聞いた？ この子、とぼけてる。あのね、あんたが抜け駆けするから、こっちは迷惑してんのサリはね、どういうわけかあのおぼっちゃん鳴崎が気に入っちゃってさ。あたしは正直、苦手なタイプなんだけどね。やだ、ホントのこと言っちゃった。サリ、ゴメン……」

背が高くショートカットのミイという人が両手を合せて謝った後、ペロツと舌を出す。

「ミイったらヒドイよ。あとで覚えておきなさいよ！ でも、この女の方がもっと性質が悪い。何が勉強教えてよ。鳴崎君が誰にでも

優しいからっていい気になるんじゃないわよ！」

ミイを押しつけるようにして、マスカラをたっぷり付けたまつ毛を揺らしながらありえないほど大きな目をしたサリという人が迫ってくる。怖い。わたしがいったい何をしたらって言うの？

「だ、か、ら……。石水さん、あたしたちの言いたいこと、わかるでしょ？」

今度はミイがわたしを威嚇するようにして迫ってくる。

「わ、わからない」

「あんた、バカじゃない？ さつきから何度も言ってるでしょ？」

鳴崎に近寄るなって！ そんなこともわからないなんて、相当重症だわ。サリ、どうする？」

「ミイ、この子はちゃんと言ってやんないとわからないクチよ。今まで、黙って泳がせてたけど、もう我慢ならない。なにさ、そのやぼったい顔。かわいいかどうか知らないけど、そんなんで彼に取り入れられたんじゃ、こつちだって黙っちゃいられない。二度と鳴崎君にベタベタ話しかけないで。いいわね！」

サリがとがったあごを突き出し、わたしを蔑むように言い捨てる。

「さ、サリさん……。誤解だよ。わたし、その……。鳴崎君とはそんなじゃない。同じ部活だし中学も同じだったから他の男子よりは、ちよつとだけ、仲がいいだけ。取り入ろうだなんて、そんなこと考えたこともない。ホントなの。信じて」

鳴崎君、だって……。我ながらよく言えたと思う。勇人君なんて言ったら、ますますこの人たちを怒らせてしまうものね。

「サリ。この子はこう言ってるけど……」

「フン。そんなの信じられるわけじゃないじゃん。ちょっとだけ仲がいだけだつて？ はあ？ よくもそんなことが言えたわね。あんたのその甘えたような態度が、鳴崎君の気を惹こうとしてるって、見え見えなんだつてば」

「サリさん。じゃあどうすれば、わたしが鳴崎君をそんな風に思っ
てないって信じてもらえるの？ 鳴崎君とは帰る方向が同じだから、
たまに一緒に帰ってるだけだし。他の部員の人も一緒だよ。それに、
それに、鳴崎君は……」

麻美が好きなんだよ……と言いかけて、慌てて口をつぐむ。これ
を言ってしまうと、ますます大変なことになりそうだ。じゃあ、ど
うすればわかってもらえるの？

「何よ、はつきり言いなさいよ。ほら、見なさい。それ以上、言え
ないじゃない。やっぱりあんた、鳴崎君のことが好きなんでしょ？」
「違う。本当にそんなんじゃないって。わたしが好きなのは鳴崎君
じゃなくて……」

「ねえ、サリ。あたしにいい考えがあるんだけど……」

わたしが最後まで言い終わらないうちに、ミイが話に割り込んで
きた。そして急に声を潜めて、サリの耳元で何か話している。

「ねえ、いいと思わない？ それなら、この子が鳴崎のこと好きじ
やないって証明できるし、もし好きだったとしても、こっちで監視
できるじゃん？」

「うん。まあね。でも、ヒロがいいって言うかな？ あいつの趣
味とは違うような気がするけど……」

「大丈夫だつて。この子だつてちよつと化粧すりゃ、あたしたちよ

りずっと上物だしさ」

次第に二人の会話がはつきりと聞き取れるようになっていく……。わたしがとんでもないことに巻き込まれそうになっているのは、もうすでに明らかだった。

「これからちよつと寄るところがあるんだけど……。石水さん、あんたも来てくれる？」

ミイがニヤリと笑いながら、わたしの腕を掴んだ。

「わたし。その……。テスト勉強しなくちゃならないし。母さんが働いてるから、夕食の準備もしないと……」

「テスト勉強？ まだ一週間も先だよ？ 誰も勉強なんかしてないって。ちよつとだけだからさ、一緒に行こうよ。あんたに会わせたい人がいるんだ。鳴崎と何でもないんなら、別にいいじゃん。その人と会っても……」

ミイの手がさっきよりきつくわたしの腕を締め付ける。彼女の目には怪しい光が宿り、それは、もうここから逃げられないとわたしに悟らせるのに充分なほどだった。

「わかった。そこに行くから……。だからお願い。この手、離して……」

わたしはミイとサリに両脇を囲まれるようにして、バス停とは反対の繁華街の方向にゆっくりと歩き始めた。

21・そしてヒロ

夕方の繁華街は学校帰りの高校生達は何をするでもなく、あちこちに仲間同士のかたまりを作っておしゃべりに夢中だ。制服はどこも似ているけれど、よく見れば学校によって微妙にデザインが違うのがわかる。合服の人もしれば冬服の人もある。

わたしの学校は今は移行期間中なのでどっちを着てもいい。でも冬服の方がかわいいので、ほとんどの人がすでにブレザーを着ている。中にはニツトのグレーのベスト。胸元に覗くりボンがキュートだと評判だったりする。

ミイとサリはこの界限で顔が利くのか、すれ違いざまに次々と声を掛けられる。遊び人風の人もしれば、普通の高校生もいる。フリーターっぽい人もいた。

この二人は一見遊び人風なんだけど、そんなにスレているようには思えない。サリは長いカールした髪の間から小さなピアスが見え隠れしているけど、ショートカットのミイには見当たらない。

ミイのスカートの丈はかなり短めで長い足がすらりと伸びているけど、サリはわたしと同じくらいの長さだ。カバンだって、二人とも同じようなボストン型のもの。取り立てて言うほどの物でもないただ、二人の携帯のデコレーションが派手目だったのには度肝を抜いたけどね。スワロフスキーがところ狭しとぎっしり並んでいた。ちなみにわたしの携帯はハートのラインストーンが二つ貼ってあるだけ。だって全面に貼って剥がれ落ちたりしたら絶対に後悔しちゃうだもん。

大通りを曲がって、路地に入ったところにコンビニがある。その店の前で立ち止まり、ミイが例のキラキラした派手なデコ電を取り出した。

「サリ、この子見張ってて。あたしが中に入ってヒコを呼んで来る」

ミイがそう言って、ローファアのかかとを踏んだまま、携帯を片手に店の中に入って行つた。会つて欲しい人つていうのは、きつとそのヒロつて人だ。多分、男の子だと思う。さっきの二人の話してる様子で、なんとなくそうじゃないかつてわかつた。

わたしに会わせてどうするのだろう。まさか、紹介……とか？でもわたしには自信がある。そんなことになつても、わたしなんか絶対に相手にされないって。

ミイにサリ。悪いけど、あなたたち……。根本的に人の選び方、間違つてるよ。

「よお、サリ。今日は、はえーのな。何、さっきのメール」

ミイと連れ立って知らない男の子が店から出てきた。どこの制服だろ。うちのに似てないこともないけど、ネクタイの色が違う。もしかして、付属？　ここからそう遠くないところに、私大付属の男子高がある。その人かな？　わたしはこっそりその人の顔を覗き見た。

えっ？　うそ！　吉永君に……そっくり。なんで？　あつ、でもよく見ると違う。あごのラインとか、口元の形とか。声もこの人の方が少し高めだ。髪だって吉永君よりずっと長い。

「メールのとおりだけど。ミイがさ、この子、あんたにどうかって言うから」

サリが面倒くさそうに答えながら、わたしを彼の前に突き出す。やっぱり思ったとおりだ。この人に紹介されてる。

すると、上から下まで舐められるようにその人に見られた。わたしは意味もなくブレザーの裾を引っ張って、膝をくっ付ける。その人のじつとりとした目がどこか気持ち悪い。

「ふ〜ん。誰？ この子」

「同じ高校の同級生。あんたの彼女にどう？ 今、フリーなんだって」

「あつ、そう。別にいいけどー。ねえ、カノジヨ。名前は？」

吉永君に似てると思ったけど、やっぱり違う。しゃべり方がとてもなく……軽い。

「ちよつと、あんた。名前くらい言いなさいよ」

突然サリに背中を突かれた。それも、おもいつきり強く。えっ？ そ、そうか、目の前のこの人が、わたしに質問してるんだよね。

「あつ、ごめんなさい。わたしは、石水……です」

「石水さん？ ふ〜ん。俺、ヒロ。広川太郎って言うんだけどね。そこの付属の。太郎じゃシャレになんねえからヒロって呼んで。で、石水さん。ホントにカレシ募集中？」

「い、いえ。別に」

やだ……。またじつと見てる。おまけに薄ら笑いまで浮かべて。

「俺、メンドくせえの嫌だけど……。でもまあ、今までにないタイプだし。石水ちゃん、よろしくな」

その人が急に横に来て、わたしの肩を……抱いた。なんで？ そんなの……困る。

わたしが身体をすばめて固まっていると、耳元に生暖かい息が吹きかけられた。

「ひ、ひやあ……。や、やめてください！ 何するんですか？」

いたたまれなくなったわたしは、身体をよじるように捻って、なんとかその人から離れた。

「何、慌ててんの？ おもしれえな、石水ちゃん」

その人は肩を小刻みに揺らしてクツクツと笑いをこぼす。

「ヒロ、悪ふざけはやめなよ。この子、まだそついうの、慣れてないみたいだし」

サリがわたしの腕を掴んで、自分の方に引き寄せた。あれ？ もしかしてわたしを庇ってくれたの？

「なんだよ。おまえがこいつを俺にくつつけようとしたんじゃねえか。イミわかんねえ」

「一応、この子も今日からあたしたちの友達なんだし、少しは優しくしてやりなよね」

「わかったよ。つたくうるせえな。でもな、石水ちゃんって、よく見ると結構かわえーし。おまえらみたいにケバくないのが新鮮っつか。俺のダチもきつとびっくりするぜ。で、これからどうする？ ゲーセン？ それともカラオケ？」

「あたし、のど渴いたし……」

黙って成り行きを見ていたミイがデコ電をいじりながら言った。

「ならカラオケで。いつものところにしようぜ。俺、他のやつも呼ぶわ」

ヒロ……いや、広川君も携帯を取り出し、メールを打ち始めた。これからこの人たちはカラオケに行くんだ。わたしはどうなるんだろ。もう帰してもらえるのかな？

その時サリがわたしをちらりと見た。そして決まり悪そうに視線を逸らし、つぶやいた。

「言つとくけど……あたし。あんたを許したつもりはないから。鳴崎君のこと……好きじゃないって証拠にヒロと付き合つてよ。あいっ、軽そうだけど、根はいいやつだから。あたしが保証する」
「で、でも……。わたしは付き合うとか、そういうのは……」
「もうっ！ なにうじうじしてるのよ！ とにかくあんたと鳴崎君を遠ざけるためにはこうするしかないんだから。つべこべ言わずに言つとおりにして」

「わたし、ヒロさんのこと今日初めて知ったばかりだし……」

「なら、この後もつと知ればいいでしょ。さ、一緒に行くのよ、あんたもカラオケに」
「さ、サリさん！」

無理やり腕を組まれて、まるで連行されるかのように大通りを歩いて行く。今どき高校生風な三人と地味なわたしという妙な取り合わせの四人組は、誰の目にも異様に映るのだろう。何人もの人が不思議そうに振り返る。

わたしは下を向いたまま、なんとかサリの歩調に合わせて、しぶしぶ歩みを進める。今、五時だ。行きたくないけれど、仕方ない。一

時間だけ我慢しようと腹をくくった。

そして、はつきりと広川君にこの交際を断ろうと決心した。勇人君を好きじゃないって証明は他の方法でも出来るはず。それを見つけて、サリにも納得してもらおう。

サリだって、本当はいい子なのかもしれない。さつきも広川君の行動を諫めてわたしを庇ってくれたしね。

そう思ったとたん、急に心が軽くなり、幾分身体の緊張感が取れたような気がした。

さつき広川君に肩を抱き寄せられた時はどうなるかと思った。苦しくて息が止まりそうだったけど、もう大丈夫。勇気を出して顔を上げて、真っ直ぐに前を見た。

「ゆうか？　優花だよね？　優花！」

誰かがわたしの名前を呼びながらこちらに向かって来る……。麻美だ。麻美の横には、もう一人、よく知った人がいる。今、この場を一番見られたくない……。人。

吉永君は、目を見開いて驚いたようにわたしを見た後、すぐにその目を向こう側に逸らした。

22・知らない世界

「あつ、マミじゃん。ふん……。やっぱりマミと吉永の噂は本当だったんだ」

ミイがわたしの前に立って、今出くわしたばかりの二人を好奇心旺盛な目でじろじろ見る。

「ミイ……。どうして優花と一緒になの？ あなたたち、仲よかったっけ？」

麻美がチラツと横に立つ吉永君を確認するように見た後、またこちらに向いた。

「まあね。今日はこれから石水さんとヒロの記念パーティーなんだ」「記念パーティー？ 何、それ。優花、どういうこと？」

麻美がミイを横に押しのけるようにして歩み出て、わたしに直接訊^きいてくる。

「そ、それは……」

「つまり、俺と……えつと、なんだっけ。そうそう、ゆうかちゃん、記念すべき初デートのパーティーってこと。あんた、ゆうかちゃん、の友達？ なら全然オツケー。一緒にカラオケ行かねー？ なんならそのカレシも一緒に」

広川君が話に割り込んできた挙句、まるで二人に見せ付けるように……わたしを横から抱き寄せようとする。

「は、離して！ 広川君、やめて、お願いだから……」

わたしは彼から離れようと必死にもがいたのだけど、今度はびくともしなくて……。動けば動くほど、背中から回された広川君の手がわたしの右腕の上の方を、がっしりと捉えて離さないのだ。

吉永君が……見てる。とても冷ややかな目で、じつとこっちを見る。

ああ、お願い。麻美も吉永君も、早くここから消えて。わたしの前からいなくなつて。もうこれ以上、こんなみじめなところ、見られたくない。広川君は、違うの。彼氏でも何でもないの。だから、だから……。

「なんでそんなにいやがるんだよ。なあ、別にこれくらい、いいじゃないか。俺とゆうかちゃんの仲だろ？」

広川君の顔が、わたしの目の前数センチのところまで迫ってくる。

「や、やめて！」とわたしが叫んだのとほぼ同時だった。

「俺、もう行くよ。大園、それじゃあ……」と吉永君が言ったのは。

麻美に向かつてそれだけ言い残し、吉永君がその場から走り去ってしまったのだ。麻美も彼の後ろ姿を見ながら呆然と立ちすくんでいる。

ようやく広川君から逃れ、身体が自由になったわたしは、麻美に歩み寄り小さい声で伝える。

「お願い。このことは絵里には言わないで……。それに、あの広川君は、わたしとは何の関係もないの。ふざけてるだけ。ね、信じて」

「わかってる。あの人が優花の好きになるタイプじゃないってことくらい、見ればわかるよ。でもどうして優花がサリたちといえるの？」

「それは……」

「なら、あたしと一緒に帰ろ。その方がいいんでしょ？　ね、優花？」

わたしの歯切れの悪さを不審に思ったのか、麻美がこの場からわたしを救い出そうとでもするように帰ろうと言ってくれる。でも……。

「ダメなの。このあとちょっとだけ一緒に遊ぼうって、約束したから……。それよりマミはいいの？　吉永君、行っちゃったよ？」

「う、うん……」

「デート中だったのでしょ？」

「ま、まあね……」

今度は麻美が元気がない。デート中なのになぜ？　麻美を置き去りにして行ってしまった吉永君の態度も不可解だ。

麻美にしてみれば、ここでわたしに時間を取られたことを吉永君に申し訳ないと思っているんだよね。ごめんね、麻美……。

「早く吉永君のところに行った方がいいよ。マミ、ありがと。わたしは心配いらないから」

「優花……」

「あんたたち、何こそこやってるのよ。マミ。あんたも一緒に来るの？　どうするのよっ！」

サリが言葉を投げつけるように言う。

「あ、あたしは……」

「あつそう。なら、また明日ね。バイバイ……。石水さん、マミは帰るって言ってるんだから。もたもたしないで早く行こ！」

サリはまるで麻美を追い払うようにそっけなく手を振り、再びわたしの腕を引き寄せた。出来る限り明るい笑顔を作って麻美を見ると、口をきゅつと堅く結んだまま、バイバイと手を振ってくれる。

麻美の顔は今にも泣き出しそうに……見えた。

五分くらい歩き、雑居ビルの下で立ち止まった。ここ五、六階にあるカラオケルームがお目当ての場所らしい。

エレベーター前に私服姿の知らない男の人が立っていた。ミイとヒロが形相を崩しながらその人に近付いていく。

「えへへ……。タカシ。昨日はゴメン……」

ミイがタカシという背の高い大人っぽい人に謝りながら、突然しな垂れかかる。それを当然のように受け止めた彼が、ミイの頭を腕で抱え込むようにして、彼女の額のあたりに……。き、キスをした。わたしは目の前で繰り広げられる生々しい二人の姿に、目のやり場を失った。

「ヒロ、せっかく誘ってもらったけど……。わりいな。俺ら、これから別行動ってことで」

「いいけどよ。おもしろくねえな、全く……」

広川君が少しふてくされたようにして足元のプラスティック片を蹴る。

時折、上目遣いでタカシを見上げるミイも、サリに向かってゴメンねとしおらしく頭を下げる。ついさっきまでのミイとは別人みただ。

「サリ、あんたもこの後、用があつたんじゃないの？ 駅まで一緒に行こうよ」

ミイがタカシの腰に手を回し寄り添うようにしながらサリに目配せする。ど、どういうこと？ 二人ともいなくなったら、わたしは、広川君と二人つきりだよ？

なんとか二人のどちらかをひき止めようと横にいたサリの腕にしがみつく。

「そんなあ……。わたしを一人にしないで。お願いだから帰るなんて言わないで。それならわたしも……帰る」

「おいおいゆうかちゃん……。そりゃあないっしょ？ 俺を一人にする気？ じゃあ、カラオケやめて、どっか違うところこ」

広川君がにじり寄り、わたしの背後に張り付いた。

「石水さん。そんなこと言わずにさ。ヒロだつてもうその気なんだし。ね？ ためしに付き合ってみてよ。二人だけの方がお互いのこと、もつとよく知れるしさ。さーて、あたしもそろそろ帰ろっかな。連日の夜遊びで、さすがに親がキレちゃってさ。今夜くらい機嫌とつとかないと、試験中、遊べないしね。じゃあミイ。あたしもそこまで一緒に行く」

三人の姿が瞬く間に人ごみに吞まれて見えなくなる。エレベーターの前に、わたしと広川君が残された。

「まったくタカシの野郎、昨日はあれほどミイのこと、ボロクソに言っておきながらよー。ミイの顔を見たたんアレだぜ。やってらんねーな。さあ、邪魔者はいなくなつたことだし、俺達は二人で楽し

くやるとしますか。なあ、ゆうかちゃん？」

「わたし、広川君とは付き合えません。あの……。好きな人が……いるんです」

わたしはそう言いながら、肩に回りかけた広川君の手をやんわりと払いのける。

「へ？ 今ごろなんだよ。おまえ、ちょっとおかしいんじゃないの？ でもそいつとは付き合ってるわけじゃねえんだろ？ それともフリーってのも実は嘘だった？」

「い、いえ。嘘じゃないです。本当に誰とも付き合ってます」

「なら、いいんじゃない。実らない恋なんか、とっとと見切りをつけて俺と楽しもうよ。な、ゆうかちゃん？」

周りには通勤帰りの人の波が途絶えることなく続く。もうわたしには広川君の声は聞こえていなかった。

今ならこの人ごみに紛れて、広川君から離れられるかもしれない。彼が油断した隙にここから逃げればいいんだ。

わたしは雑居ビルのすぐ前にある横断歩道の信号が青になった瞬間、その場から走り出した。

後ろを見てはいけない。そのまま前だけを見て、バスターミナルを目指すんだ。そして……。ドラッグストアの前で試供品を配っているお姉さんに進路を妨げられた瞬間、誰かにぐいっと手を引かれた。

「ゆう……」

どこかなつかしいその声に導かれるように、わたしはゆっくりと後ろを振り向いた。

23・何をした

「こいつ……。心配させやがって」

「真澄ちゃん……」

わたしのことをゆうと呼ぶのは吉永君だけ。それはわかっているのだけれど、まさか本当に吉永君がここにいるなんて到底信じられなくて。

吉永君もきつと走ってわたしを追いかけて来たにちがいないのに、少しも息が上がっていない。いつものように平然とした面持ちでそこに立っている。

そして、たつた今気付いたのか、あつと言って、掴^{つか}まえていたわたしの手をゆっくりと離れた。

わたしも、とたんに恥ずかしさが込み上げてきて、顔を上げることは愚か、声すら出せないまま立ちすくむ。どれくらいそうしていたのだろう。あるいはほんの数秒だったのかもしれない。それはわたしには永遠の時に思えるほどだった。

周りの喧騒もすべて消え去り、そこは吉永君とわたしの二人だけの世界のようにだ。聞こえるのは自分の胸の鼓動だけ。トクトクと規則正しく、でもいつもより早く打っている。

わたしは胸を押さえながらゆっくりと顔を上げた。

その時、吉永君の左腕の後ろあたりに重なるようにしてわたしの目に映ったのは、身体を前かがみにしながら肩で息をしている……。広川君、だった。

「やっと、追いついた。ゆうかちゃん、それはないだろ？ 結構、逃げ足、速いし……。ハア、ハア。あれ？ あんた……。さっき、マ

三つて人と一緒にいた人じゃん。んん？」

広川君が息を切らせながら、途切れ途切れにしゃべる。そしてすでに後ろを振り返っていた吉永君が、広川君ににじり寄った。

「おまえ、ゆうに何をした……」

いつにも増して吉永君の低くて鋭い声が容赦なく広川君に突き刺さる。

「お、おい。あんた、何マジになってんの？」

広川君が吉永君の気迫に押されるような形で、じりじりと後退していく。

「ゆうに何をしたか言ってみろ……」

大声で怒鳴っているわけでもないのに、吉永君の声は、周りの空気までも凍らせるように冷ややかに振動する。

「お、俺はただ、ゆ、ゆうかちゃんをサリたちに紹介してもらって
そんで、今日、初めて会って……。それだけなのによ。なんであんなにケンカ売られなきゃなんねえんだよ？　ったくメンドくせえな
……」

広川君が吉永君から目を逸らし、開き直ったかのように捨て台詞を吐く。

「用がないなら、二度とこいつの前に現れるな。今度、ゆうの嫌がるようなことをやってみろ。無傷で家に帰れると思うなよ……」

「わ、わかったよ。お、俺は、そういった血の気の多い奴らとは違うんだ。ケンカはしねえんだよ。ただ、彼女募集中だっただけなんだ。ゆうかちゃん、めっちゃかわえーし、放っておけねーだろ？ はっ、ははは……」

広川君が顔を引き攣らせながらも、必死になってへらへらと笑っているけれど、吉永君の目は全く笑ってなんかいない。

大通りで吉永君にバツタリと出会った時、わたしが広川君に絡まれて怯えていたのをちゃんと見てたんだ。

突然真顔になった広川君と目が合った。

「ゆうかちゃん、今日は、わ、悪かったな。あんまり気にするなよな。でも俺、あんたに本気になりかけてたかも。遊び半分じゃねえよ。それと……。ゆうかちゃんがさっき言ってた話。誰のことかわかったよ」

広川君がそう言っ、吉永君をチラリと見た。さっき言ってた話って……。もしかして、好きな人がいるって言ったことかな？ わたしの好きな相手が吉永君だってわかったの？

ど、どうしよう。サリにバレちゃうよ。そしてサリから麻美に伝わったら……。おしまいだ。

わたしは出来るだけ知らぬ顔をして、広川君の話を無視しようと試みる。

「まあ、ゆうかちゃんの名誉にかけて、公言はしねーよ。なるほどな……。ちよっと、話はややこしそうだ。けどそうだとしたら、どう考えても俺には勝ち目はねえし。これから先、もう会うこともねーだろうけど、もしこの辺で見かけたら、声くらいはかけてよ」

「広川君……」

「俺、行くわ。じゃあな」

わたしが会った瞬間、吉永君に似てると思った笑顔を最後に浮かべて、広川君がそこから立ち去って行った。

遠巻きに見ていた他校の高校生も、期待した場面にならなかったからなのか、少し落胆したようにして各所に散っていく。

広川君が去っていくのをじっと見届けるようにして眺めている吉永君の背中に向かって「ありがとう、真澄ちゃん」って言うてみた。

吉永君の肩が一瞬ピクツと動いたような気がしたけど、わたしがそう言った後もしばらくの間、黙って向こう側を向いたままだった。

「帰るのか？」

急にこっちを向いた吉永君が唐突にそんなことを言う。いつも吉永君の行動は予測不可能だ。

「あ、う、うん。もう帰るよ。真澄ちゃん、あの……。マミは？」

バスターミナルに向かって歩きながら、今一番気がかりなことを尋ねてみる。デート中だったはずなのに、麻美はいたいどうしたのだろう。

「さあ……。もう帰ったんじゃないのか？」

さあ……。って。あれから合流できなかったのかな？　なんだか責任感じるんだけど。

「ゆうが何を考えてるのか知らないが、俺は塾に行つてただけだな……。大園が部活が終わつたら本屋に行くと言つから、塾まで一緒に歩いていただけた。そしたらあそこでおまえに会った。初め、おまえも同意であいつらと付き合つてるのかと思つたりもしたけどな。どうみてもおまえの目、俺に訴えてたろ？」

そんな。訴えてただなんて……。途中から目を合わさないようにしていたはずだけど。確かにあの時は怖かった。広川君に抱きつかれて、身体中が震えていたはずだ。わたしは観念して、吉永君に向かって小さくコクリと頷いた。

「あの後、もう勉強どころじゃなかったんだぞ。塾長に腹の調子が悪いって嘘ついて、抜け出してきた。なんでかわからないけど、ゆうのことが気になって、心配で心配で。おまえとは距離をおこうと決めたはずなのにな……。そして、おまえらが行きそうなカラオケ屋をピックアップして、あの雑居ビルのそばに行ったら、ちょうどおまえが走り出したところだった。あの男、マヌケな顔しやがつてオロオロしてたぞ。俺は、おまえと並行に反対側の歩道を走った。まさかこの足が、こんなところで役に立つとは思わなかったよ。ゆうも昔から速かったけど、今は俺の方が完全に勝ってるからな。先読みしてドラッグストアの交差点を渡つて、ちょうどいいタイミングで捕まえることができたんだ」

そうだったんだ。ごめんね、吉永君。わたしなんかのために、塾の勉強まで投げ出してしまつて。おばちゃんに叱られないかな？

「真澄ちゃん。本当に助かった。今日はありがとう。もし、今夜の塾のずる休みがバレておばちゃんに叱られたら、わたしのせいだつて言つてね」

わたしはいたって真面目に、真剣に、そして誠心誠意、心の底から感謝の気持ちを込めてそう言ったのに。

吉永君が笑い出した。それも。お腹を抱えて大笑いをしている。な、なんで？

「クッククク……あはははっ！ おまえなあ……。小学生のおけいことはワケが違っただぞ。誰が塾を休んだくらいで叱られるんだ？」

そっか。吉永君は常日頃から真面目だから、誰も疑ったりしないんだ。心配して損した。笑いすぎだよ、吉永君。

わたしは気を取り直して、吉永君と肩を並べて再び歩き始めた。

「それよりおまえ。その考えのない浅はかな行動、なんとかしろよな。あのままあいつといれば、どうなったかくらい、おまえにもわかるだろ？」

「うん。自分だけは大丈夫って、そう思ってた……」

「ゆう、おまえ……。頼むから、本当に好きな相手以外に簡単に気を許したりするな。いいな？」

「わ、わかってるって。これから気をつける」

もちろん、そうするつもりだ。吉永君を越えるような、素敵な人が現れる日まで。その日まで、自分のことは大事にするつもりなんだから。

「はやし 勇人はどうしたんだ。おまえら一緒に帰ってたんじゃないのか？」

えっ？　なんでそのこと知ってるの？　吉永君の声が瞬時に不機嫌になり、薄暗くなった街路樹の下で立ち止まった。

23・何をした（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

昨日の小説家になろう内のアクセスが、恋愛部門でランキング1位になりました。

初めてのことで、まだ、ドキドキしています。

お越しいただいたみなさまのおかげです。ネット小説ランキングへの投票も併せて、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

24・最後のぶどう

「勇人君は、途中で先輩に呼び出されて……。ねえ、真澄ちゃん。どうしてわたしが勇人君と一緒にだったって知ってるの？」

ふうーって疲れきったような大きなため息をつき、吉永君はしぶしぶ説明を始めた。

「トラックを何周かランニングした後、足にテーピングをしようと思って、ロビー前のベンチに戻ったら……。おまえらが、見えた」「そ、そうだったんだ。あのね、わたしが部室に本を取りに行ったら、たまたま勇人君がいて、一緒に帰ろうってなって、それで……」

わたしがしゃべっている途中で吉永君がさっさと前を歩き出す。

「なんか言い訳みたいに聞こえるけど。別におまえが誰と一緒に帰ろうが俺の知ったことじゃない。ただ……」

「ただ？」

歩みを止めた吉永君が、わたしに背中を向けたまま何か言いかけた。そして夕焼けの残り空を見上げながら話を続ける。

「秋の日暮れは早い。中間テストが終わって、部活で遅くなる日は……。あいつと帰れ。あいつがダメなら必ず仲のいい誰かと一緒に帰れ。いいな」

「真澄ちゃん……」

「今日みたいなことは、もう二度とごめんだからな。どうせ一人で帰るところを、さっきいたあの女たちに呼び止められたんだろ？ ゆう、そうなんだろ？」

「う、うん」

「いったい何を言われてあいつらにこのことについて行ったのか……。俺は部外者だから詳しくは訊かないが。それって、おまえらしくないよな。……なあ、ゆう」

首だけこちらに向けて彼が言った。わたしは、はいでもうんでもなく、曖昧にうなずくことしか出来ない。

「俺……」

なんだか吉永君の样子がいつもと違う。わたしは慌てて彼の横に並び、顔を覗きこんだ。

「何？ 真澄ちゃん。どうしたの？」

「あんな。あつ……。別にいいよ。何でもない」

「やだ。なんで言いかけてやめるの？ 教えてよ。何？ 何があつたの？」

「そんなに知りたいのか？ 変なやつだな、まったく。おまえには関係ないことなんだけどな……」

わたしはゴクンと唾を飲み込んで、その時を待った。

「実は、俺のじいちゃんが……」

「おじいさん？ 真澄ちゃんのおじいさんって、長野の？ ぶどうを作ってるおじいさんのこと？」

信号待ちをしている間、彼の返事を待ったけど、何も答えは返ってこなかった。

「おじいさんが、どうかしたの？」

もう一度訊いてみる。信号が青に変わり、吉永君の歩調に合わせて横断歩道を渡っていく間も、彼は無言のままだった。渡り終えて、バスターミナルの一角に足を踏み入れた時、ようやく吉永君が重い口を開いたのだ。

「じいちゃん、夏から体調を崩してて、親が向こうにしょっちゅう通ってるんだ」

「そ、そうなんだ。わたし、知らなかった……。母さんも何も言っ
てなかったし」

「だから……。ぶどうも。今年のが最後になるかもしれない。父さん
はぶどう園を継ぐ気はないみたいだしな。多分、だけど……」

吉永君の表情が硬い。もちろん、おじいさんのことが心配なんだ
ろうけど。でも、それではなくて、何か違うことが言いたいんじゃないかと、なんとなくそう思った。

「何だよ。なんでおまえまでそんな暗い顔になるんだよ」

吉永君の本心が知りたくて、ついつい気難しい顔になってたのか
な？ 無理やり笑顔を作ろうとしたけど、うまくいかない。こんな
時こそ吉永君を励ましてあげないといけないのに、なぜかわたしま
で悲しい顔になっている。

だって、毎年もらってたあの立派なぶどうが、今年で最後になる
かもしれないんだよ。会ったこともないおじいさんだけど、なんと
なく胸の辺りがぎゅっと締め付けられるような切ない気持ちになっ
た。

「おじいさん、大丈夫かなって。そう思ったら、なんだか悲しくな
っちゃって。毎年おいしいぶどうを分けてもらってたでしょ？ わ

たし、あのぶどう、日本中の果物の中で一番好きだったんだもん。
今年のは特に甘くて大粒だったし」

「あ、ああ」

吉永君の顔が徐々に和らいでいく。頬に赤みが差し、少し照れたように笑っている。

「真澄ちゃんのおじさんもおばさんも、大変だね」

「まあな。今は母さんが向こうに行ってるよ。だから、塾のことは心配いらない」

「へ？」

なんでここで塾の話？

「おまえ、ホントに鈍いなあ。父さんは仕事が忙しくて帰ってくるのは夜中だし……。つまり塾をサボっても、誰にも叱られないってことだよ」

なーんだ。そういうことか。やっと意味を理解したわたしは、やっぱり吉永君の言うとおり、かなり鈍い思考回路の持ち主であると改めて自覚し直す。

でも言いたかったのは、本当にそのことだけなの？ 鈍いはずのわたしの脳裏に、解けずに残ったクロスワードパズルの空欄が、ぼんやりと映し出されていた。

まだ誰も乗っていないバスがロータリーを回って、乗り場に到着した。わたしはカバンを肩に掛けなおして、列の最後部に並ぶ。すると吉永君がずっと列から離れた。

「真澄ちゃん、どうしたの？ 乗らないの？」

「ああ。塾の授業があとひとコマあるから、それだけ受けて帰る。いいか、ゆう。バスを降りたらマンションのエントランスまでダッシュするんだぞ。いいな？」

わたしは吉永君の目を見てコクリと頷く。すると彼が白い歯を覗かせて、少しだけ微笑んでくれた。

とうとうわたしの乗る番だ。吉永君と一緒に帰れると思って、密かにわくわくしていたのに……。しょんぼりしながらも、吉永君から目が離せなくてもたまたしている、続けてご乗車下さいって、運転手さんにマイクで注意された。

バスに乗り込み、吉永君が立っているところに一番近い席に座る。窓に顔を寄せて、彼に向かって手を振った。

その瞬間、吉永君がふわっとした笑顔を浮かべ、恥ずかしそうに横を向く。わたしと目を合わせないまま徐に右手を挙げて、その手を振り返してくれた。

エンジンがかかり、静かにバスが発車した。

わたしは、吉永君の姿が見えなくなるまで、ずっと窓に顔をくっ付けたまま、手を振り続けた。

25・恋愛談義

「でさ、先輩ったらさ、わからないところがあったら、いつでも電話してきてって。えへへ……。番号もメアドも難なくゲット！」

絵里がわたしと麻美の前で大きくピースサインをしてみせる。昨日あこがれの先輩と図書館で勉強をした絵里は、終始ご機嫌だ。

「それで、電話したの？」

絵里はきつとこのことを真っ先に聞いて欲しいはず。もちろん電話したよ……。って返ってくるのはわかっていているけれど、一応訊ねてみる。やり取りしたメールだって見せてくれそうな勢いだ。わたしと麻美は身を乗り出して、絵里の右手の中の携帯を覗き込んだ……が。

「するわけないじゃん」

絵里は澄ました顔をして即答する。するわけないって……。な、なんで？ どうしてしなかったの？ 予想外の回答に啞然とする。麻美も同じだ。

「ちょっと、あんたたち。何もそこまでびくくりしなくても……。あのね、これは恋愛のテクニクのひとつなの。うちのアネキの常套手段なんだけどさ。ある一時期、すーっと彼から遠ざかるの」「遠ざかる??」

麻美とほぼ同時に声を揃える。

「そう。アタックをやめるの。するとね、今度は向こうが焦り出さ
んだって。自分は何もなくても相手が勝手に言い寄ってくるんだ
って、のうのうと胡坐あぐらをかいているところに、突然、魔の静寂が訪
れるってわけ。待てど暮らせど、彼女からは何の音沙汰もなし。こ
れって、どう？ 効き目ありそうじゃない？ この作戦で、一定期
間、先輩のリアクションを待ってみようと思うんだ。今こそ我慢の
時よ」

相変わらず絵里の唇のグロスは、濡れたようにツヤツヤと光つて
いる。あれからもう三回も色が変わった。お姉さんのポーチから次
々と拝借しているのに、まだ絵里のお姉さんは気付いてないんだっ
て。お姉さんっていったい、いくつグロスを持っているのだろう。
わたしは女子大生になるのがちょっと恐ろしくなった。

学校が終わった後、テスト勉強という名目でわたしの部屋に三人
で集まっている。愛花は二人に合わせる顔がないのか、自分の部屋
に閉じこもったままだ。吉永君が麻美と付き合っていることはすで
に愛花にも言っている。最初はブツブツと不満を口にしてはいたけど、
あきらめたのか、今はもう何も言わない。

わたしの部屋の真ん中のミニテーブルに、一応教科書が置いてあ
るけれど、まだ誰もそれを手にしていない。絵里の恋愛談義が佳境
に入り、今はそれどころではないんだよね。

絵里の大好きな人が、わざわざ時間を作って勉強を教えてくれた
んだよ。それって先輩も絵里に気があるってことだね。それなら
何も心配はいらないはずなのに、どうして電話もメールもしないの
かな？ いくら作戦だからって、そこまで我慢する必要なんてない
のに。今夜あたり心配になった先輩から連絡があるんじゃないかと
思う。だって、絵里みたいな美人な女の子が彼女になるかもしれない
んだよ。先輩だって嬉しいに決まってるよね。

さつきわたしが台所におやつを取りに行った時、麻美が手伝うと言って、一緒についてきた。そして、絵里に聞こえないようにそつと昨日のことを訊ねるのだ。

きつと麻美にそのことを聞かれるだろうって思ってたから、昨日の夜から考え抜いて答えを用意しておいた。吉永君は絶対麻美にわたしを助けたなんて言わないはずだ。だからわたしも麻美には知らせないほうがいいと思った。

いくら近所のよしみだからって、自分の彼氏が親友と関わったことがわかったらいい気がしないもんね。

隙を見てダッシュで逃げ帰ったと言っておいた。嘘じゃないもん。本当のことだもの……。

わたしがにつこり笑ってそう言ったものだから、麻美もそれを聞いてほつとしたのか、よかったと涙を流さんばかりに喜んでくれた。優花はかわいいんだから、変な人に言い寄られないように気をつけて、なんて、お世辞まで付け加える始末。麻美ったら無理しなくてもいいのに。

麻美は相変わらず控えめだ。絵里が先輩の話を次々と披露してくれるのに、麻美は吉永君のことは何も話さない。

絵里は多分、わたしに気を遣っているんだろうね。いつもの絵里は今日みたいに自分のことばかり自慢するタイプじゃない。わたしが吉永君を好きだってことを知っているから、麻美に彼の話をふらないようにしてるんだと思う。わたしが麻美と吉永君のラブラブ話を聞けば傷つくと思うているんだ。

そりゃあ少しは寂しい思いををすると思う。でもね、大丈夫だよ。タベ吉永君とは、なんとなく二度目の仲直りもしたし、もう何も思いない残すことはないと思ったから。何か言いたげな彼の様子は気になつたけど、それを心配するのは彼女である麻美の役目だ。わたしが口出しすることじゃない。

「ねえマミ。 吉永君は優しい？」

おもいきって麻美に訊ねてみた。その時の絵里の驚いた顔ったらなかった。麻美も一瞬びつくりしたようにわたしを見ていたけれど、みるみる頬を染めて、下を向いてしまった。

「……優しいよ」

消え入りそうな声で、麻美がつぶやく。麻美、どうしてそんなに恥ずかしがるの？ 麻美こそわたしなんかよりずっとかわいいし、魅力的なだからさ。もっと自信を持つて。

「マミ。ここだと吉永君ちも近いんだし、わたし達に遠慮しなくてもいいからさ。カレのところに行ってもいいんだよ」

わたしは、出来るだけ自然にさりげなくそう言った。同意を求めるように絵里の顔を見る。

「そ、そうだね。マミがそうしたいんなら、吉永のところに行けばいいよ」

絵里もわたしに合せて言ってくれた。絵里がわたしを見る目がどこか悲しそうだ。ところが麻美は顔を上げると、首を横に振る。行かないよって。

「あのね、テスト期間中は、それぞれが自分のペースで勉強しようって、そう決めたの。だから、真澄君のところには行かない。みんなも気にしないでね」

「そう、なんだ……」

絵里が麻美の顔をじつと見ながら頷く。麻美は絵里から慌てて目を逸らし、突然、日本史の教科書を手にした。

「あ、あたしさ、今回、日本史が一番やばいの。戦国時代って、武将の名前がいろいろ出てくるしね。戦もいろいろあるでしょ？ そうそう、数学と化学はみんなの力になれると思うから、なんでもきいてね」

「ちよつと待った！」

絵里が麻美の教科書を、スポツと上から取り上げる。

「マミ。あんたさあ、なんかおかしくない？ 目の動きが変だよ。あたし達に何か隠してるでしょ？ 違うとは言わせない」

絵里は麻美のどんな些細な変化をも見逃しはしなかった。さつきから麻美の目が泳いでいるように見えたのは、気のせいなんかじゃなかったんだ。

「え、絵里ったら、どうしたの？ あたしはいつもどおりなのに。ちつともおかしくなんかない」

「じゃあ聞くけどさ……。吉永とは、その……。ど、どこまでいつてるの？ はぐらかさないで、ちゃんとあたしの目をみて言って！」

絵里……。それって、あ、あれだよな。付き合いの進行度合いを……。聞いているんだよね。でも絵里の目は真剣そのものだ。興味本位で言ってるとは思えなかった。

わたしは唇を噛み締めて麻美の答えを待った。

26・いやだ、聞きたくない

「そ、それは……。どうしてそんなこと聞くの？ 絵里や優花には関係ないでしょ」

「そんなことない。ねえ、今すぐ言つてよ。いいじゃない、それくらい教えてくれたつて。あたしたちさ、ママのことこんなに応援してるんだよ。ねえ、言つてよ。やっぱ、キスくらいは……したよね？」

き、キス……。麻美と吉永君がそんなことしてるなんて、考えたくないし、聞きたくもない。手で耳を塞ぎたい衝動をなんとか抑える。

「えっ？ あ、ああ……。した……かも」

麻美がしどろもどろになる。言いたくなければ言わなくてもいいのに。絵里はいったい何を考えているの？ なんだか麻美がかわいそうだ。

「かも？ かもって何よ。したか、しないかの、どちらかしかないでしょ？ 気を失つててわからなかったなんて言い訳は聞きたくないし、信じないから」

「絵里……。わかった。言えはいいでしょ、言えば！ キス……した。したわ。ちゃんとキスした。だって、あたしたち付き合ってるんだもん。したって誰も文句言わないよね？」

麻美……。わたしだつてもう十六だ。恋人同士になれば、そういうこともするんだらうなつて……。なんとなくイメージできる。麻美と吉永君は付き合っているんだもの。不思議でもなんでもない。

でも、頭ではそうとわかっていても、こうやって麻美の口から直接聞かされると、胸が痛い。鼻の奥がツンとしてくる。いやだ。本当はこんなこと聞きたくないよ。吉永君が誰か他の人とそんなことをしてるなんて、想像するのもいやだ。口の中に苦い血の味が広がる。唇を強く噛みすぎたせいだ。

とうとう絵里も最後の麻美の気迫に負けたのか、問い詰めるのをやめた。

「ママ、ごめん。こんなこと無理やり言わせちゃって……。あたしってひどいよね。悪かったと思ってる。でも、最後にひとつだけ。お願い。正直に答えて。吉永とは、本当に付き合ってるんだよね？」

絵里。なんでそんなこと聞くの？ たった今、キスしてるって麻美が言っただけだよ。聞くまでもないことでしょ。それなのに……。

「……付き合ってる。テストが終わったら、遊園地に行こうって約束してる」

麻美が抑揚のない声で自分の手の指をじっと見つめながら答えた。

「そう……。わかった。ママ、疑うようなこと言ったりして悪かった。でも……。もし何か困ったことや悩んでいることがあったら、何でも言ってよね。あたしも優花も、相談にのるからさ」

絵里が麻美の視線の先にある震えている彼女の手に自分の手を重ねながら言った。

「絵里。ありがとう。その時は、よろしく……。ね。今は、大丈夫だから」

ようやく顔を上げた麻美が、精一杯の笑みを浮かべて言う。

「そっか……。ママはわたし達より、一足早く大人に近付いたんだね。なんだかわたしも早くカレシが欲しくなっちゃった。いいな、ママがうらやましい……」

わたしは本当に心からそう思った。早くわたしも、みんなに胸を張って言えるような大切な人にめぐり会いたい。

「やだ。優花にはピッタリな人がいるじゃない」

麻美が陰しかった表情を緩めて言う。わたしにピッタリな人？
誰のことだろ。そんな人、いたっけ？

「鳴崎勇人。最近、優花とよく一緒にいるよね。彼ならわたしのオススメ物件だよ。クラスでも人気あるし、いい奴だしね。優花だって、まんざらでもないんじゃない？」

わたしは麻美の言葉をしっかりと受け止め決意を新たにした。昨日のミイとサリといい、そして今日の麻美といい。勇人君との仲をこれほどまでに疑われるのは、やっぱりわたしにも原因があるんだ。明日からは疑われないように気をつけなきゃってそう思った。

それにしても今麻美が言ったことを勇人君が聞いたらなんて思うかな。いやいや、絶対に聞かせられないよね。勇人君が気の毒すぎる。

麻美の言うとおり、勇人君はいい人だと思う。優しいし、頭もいいし、おまけにイケメンだ。でも、だからって好きになるとは限らない。いじわるで、冷たくて、たまに怖い顔をする人を好きになる

ことだってある。人生ってそんなものだ。

「マミ。わたしね、鳴崎君のことは、ただの部活仲間としか考えられないの。好きとか、付き合うとか、そんな風に思うことはできない。多分、これからずっと……。それに、鳴崎君だって、きっと好きな人がいると思うし……」

そう。たとえわたしは勇人君を好きになることがあったとしても、報われないってわかってるしね。だって勇人君が好きなのは、麻美なんだから。

「そうかな？　一緒に委員をしてた時、確かフリーだったはずだけどなあ。あの整いすぎたきれいな顔をくしゃっと崩して、恋人募集中って言った。あたしがふざけて立候補しようかなって言ったら、彼マジになっちゃって。びっくりしたこともあったけど……。でも優花にその気がないのなら、あきらめるよ。でもさ、クリスマスまでまだ二ヶ月近くあるし。もし優花の気が変わったらあたしに言って。鳴崎はちょうど席も隣だし、優花のことを持ちかけるのには絶好のチャンスだからさ」

「う、うん。ありがと、マミ」

麻美は全く勇人君のことは眼中にないんだね。なのに勇人君ったら、実はもうすでにどさくさに紛れて麻美にアタックしてたんだ。麻美は軽いジョークとして聞き流していたみたいだけど、まさか彼が本気だったなんて思いもしないんだろうな。恋って、なんでこんなに切ないのかな……。

「さあ、てそこのお二人さん。そろそろ勉強しませんか？　マミ先生に質問するなら今のうちだよ」

絵里が数学のプリントを広げ、難しい問題をピックアップして、麻美にすぎりつく。二時間ほど勉強をして、母さんが仕事から帰ってきた時に、入れ替わるようにして二人が帰った。

夕食も終えて、お風呂から上がったちようどいいタイミングで、メールの着信音が響いた。絵里からだ。濡れた髪をタオルでくるみ、携帯を開く。

わたしはそれを見て、言葉を失った。

27・しょっぱいケーキ

優花、今日はありがと。で、マミのことだけど。あの子、かなり苦しんでる。何があつたか知らないけどさ。それに、多分付き合つてないよ。吉永と。キスの話だつて真相は不明。だから優花。吉永のこと、絶対にあきらめちゃダメ。それと……。ホントはね、あかし。先輩とはダメだったの。じゃあまた明日、学校でね。

絵文字も顔文字もないシンプルな画面がくつきりとわたしの脳裏に焼きつく。もちろん、麻美のことは衝撃的だ。付き合つてないつて、本当なのかな？　あまり自分のことを話さない麻美だけど、前にわたしが吉永君のことを訊ねたら、帰りはいつも家のそばまで送つてくれるし、毎晩何度もメールのやり取りもしてるつて言つてた。でも絵里の言うことが正しいとしたら……。麻美が嘘をついてたつてことになる。

昨日の吉永君の態度を思い出すと、それも頷ける。普通、付き合いつている彼女を置き去りにして、どこかに行つてしまうなんてこと、ないよね。

吉永君は本を買いに行く麻美と、塾まで一緒に歩いていただけだつて言つてた。だとしたら、やっぱり二人は付き合い合っていないのかもしれない。

結局、吉永君と麻美がうまくいつてるとばかり思つてたのは、わたしの思いすごしだったつてわけだ。

絵里は麻美の行動がどこかおかしいことにいち早く気付いていた。だからさつきもあんなに真剣に、麻美に向き合つていたんだね。

それなのに……。絵里。先輩とダメだったつて、それ、ホント？　一言だつて、そんなこと言わないで、あんなに明るく振舞つて……。麻美やわたしのことばかり気遣つてた。

何て返事をしたらいいのかわからなくて。絵里、と打つただけで、

画面が涙でかすんで見えなくなった。

テストも無事終わり、午前中で部活が終わった土曜日の午後、わたしは絵里に誘われて、ケーキショップに来ていた。

「今日はね、あたしのおごり。食べて食べて、食べまくらう!」

店の中はすでに満員で、三十分も並んでようやく座席を確保できた。一個百円のプチケーキはどれもおいしそうで、みんなところ狭しとお皿に並べている。十個以上だと飲み物がサービスってこともあって、絵里もわたしも、もちろん十個選んだ。

「おいしいっ! めっちゃうまだね、このケーキ」

絵里が感激の第一声を発してパクパク食べ始める。わたしも負けずに口に運んだ。うーん。おいしい。チョコにクリーム、フルーツタルト、パイにゼリーに……。どれも絶品だ。

お皿のケーキが半分以上なくなりかけた時、絵里が突然鼻をすすり始めた。見ると鼻が真っ赤で、目には……いっぱい涙を浮かべている。

「絵里……」

あのメールをもらった翌日、昼休みに、いつもの図書室裏手のベンチで絵里の話を聞いた。初めは平静を装っていた彼女だったけど、最後には泣き崩れて、そのまま早退してしまったのだ。

次の日には笑顔で学校にやってきて、もう大丈夫と言っていつもの絵里にもどっていたけど、そんなに早く傷が癒えるはずもなく。

なんとか気力でテストを乗り切った絵里は、ここにきて、緊張の糸がポツリと切れてしまったのかもしれない。

「先輩ね、昨日、彼女らしき人と一緒に帰ってた。とてもきれいな人だった。先輩、なんだか嬉しそうでさ。もうそろそろ先輩のこと、あきらめなきゃって思うけど、そんな簡単に割り切れなくて……」

絵里は涙を流しながらも、どんどんケーキを口に押し込む。

「でもね、ありがたいことに、食欲だけはそのまんまなんだもの。こうやって甘い物を食べれば、気持ちも落ち着くかなってそう思ってた、今日は優花に付き合ってもらったんだ。あたしが失恋したの知ってるアネキが、それだけ食べれるんなら、同情の必要なしってからかうんだけど、残念ながらそのとおりかも。反論出来なかった。泣くたびに、心が軽くなっていく感じがするし、それに、今日で泣くのも最後になりそうな気がする。優花、今日は、ありがとう」

「ううん。ありがとうだなんて、そんな……。わたし、何もやってないよ。わたしの方こそ、いつも絵里に助けてもらうばかりなのに」

こんなわたしでも、絵里の力になってあげられているのかな？
わたしにできることといえば、こうやって彼女のそばにいて話を聞くことだけ。それだけしかできない。

「何言ってるの。それを言うなら、あたしの方がいつも優花に支えてもらってるんだから。優花と親友になれてよかったって思ってる」
「わたしだって」

わたし達は顔を見合わせてくすくすと笑った。絵里の頬がほんのりピンク色に染まる。瞳の輝きもふるふるした唇も。いつもの絵里のものだった。

わたしは、絵里はもう大丈夫だと、温かい紅茶を飲みながらなんとなくそう思った。

店を出て、ファッションビルに足を運び、冬物のセーターを一枚買った。絵里はもここのファーがついた今年はやりのブーツを買った。

「あたしたちってさあ、今日買ったのを身につけてデートできる日がホントに来るのかな？」

絵里がブーツの入った紙袋を持ち上げて、幾分情けない声を出す。

「わたしは……多分無理。このセーターを見てくれる人なんて当分現れそうにないよ」

わたしも負けずにセーターの入ったビニール袋を目の前にかざし、あきらめのため息をつく。

「ねえねえ優花。麻美はどうなるんだろ。今日、デートだつて言うてたけど、どう見てもウキウキしてるって様子じゃなかったよね？」

「うん。わたしもそう思った。なんか元気なかったし」

「あたしの予想が当たって欲しいなんて思っただけ。麻美はそろそろ決断を強いられるんじゃないかな。一方通行の想いに終止符を打つ時が近付いてると思う」

「絵里……」

「なんでだろ。あたしにはわかるんだ……。吉永が麻美を見てないって。きつとあたし自身も先輩に見られてなかったから、麻美のことも客観的に判断できるんだと思う。吉永が見てるのは、優花だよ」

絵里……。もしそれが事実なら、わたしはいつたいどうすればい

いの？

わたしは、吉永君を呼び出したあの夜のことを思い出していた。あの時彼が怒った理由は、わたしが彼のアドレスを消去したことだった。でも、それだけじゃなかったはずだ。そんなに大園のことが大事なら、おまえの言うとおりにしてやるって、悲しそうな目をして……彼はそう言った。

わたしは何かとても大切なものを見失っていたんじゃないだろうか。もし吉永君が、わたしのために麻美との交際を受けてくれたのだとしたら……。

わたしと麻美の友情のために、吉永君が自分の気持ちを押し殺して、麻美と付き合いおうと努力してくれていたのだとしたら……。

「絵里、ごめん。わたし……帰る」

わたしは目を大きく見開いて驚いている絵里を大通りに残したまま、バスターミナルに向かった。

マンションのロビーで、彼を待ち伏せするために……。

まだ外は人が見分けられる程度の明るさはある。普通、こんな早い時間にデートを終えて帰ってくるとは思えないけど、絵里の言ったことが本当だとすれば、吉永君がいつ帰ってきてても不思議はない。わたしは、ロビー奥の観葉植物の陰に立って彼を待った。部活帰りの中学生が賑やかにエントランスを通り抜ける。買い物を終えた家族連れも、大荷物を抱えて何組かそこを通った。

でも、吉永君はまだ帰ってこない。もしかして、とつくの昔に帰っていて、もうすでに家にいるのかもしれない。朝から麻美と会っていたのならその可能性もある。

あと五分だけ。わたしは心の中でそう決めて、祈るような気持ちで彼を待った。

バスが到着するたび定期的に、帰ってくる人が群をなす。見知った顔の人が次々と帰って来た。土曜日なので中高生も私服の人が多い。その人波が去ってしばらく経ってから、チュニツク風のワンピースに黒のレギンスを合わせた女の子が視界に入る。

わたしは目を凝らしてよく見た。……麻美だ。

「マ……」

ママと言いかけて、わたしは咄嗟に口を噤んだ。そして一步後ろに下がる。麻美はわたしがいることに気付かないままエレベーターに乗り込んだ。まさか、今から彼のところへ？ 小さな紙袋を胸の辺りで抱きしめるように持った麻美が、思い詰めたような顔をして上階に上がっていったのだ。

どうしたんだろ。足がガクガク震えてる。喉もカラカラだ。こん

なところにおいても仕方ないのに、足が前に進まない。次第に指先が冷たくなり、立っているのも辛くなってきた。麻美がここに来たってことは吉永君は家にいるんだよね。

デートが終わって、麻美が何かを渡しに来たんだ。それとも。今から彼の家でデートの続き？ お母さんは頻繁に長野に行っていると言ってた。誰もいない吉永君の部屋に麻美は行くのだろうか？

わたしはなんとか気力を振り絞って観葉植物の鉢の前に出た。周りに誰もいないのを確認して、エレベーターホールに向かい、ボタンを押す。二基あるエレベーターの一基がずっと降りてくる。幸い三階に停止した様子もなく、誰も乗っていない空っぽの箱が私の前で止まった。

するといつの間にか駆け込んできた五才くらいの男の子がわたしの横を潜り抜けて、エレベーターに飛び乗った。そして中からわたしを見てニツと笑う。後ろからその子の母親らしき人が走ってきてこれ！ とその男の子を叱った。

「どうもすみません。あれほど言ってるのに、この子ったらちゃんと並べなくて。ごめんなさいね」

「い、いえ、別に」

これくらい、いつでもあること。小学生のランドセル軍団のあつかましさは、これどころの騒ぎではない。わたしだって昔はそうだったのだし、別に取り立てて、その男の子を非難するつもりは無かった……のだけれど。

わたしがその子の母親とぺこぺこ頭を下げあっているうちに、隣のエレベーターが下りてきて、中から出てきた人と目が合った。長いまつ毛に縁取られた黒目がちなその目の持ち主は、麻美しかない。

「優花……」

「ま、マミ」

わたしは麻美の前に立ち止まり、男の子と母親を乗せたエレベーターが上がっていくのぼんやり見ていた。

「優花。今帰り？」

「うん」

わたしはあわてて麻美に視線を戻し、怪しまれないように、いつものように頷く。麻美はわたしが今日、絵里と会っているのは知っている。

「絵里、どうだった？」

麻美は絵里と先輩のことを心配しているのだ。本当なら一緒に行つて絵里を慰めてあげたいんだけど、行けなくてごめんねと昨夜メールを受け取っていた。麻美も絵里の失恋に心を痛めている一人だ。

「泣いていたけど……。もう大丈夫だと思う。マミは？ 今日のデート……。楽しかった？」

どうして吉永君の家に行っていたの？ なんてやつぱり聞けなかった。ただ……。麻美が上にいた時間はほんの数分程度だ。さっきの紙袋が手元に無いのを見ると、何かを渡したただけだっていうのがわかったから、訊ねるまでもないと思つたのもある。

「あつ、う、うん。楽しかったよ」

麻美がにこつと笑った。けれど、その笑顔はどこか寂しげで、心

から笑っているとはとても思えないほど、違和感があった。

「そう……なんだ」

「優花、あたし、そろそろ帰る。マンションの前で、ママが車で待ってるの。じゃあね」

麻美は長いストレートの髪を揺らしながら外に走って行った。

「ママ、バイバイ！ また明日……」

わたしがそう言った時、もうすでにエントランスのドアは閉まった後で、その声は彼女に届かなかったのだらう。麻美が振り返ることとはなかった。

わたしは気が抜けたように、がつくりと肩を落として、エレベーターホールに向かった。何をしたというわけでもないのに、例えようのない疲労感が襲ってくる。

エレベーターで見知らぬ人と一緒に乗り合わせるのも気が引けて、わたしは階段をとぼとぼと上がり始めた。ブーツのかかところがコツコツと音を立てる。その音がますますわたしの心の空洞に虚しく響き渡る。

もしかしたら絵里の予感は、思い過ぎだったのかもしれない。麻美は着実に吉永君との関係を深めていってると思えなくもない。

ぼんやり考えていると、誰かが下りて来る靴音が聞こえた。かなりのスピードだ。あつという間にその人とすれ違う。そして、わたしのすぐ下でその靴音が止んだ。

「ゆづー！」

吉永君が、驚いたような声でわたしを呼んだ。

29・待ってる

「ゆう、そこで、待ってる」

「真澄ちゃん！」

「待ってる。いいな！」

吉永君は一度下りかけて立ち止まり、わたしがそこにいるのを確かめるようにしてこつちを見ると、さつき麻美が持っていた小ぶりの黒っぽい紙袋を手にとって、また階段を下りていった。

あまりにも突然の出来事に、驚く暇も無かったというのが正直なところ。吉永君はきつと麻美を追いかけて行っただ。

でも、なぜ？　せつかく麻美が届けた紙袋をどうすんだろう。まさか返すつもり？

吉永君、麻美に会えるのかな？　あの後、すぐにお母さんの車に乗ったとしたら、もうその辺にはいないと思う。なら、家まで追いかける？　バスで？　じゃあ、わたしはどうしたらいいんだろう。

そこで待ってると言われた。真剣な眼差しで、彼は確かにそう言っただ。

待ってる理由なんて何もないのに、わたしはまるで魔法にでもかけられたかのように、そこから一歩たりとも動けなかった。

しばらくして、さつきと同じ靴音が階下から聞こえてくる。吉永君が戻ってきた。彼の手にはまださつきの紙袋が掴まれたままだ。麻美には会えなかったんだね。彼は少し息を荒げながら、わたしを見上げて言った。「……来いよ」と。

吉永君が下からわたしを呼んでいる。なのにわたしは、たった今

遅れて襲ってきた極度の緊張感に阻まれ、返事すらできないでいた。吉永君がわたしを見ている。相変わらず胸はドキドキするし、目だってまともに合わせられない。

そんなわたしに業を煮やした吉永君が、二段抜かしでここまで駆け上がってきた。そして……。わたしの手を取った。

ま、まさか……。

わたし達、手を繋いで……いる？

わたしはそれから先、どうやって階段を下りて、どこをどう歩いたのか、全く何も覚えていない。

ただ、吉永君の手が暖かくて、大きくて。歩道の横を車がすれ違う時、ギュって引き寄せるように握ってくれたってことだけは、どうにか憶えている。

次第にマンションから遠ざかり、わたし達がむかし通っていた小学校の近くの小さな公園に辿り着いた。

もちろんその間、吉永君は何もしやべらないし、わたしも口を閉ざしたままだった。繋がれた手ばかりに意識が集中してしまう。彼がいったいどんな表情をしていたかなんて、当然、覗き見るゆとりなどあるわけもなく。

薄暗くなつた公園に灯りが点る。ブランコも滑り台も何もない公園。春には桜が咲き、秋が深まると葉が真っ赤に色付く。

周囲の住宅からは、テレビの音がかすかに漏れ聞こえ、どこからかシチューの匂いが漂ってきた。

「あそこに座ろう」

吉永君は朽ち掛けた木のベンチを繋いだままの手で指し示した。

わたし達はそのままベンチに腰を下ろし、どちらともなく手を離した。

「大園を追いかけたけど、間に合わなかった」

吉永君が両手で袋を弄もてあそびながら唐突にそんなことを言う。

「おまえ、あいつに会わなかったか？ こんなもの俺に渡してさっさと帰って行っただけど、とてもじゃないが受け取れない」

わたしに返事を求めるでもなく、手元の紙袋をじっと見つめながら、吉永君がひとり話を続ける。その袋の中に何が入っているのかは検討がつかないけど、それは吉永君にとって不本意なものだということくらいはどうか想像がついた。

「俺は、別にこんな物が欲しくて、あいつと付き合いってたわけじゃない……」

わたしは思わず息を呑んだ。やっぱり吉永君、麻美と付き合い…… たんだ。なのに、わたし。いったい何を期待していたんだろう。手を繋いだくらいですっかり舞い上がってしまったて、こんなところまでついて来てしまった。絵里、わたし……。どうしたらいい？

「おまえがあいつと付き合うのを勧めた理由が、今日、やっとわかった。前に俺、おまえに辛く当たったろ？ 悪かったよ。謝る」

「真澄ちゃん……」

わかったって……。何がわかったの？ 麻美が何か言ったのだろ
うか。

「大園の奴、俺があいつのことを好きでもないのに付き合っているのを、最初から気付いていたんだよ。付き合ううちに好きになってくれたらいいって、そうも言ってた。それで、どうしても好きになれそうになかったら、その時、別れようって。それを決めるのが今日だったんだ」

「そ、そんな……」

麻美が心待ちにしているようにみえたデートが、実はそんな残酷な日だったなんて。

「昼にあいつが前から行きたがってたテーマパークに行ってきた。すごい人で、アトラクションもろくろく見れなかったよ。それがあいつ……。向こうですつと泣いてるんだ」

わたしは黙ってうんと頷くことしかできない。だって、麻美の気持ちに痛いほどよくわかるから。最後のデートになるかもしれない日に、にこにこなんてしてられないもの……。

「昼飯の時、何で泣いてるんだって聞いたんだ。そしたら……。あいつから、別れよう、別れたいって言い出して」

「う、うそ……。マミがそう言ったの？」

なんてこと？　ありえない。吉永君に断られる前に、自分から別れを切り出したとでも？

「あいつ、来年から違う高校に行くんだってな。だから、もうこの先俺と付き合っても仕方ないって言うんだ。こればかりは俺も寝耳に水だった。おまえはそのこと、知ってたんだろ？」

「あつ……!!」

それって、転校が決定したってことだよ。知らなかった……。麻美、ホントに転校しちゃうんだ。中間テストの成績が芳しくなかったのかな？ 総合順位は聞いてないけど、数学は学年で最高点だったって言うてたのに……。

「転校する友達の最後の願いを叶えてやりたい……。おまえの考えそうなことだよ。夏休み明けに長年のおまえとの誤解が解けて、やっと俺達、仲直りしたんだよな？ この先、また昔みたいな関係にもどれるかなって、期待してた。もう絶対に、ゆうをいじめたりしないって、あの頃のバカな自分を反省したんだ。なのによ。その矢先に、大園の話をおまえに聞かされて。俺、ホント、どうしていいかわからなかった。おまえがまた、俺から離れていくみたいで、辛かった」

ああ……吉永君。たとえ、ほんの少しでも、わたしのこと、そんな風に思ってくれてたんだ。わたしだって、苦しかった。心も体もつづれそうなほど、辛かった。吉永君がわたしと同じ気持ちだったって思ってもいい？

「真澄ちゃん、ゴメンね。わたしだって真澄ちゃんと仲直り出来て嬉しかった。だからマミのこと、本当は言い出しにくかったの。だって、だって、わたし……真澄ちゃんのこと」

「もういいよ。おまえヒヤヒヤしてたんだろ？ 俺と大園がいつ別れるかって。もしそうだったとしても、おまえには何の責任もないから。俺の努力が足りなかったただだからな。だから気にするな」

「真澄ちゃん。そうじゃなくて、わたし、わたし……」

「なあ、ゆう。俺な、今夜から、長野に行くんだ」

「えっ？ 長野？」

もう少しで、気持ちを伝えられたのに……。吉永君がわたしの決

心を揺るがすような一言を口走った。

「じいちゃん、相当悪いみたいで。医者に身内を呼んでおけって言われたらしい」

その時、公園の片隅に集まっていた落ち葉がカサカサと音を立てたかと思うと、一瞬のうちに風に吹かれて空中に舞い上がった。

30・ふたり

「じいちゃん、相当悪いみたいで。医者に身内を呼んでおけって言われたらしい」

おじいさん、危篤なんだ……。わたしは息をひそめて吉永君の話に耳を傾けた。

「今夜、父さんが帰って来たら、車で長野に行く。もしじいちゃんが、その、死ぬようなことになったら……。しばらくはこっちに帰って来れない」

吉永君の声が、低く、小さく、そう告げた。

時間が……。止まった。

周りの景色が一枚の絵のように、眼前に貼り付いている。公園の植え込みから猫が出てきて怪しく瞳を光らせ、ほんの一瞬こちらを見て、そのまま走り去った。沈んだばかりの太陽の上部に低く垂れ込めている灰色の雲。夕焼けはほんのわずかも残っていない。雨の匂いのする夜風がすうつと頬をかすめる。

静かに押し寄せてくる夜の帳に背中がゾクツと震えた。

「なあ、ゆう……」

こういう時って、なんて話しかけたらいいのだろう。 そうなんだ、大変だね。 そんなありきたりな言葉しか思いつかない。

何も言えずに黙り込んでいると、吉永君が静かにわたしの名を呼んだ。 つぶやくように。そして何かを思い出したように。 それとも、

これと言った理由もないのにただわたしの名前を口にただけ、
でも言うように……。

「なに……。真澄ちゃん」

しばらく間を空けて、そっと返事をした。

「おまえ、この前言ってたよな？　じいちゃんのぶどうが、日本中の果物の中で一番好きだって」

「うん、言った。だって本当なんだもん。おじいさんの作ったピオ―ネが、お店で買うのより、ずっと甘くて、大きくて、おいしいと思う。そうだ！　真澄ちゃんの顔を見たら、病気も早く治るんじゃないかな。おじいさん、きつと元気になるよ。また来年もおいしいぶどうが作れるってば」

吉永君がほんの少し微笑んだように見えただけ、細めた目はやっぱりどこか寂しそうで、遠くの空を見つめたままだ。

「そうだな。じいちゃんには、絶対、治ってもらわないとな。これからもずっと、あのぶどう、おまえに食わせてやりたいし……」

真澄ちゃん……。ありがと。そうだよ、大丈夫だって。おじいさん、きつと治るよ。わたしはさつき吉永君と繋いでいた右手を左手の手のひらで包むようにして胸の辺りに持ってゆき、おじいさんの具合がよくなりますようにと心の中で祈った。

吉永君の視線を感じて、ふと横を見ると……。

「ゆう、おまえの昔の夢、今も変わってないのか？」

この前、バスターミナルで見送ってくれた時に見たような、ふわっとした笑顔を浮かべて、吉永君がわたしに訊いてくる。

突然何を言い出すのかと思えば、そんなこと……。わたしがアナウンサーになりたいってことかな？

「将来の夢のこと？」

的外れな答えを言う前に、確認してみる。

「ああ」

吉永君の目がじっとこっちを見てる。やだ、緊張するよ。でもこの状況で視線を逸らすのはもつと勇気がいる。自然と回数の増えるまばたきにきまりの悪さを覚えながらも、なんとか答えた。

「う、うん。昔のまんまだよ。今でもアナウンサーになりたいって思ってる。でもさ、すっごく採用が難しいのも知ってるし、なんてたって、この顔だしね。なれるわけないのは百も承知なんだけど、いつまでも夢見る少女みたいで、おかしいでしょ？」

おじいさんの話を聞いたばかりで不謹慎かとも思っただけど、少しだけ舌を出して、肩をすくめてみる。だって、将来の夢の話だよ。面と向かって話すのは、告白するのに匹敵するくらい、とても恥ずかしい内容だと思わない？

「別におかしくはないけど。じゃあ、進学先も決めてるのか？」

吉永君は少しも茶化さず、真面目な顔をしてわたしの夢を受け止めてくれた。

「うん。A学院大学。この大学出身の有名な女子アナがたくさんいるし、家からも通えるし」

「そうか……。わかった」

えっ？ わかったって、何がわかったのかな？ ちなみにわたしが目指しているA学院大学はミッシヨン系の女子大だ。吉永君にとつては何の役にも立たない情報のはずなんだけどね。

「俺が帰ってこなかったら……」

帰ってこなかったら……って。ちょっと待って。なんなの？ それって、どういう意味？ おじいさんに会いに行くために長野に行くんだよね？ それとも……。そうじゃないの？ わたしの心臓が俄かに鼓動を早める。

「お、おい、そんな顔するなよ」

吉永君がわたしを見て慌てる。わたし、どんな顔してたんだろ？ ただ、息が止まるかと思うくらい、びっくりしたのは確かだ。

「いや、違うんだ。俺の言い方が悪かったよ。向こうにいる滞在期間が長引いても、心配するなってことさ。大園にもそれは言ってる。だから……。おまえも、その、なんだな。変な奴に惑わされないように、元気でいろって、そう言いたくて」

「真澄ちゃん、なんか変。わたしには、もう帰ってこないって風に聞こえる。まさか、このまま長野に行きたきりってことはないよね？ 真澄ちゃん。ねえ、教えて？」

わたしは必死になって吉永君に詰め寄った。絶対に帰ってくるという言葉を聞くまではあきらめない。

「な、何言ってるんだよ。あたりまえだろ。そんなわけない。その証拠に学校にだってそんな話はしてないからな。ただ、すぐには帰って来れないって事情もあるんだ。ぶどう園の手入れとか、いろいろな。田舎はこっちと違って、昔からのしがらみとかもあるし」

そ、そうだよ。吉永君のお父さんだってぶどう園を継ぐ気はないって言ってたんだし、みんなして向こうに行ったきりなんてことはない……はず。

わたしは、まだ心のどこかにもややもやとした物を感じながらも、彼の言ったことを信じようと自分に言い聞かせる。

その時、聞き慣れない携帯の着信音が近くで聞こえてきた。ポケットから携帯を取り出した吉永君が、ごめんといいながら、隣で話し始める。

「わかった。すぐに帰る。……ああ、すぐ近くにいるから。じゃあ」

短く話し終えると、携帯を閉じながら吉永君が立ち上がった。

「父さんから。ゆう、ごめん。そろそろ帰るよ。帰ってきたら、授業のノート見せてくれる？ お礼はぶどうジュースってことで」
「お礼なんて、いいよ。そんなこと気にしないで、さ、早く。ノートはしっかり取っとくからさ。気をつけて行ってきてね」

わたしは足早に先頭を切って歩き始める。すぐに追いついた吉永君が横に並んだ。でも、再びわたしの手に彼の手が重なることはなかった。

おじいさんが回復して、彼が長野から帰ってきたら、今度こそちゃんとわたしの気持ちを伝えよう。今日はそのつもりで絵里のもと

を飛び出し、待ち伏せまでしていたんだもの。次は大丈夫。絶対に
言える。

そして……。もしもその時、吉永君が麻美を選んだなら……。今
度こそ、彼のことはきっぱりあきらめよう。

わたしは風に当たって冷たくなった右手をぎゅっと握り締めて、
吉永君の歩調に合せ、帰路を急いだ。

31 やつてらんない

今日の時間割は、数A、国語総合、体育、現社、そして英語1にホームルーム。もちろんどの時間も、斜め後ろの吉永君の席は空席のままだった。高校に入学後、初めての欠席に、どの教科の先生も驚いた顔をしていた。

担任の先生は、吉永君の欠席理由を家の都合としか言わなかったけど、陸上部の人たちから情報が漏れたのか、彼が長野に行っていることは放課後にはすでにクラスの全員に知れ渡っていた。

わたしが一昨日の土曜日に、買い物の途中で絵里を大通りに残したまま帰ったことが、吉永君に関係していると見抜いている絵里は、ふふんと鼻を鳴らし、わたしを問い詰める。

「知らないとは言わせない。あの日、会ったんでしょ？ 吉永と」「もうホント、絵里には敵わないよ……。なんで会ったってわかるの？」

「そんなの簡単よ。優花の顔に書いてあるもん。で、どうだった？ 今日のマミの元氣のない様子からすると、あの二人、やっぱ、付き合ってたんでしょ？」

誰もいなくなった教室の片隅のひとつの机を囲むように座って、絵里がわたしの顔を興味深げに覗きこむ。

「それが……。付き合ってたみたいなんだ。でもこの先も付き合うかどうかは、まだ聞いてない」

「うそ！ それ、ホント？ ホントのホントにあの二人、付き合ってたの？ 信じられない。付き合ってるって、形だけなんじゃ

ないの？ あたしさ、いつもアネキを見てるから、それとなく、恋愛中の女心ってわかるんだよね。マミを見る限りじゃ、どうも違うような気がする。でも、吉永本人が言うんだから、疑いようがないよね……。吉永が見てるのは優花のはずんだけどな」

「吉永君はね、わたしが彼を好きだってことは、これっぽっちも気付いてないの。だから、純粹にわたしがマミを応援してるって思ってる。ってことは、逆に考えると、彼もわたしのことは何とも思っていないのかもしれないよ」

「うーん……」

絵里が腕を組み、まだ納得のいかない顔をして低く唸る。彼女の直感どおり、吉永君が少しはわたしのことを思ってくれてるのかなと期待したけれど、公園でそれらしきことは何も言われなかった。でも……。

「ねえ、絵里。ちょっと訊ねてもいい？」

「何？」

「あのね、たとえばの話なんだけど。好きでもなんでもない相手のことが、気になって、心配で心配でたまらなくなることってあるかな？」

「へ？ 何それ。誰の話？」

え、絵里。だから、たとえばって言ってるし。そんな疑わしい目でじっと見ないでよ。

「いや、あの、一般的に……」

「吉永に言われた？」

う、うわあー。なんでこんなに早くバレるんだろ。また顔に書いてあったのかな？ どうりでいつも優花にトランプで負けてばかり

なわけだ。

「そ、その……。前に吉永君に、そんなこと……言われて」

「ふうっ。やってらんないよ。……あのね、優花。嫌いな人やどうでもいい人のことが、心配で心配でたまらなくなったこと、ある？ 悪いけど、あたしはない。好きな人と親友と家族以外にはそんな気持ちにならない。で、吉永に何の心配をかけたの？ あたしの目が節穴だと思ったら大間違いよ。なんか、テスト前くらいから怪しかったのよね、優花とマミ……」

わたしがミイとサリに言いがかりをつけられた日のことは、絵里にはまだ何も話してない。でも次の日のわたしとマミの態度がぎこちなかったせいで、絵里はずっと不信感を抱いていたみたいだ。絵里自身が先輩のことでごたごたしてたから、その時は追求されなかったのだけど、それも今日まで。

わたしはついに白旗を揚げ、すべてを絵里に話した。

「優花、これからしばらくは絶対に一人で帰っちゃダメだよ。鳴崎でも誰でもいいからさ、一緒に帰った方がよくない？ 危なっかしかったらありやしない。にしても吉永。めっちゃカッコいいし。あたしもそんな風に助けられてみたい……。でもさ、吉永も無理してるよね。優花が彼にマミを紹介したのが、そもそも間違いだったんだよね」

「うん。でもあの時は、吉永君は絶対にわたしのことなんて何とも思っていないって、信じて疑わなかったんだもん。……わたしね、決めたんだ」

絵里がはっと何かに気付いたかのようにわたしを見た。

「吉永君に、気持ちを伝えることにしたの。吉永君がどう思ってい

ようと関係なく。それで、彼がマミを選んだら、わたしはきっぱりあきらめる」

「優花……」

「わたし、絵里に背中を押されたの。絵里はちゃんと先輩に気持ち伝えて、いつも自分にしっかりと向き合っている。だからわたしも決めたんだ。マミにもきちんと説明するつもり」

「そうだね。それがいいよ。あたしだってマミが振られるのは辛いけど、優花が自分に嘘ついて、マミに同情してるってことの方がもっと辛い。マミのためにも、ここは正々堂々と戦うべきだよ」

「絵里。戦うだなんて、大袈裟だよ。それにマミが振られるって決まったわけじゃないし」

「またそんな弱気なこと言っで。とにかくすべては、吉永が帰ってきてからだね。さーで、そろそろあたしたちも帰ろっか」

絵里が机をポンと軽やかに叩いて立ち上がり、教科書と副読本でぎっしり詰まったカバンをよいしょと持ち上げた。わたしも重いカバンを肩に掛けて、教室を出ようとしたその時、バタバタと走るスリッパの音が廊下に派手に響き渡った。

「あれ？　もしかして、鳴崎君？　優花、ほら、あそこ」

絵里が窓から教室を覗き込む人物に指を差す。わたしはいつになく慌てた様子のその人に、瞬時に駆け寄った。

「勇人君！　どうしたの？」

「ゆ、ゆうちゃん。ハアハア……。大変なんだ」

勇人君のありえないほどの狼狽^{こぼれ}ぶりに、わたしは思わず絵里と顔を見合わせた。

32・サリの告白

「あつ、どうも」

わたしの後ろにいる絵里に気付いた勇人君が、決まり悪そうに頭を下げた。

「ど、どうも」

絵里も勇人君に合わせるようにペコツと頭を下げる。絵里と勇人君はほとんど面識がない。といっても同じ高校なので顔くらいは知っているけれど、話すのは多分初めてじゃないかと思う。

お互いに少々よそよそしいのは、この際目をつぶるとして。

「優花、あたし、先に帰ろっかな？　なんかお邪魔みたいだし……」

いたたまれなくなったのか、絵里がわたしの耳元でぼそつと言った。

「そんなことないって」

とわたしが絵里を引き止めるのとほぼ同時に、勇人君が話の矛先を突如絵里に向けた。

「あ、あのう、本城さん？　だよね。たしか……大園と仲いいよね？」

勇人君のあまりに唐突な質問に、絵里はポカンと口をあけたまま、はあ？　と訊き返す。

「あつ、こんなこと突然訊いてごめん。突然ついでお願いがあ
るんだけど……。たった今、彼女が学校を出たところなんだ。本城さ
ん、頼みます。一緒に帰ってくれませんか？　どうか、お願いしま
す」

「べ、別にいいけど。何かあったの？　マミの具合が悪いの？」

尚もきよとしたまま、絵里が勇人君に訊ねる。

「いや、あの、その……。とにかく一人にできなくて。今ならまだ
間に合うよ」

「鳴崎君、わかった。ってことはマミは部活も休んだってことだよ
ね？」

「うん。そうなんだ。早く、早く追いかけて！」

不可解極まりない勇人君の言動にも臆することなく、その場の空
気を的確に読み取った絵里は、次の瞬間教室から飛び出していた。

わたしも当然のように絵里と一緒に麻美を追いかけようとする
と、勇人君に止められた。

「待って、ゆうちゃん！　先輩が俺とおまえを部室に呼んでるんだ。
それでここに誘いに来たらちょうど本城さんがいて……。実は、大
園が……。変なんだ。あいつ、今朝からどうもおかしいんだよ。いつ
もと違う。顔色も悪いし、授業中もずっと考え事をしてるみたいだ
ったし。もしかしたら真澄が欠席してることに何か関係があるのか
もしれないけど。とにかく彼女が心配で。先輩に事情を話して、早
めに学校を出してもらおうと思ってる。だから、ゆうちゃん。俺の
代わりに、先輩の仕事、手伝ってくれないかな。頼む。それと、本
城さんの携帯番号教えて」

「わ、わかった」

勇人君のこんな必死な姿、初めて見た。わたしは大急ぎで絵里に勇人君から電話がかかるかもしれないと短いメールを打つ。ここで起こったことを目の当たりにしていた彼女ならば、すぐにその意味を理解するはずだ。そして勇人君に絵里の番号を教えた。

「ゆうちゃん、ありがとう。恩に着るよ。勝手におまえから番号を聞き出したこと、本城さんにはちゃんと俺の方から説明しとくからさあ、急ごう。多分、来週のボランティアの打ち合わせと準備だと思っただ」

わたしはカバンを肩に担ぎなおすと、勇人君を追うように、急ぎ足で部室に向かった。

結局その日、わたしが部室を出たのは、六時頃だったと思う。外はすでに真っ暗だった。勇人君はあの後なんとか先輩を説得するのに成功して、麻美を追いかけて行った。

まだ絵里からも勇人君からも連絡はない。どこにいるのか訊ねようと、携帯を取り出し画面を表示させた時だった。

「石水……さん」

校門を出たところで誰かに呼び止められた。辺りには、闇が迫ってくる。誰だろうと目を凝らしてみるがよく見えない。次第に近付いてくるその人がサリだとわかるまで、しばらく時間を要した。

「んもう！ 何、ビクついてんのよ。そんな疫病神^{じヤム}見るみたいな怯えた目であたしを見ないでよ」

街灯の下で、サリの厚めに塗られたファンデーションが、異様に白く光る。今日は勇人君はいない。なのに、何だろう？ また何か言われるのかな？ 怖いよ……。

「ご、ごめんなさい。別に、そういうわけじゃ……」

ドキドキする心臓を隠すように胸に手をあて、謝りながらゆっくりと後ろに下がった。サリとはあれから学校の廊下で幾度となくすれ違ったけど、何も言ってこなかった。だからもう無関係だと思っていたのに……。

「あたしさ、あんたに謝ろうと思ってさ」

下の方で緩めに結んだりボンの上の広く開いた胸元には、金の細いネックレスが見え隠れしている。わたしは大きく息を吸い心を落ち着けると、サリの真意を探るため、ゆっくりと目を合わせた。

「あんたの相手、吉永だったんだ。ヒロにきいたよ。それってマミと三角関係ってことだよな？」

「そ、それは……」

なんてことだろう。広川君、あの時は公言しないって言ったのに……。どうしよう。ちゃんと否定した方がいいのかな？ でないと、麻美に知られてしまう。

「あつ、安心して。あたし、あんまりそういうのに首突っ込む趣味はないから。三角でも四角でもあたしには関係ないし」

そうなんだ……。少しほっとしたけど。とりあえず曖昧な笑みを浮かべて、サリが早くここから立ち去ってくれることを祈った。

「でもさ、ヒロ、あんたのこといい子だって言ってた。もういじめ
るなってあたしに説教するんだよ。ねえねえ、あたし、あんたをい
じめたっけ？ そんなつもりなかったんだけどな……」

サリは上目遣いにわたしを見ながら、肩に掛けた何も入ってなさ
そうなカバンを前後に揺する。ぶら下げているライNSTOONのハ
ートのキーホルダーが街灯の光を反射しながらキラキラと揺れた。

「とにかく、ごめんね。それとさ、あたし。鳴崎のこと、なんだか
このごろもうどうでもよくなっちゃって。あたしの心変わりの速さ
は今に始まったことじゃないんだけど。あのさ、ヒロは……。あた
しの元力レなんだ。まあ、お互い、似たもの同士なんだけどね……」

……じゃあね、石水さん。サリはそう言ってふふつと笑うと、い
つの間にかもう辺りにはいなくなってる。

もしかしてサリは、わたしを待っていたのだろうか？ 彼女は部
活はやってないはず。こんな暗くなるまで、謝るために待っていてく
れたのだとしたら。

高校生活も、まだあと二年ある。もしこの先、サリと同じクラス
になるようなことがあったら……。案外仲良くなれるのかもしれない
なって、ふとそう思った。

33・お姉ちゃん！（前書き）

いつもお越し頂き、ありがとうございます。以降、シリアスな場面が続きますので、最終話まで後書きを控えさせていただきます。尚、ブログの方にて、内容についてのコメントなどを書いていく予定ですので、そちらにも足を運んでいただけたらと思います。

33・お姉ちゃん！

今日も吉永君は学校に来なかった。彼が長野に行ってもう一週間になる。うちの母さんが一度だけ吉永君のお母さんに連絡をもらって、もうしばらく学校を欠席すると聞かされた。おじいさんが元気がどうかは、まだ何もわからない。

そろそろもどってきて欲しいな……。吉永君のいない教室がこんなに味気ないものだなんて思いもしなかった。

先日絵里が麻美を追って行った日の夜、絵里から怒り心頭の電話をもらった。麻美は普段よりは幾分元気がなかったものの、他に変わったところはなく、絵里が血相を変えてやって来たのを見て、いったい何事かと逆に心配させてしまったらしい。

少し風邪気味だから部活も休んだのという麻美の言葉に嘘はなかったと、絵里の怒りは一向に収まらない。

「鳴崎って、いったいマミのなんなのよ！ わけわかんない。おまけに後からあいつがあたしたちと合流した時、マミがなんて言ったと思う？ 鳴崎は絵里の新しいカレシなの？ だって。冗談じゃないわよ。鳴崎も困ったような顔をするだけで煮え切らないし。あいつってあんなキャラだった？ もうちょっところ、二枚目で、冷静な人だとばかり思ってたんだけど……」

絵里のお怒り、ごもつともだ。勇人君の願いどおりに麻美を追いかけた拳句、彼と付き合つてるとまで誤解されて……。絵里も災難だったねと慰めることしかできない。

勇人君からは、家に帰ってすぐにお詫びのメールをもらったらしいけど、それだけでは許せないと憤りを露わにした絵里に、とうとう勇人君はケーキをおぐる約束までしたそうだ。

勇人君は絵里がどれだけケーキ好きか知らないんだ。絵里が何個食べてもいいように、安くておいしいところを探しておくようにってアドバイスしておいた方がいいかもね。

で、勇人君には悪いけれど、彼が好きな人が麻美だって絵里に知られてしまった。彼女に真相を訊ねられた時、正直にすべて話したんだ。勇人君に振り回された絵里には、そのことを知る権利があると思ったからね。

それを聞いた絵里はさすがに驚いていた。麻美も片隅におけないねって、友のモチっぷりに満足そうに頷く。これで鳴崎をからかうネタもできたし……と意味ありげな笑みを浮かべてつぶやく絵里を見た時、突如勇人君の身の危険を感じたのは言うまでもない。

絵里は今日はお姉さんと駅で待ち合わせなんだって。お姉さんオススメの激安ドラッグストアで、これまたお姉さんオススメのコスメを揃えに行くんだと今朝からはりきっていた。

わたしにもとりあえずって感じで一緒に行こうと誘ってくれたけど、答えはやっぱノー。前に絵里のと同じグロスを買ったけど、それ以上のメイクには、まだあまり興味がないんだよね。

わたしのことをわかってくれている絵里は決して無理強いはいしな。じゃあ、次こそ一緒に買いに行こうねと言って絵里が校門前で手を振る。絵里は駅に向かうために。わたしは家に帰るために……。それぞれのバスに乗り、学校を後にした。

マンションのロビーにある郵便受けのダイヤルを合せて扉を開け、中に入っている夕刊とダイレクトメールを取り出した。そこにはいつもと同じように不動産屋さんのチラシも何枚か折れ曲がって混ざっていた。

至急求む、売り物件！ の大きな文字が踊る。ここを売って一戸

建てに替わって行った同級生も何人かいる。でもうちはその心配はない、というか、わたしたち娘の教育にお金がかかるから、もう家は買えないって父さんにはつきりと言い渡されているんだ。

わたしはもちろん父さんの意見に賛成だ。ここのマンションから出たくないもん。だって、そのわけは……。もう言わなくてもわかるよね。ふふふ。

わたしがにやにやしながら郵便受けの扉を閉めていると、隣のおばさんがやって来て、わたしを見た。

「こんにちは」

わたしはおばさんを見てあいさつをする。

「えっと、優花ちゃん、こんにちは。今日は早いんだね」

おばさんは時々、わたしと妹の愛花を間違える。よかった。今日はこちらと合ってた。

「はい。部活がなかったの」

「ふーん。そうなんだ。ここは冷えるね。さあ、早く帰ろう」

おばさんもわたしに負けないくらいの郵便物を抱えて、一緒にエレベーターに乗り込んだ。

「そうそう、優花ちゃん。あんだ、三階の吉永さんの息子と同級生だよな？」

おばさんがわたしに訊ねる。返事をするより早く、心臓がどくつと鳴ったけど、わたしは気のないそぶりですっけなく、はいと答え

た。

「今日ね、引越センターの大きいトラックがマンション内に入ってきて、吉永さんちの荷物を運び出してたの。ついさっき、出て行ったところなんだよ。優花ちゃん、聞いてた？ どこに引越したんだろっね？ うちはおそことはあんまり付き合いがなかったから……」

よくわからないんだけどね……。おばさんの話が尚も続いている。エレベーターが六階に停止して、おばさん、わたしの順に降りた。

十年近くも住んでると、やっぱり荷物は増えるよね……。おばさんはまだ話し続けている。おばさんは何も悪気は無いんだと思う。ただ、今日見たことを話しているだけ。わたしが吉永君と同級生だから、知らせてくれてるだけ……。

でも。

わたしはおばさんに、さよならの挨拶もしないでそのままマンションの廊下を駆け出し、家の玄関に飛び込んだ。すると同時に中から愛花が飛び出して来る。

「お姉ちゃん！ 大変だよ。真澄ちゃんち、引越したよっ！ さっき、トラックが荷物いっぱい積んで出てった」

中学校のテスト週間は高校よりずっと早い。そういえば来週から期末テストだつて言ってたっけ……。

わたしは自分が走って玄関に駆け込んだことなんかとくに忘れてその場に立ち竦み、ただ呆然と愛花の口元だけを見ていた。

真澄ちゃんち、引越しだよっ！

愛花の叫ぶような声が、何度も心の中で繰り返される。

ますみちゃんが……。ひっこし……。

わたしは足元にカバンをゴトンと置くと、瞬時に踵を返し、もう一度廊下に出る。そしてそのまま、ありったけのスピードを出して階段を駆け下りていった。

34・会いたい

その間もずっと、耳鳴りのように、さっきの愛花の聲が繰り返して鳴り響く。

そんなはずはない。吉永君が、黙って引越すなんてこと、あるはずがない。わたしは自分自身に何度もそう言い聞かせ、先を急ぐ。

三階に差し掛かった時、わたしはためらうことなく、吉永君の家の前に向かって走った。表札はまだかかったままだ。よしながとローマ字で綴られた表札。わたしが一番に覚えたローマ字はYとO。吉永のよの文字だった。小学生の頃、何度も鳴らしたインターホンに何年ぶりに指をあてがった。

一度、二度、三度。何度押しても一緒だ。中からは何の返事もない。玄関前のポーチに置いてあった彼の自転車も見当たらない。おばさんが育てていた鉢植えも、もうどこにもなかった。

わたしはまだ何も信じられずに、玄関扉を凝視したままそこに立ちすくんでいた。わたしの後ろを通る住人らしき人が、怪訝そうにこっちを見ている。グローブを持った小学生も、不審者を見るような探るような目つきでわたしの顔を見て、目が合ったとたん、逃げ出すようにその場からいなくなった。

居たたまれなくなったわたしは、時折振り返りながらも、しぶしぶ吉永君の家を後にした。

階段を降り、マンションの前の道路に出る。引越センターのトラックはどっちの方向に行ったのだろう。もしも、おじいさんのいる長野に向かったのだとしたら、高速道路のゲートがある右手に行

ったのかもしれない。当然、その方向を見たところで、トラックがその辺りにいるはずも無く。わたしは途方に暮れたまま、ひたすら車の流れを目で追っていた。

そうだ！ 駐車場に行ってみよう。わたしは咄嗟の自分の思いつきに、急に目の前が明るく開けたように感じた。もし吉永君が帰ってきているのなら、おじさんの車が停まっているかもしれない。そう思うだけで、自然と足取りも軽やかになる。

わたしは、マンション裏手にある吉永君の駐車場に向かった。確か、五十六番の数字が書かれたスペースが吉永家の駐車場だったはず。シルバーメタリックのワゴン車がおじさんの車だ。

アスファルトに直接書かれた数字は、遠くからもはっきりと見える。五十六番の数字がそこに車がない事をこれ見よがしに知らせるように、わたしの目にダイレクトに飛び込んできた。

吉永君の家族も、もうすでにここにはいないんだと納得するや否や、わたしはこの目の前の現実が嘘偽りのない真実なのだと、ようやく理解し始めた。吉永君は、本当にどこかに行ってしまったのだ。隣のおばさんが言ったように、そして、愛花が叫んだように……。

わたしはいつの間にか歩き始めていた。行くあても無く、ただ車の行き交う道路の脇をとぼとぼと歩く。

秋の終わりを告げる風は思いのほか冷たくて、制服の胸元の隙間をぴゅうつと冷気が通り抜けていった。

さぶ……。

わたしは、吹きすさぶ風に首をすくめ、ぶるつと身震いをした。露わになった肌の部分に容赦なく風が吹きつける。その時、目に何かが入ったような微かな違和感を覚えた。

すると、それを待っていたかのように、わたしの目から次々と涙が零れ落ちるのだ。

やっぱりごみでも入ったのかな？ 手の甲でこすってみるけれど、涙は一向に止まらなくて。もう痛みはない。すでに、ごみは流れ落ちているはずなのに……。

あふれ出す涙を止める方法もわからないまま、立ち止まっては涙を拭い、また歩き始めるというのを何度も繰り返す。

そう。これは、風のせい。涙が零れ落ちるのは、目にごみが入ったせい。涙の言い訳をあれこれ考えながら、尚も、歩き続ける。

最初は、涙が勝手に流れ落ちるだけだったのに、それだけでは説明のつかない自分の異変にふと我に返る。それはまるで小さい子どもが母親の手を引っ張っていやだいやだとぐずるように、いつのまにかしゃくりあげて、声を出して泣いている自分がそこにいるのだ。

すれ違う人が、振り返る。信号待ちをしている車の窓からも見知らぬ人の視線が注がれる。

もうそんなこと、どうでもよかった。誰に見られてもいい。何を言われてもいい。わたしは、わたしは、ただ……。

吉永君に……会いたい。彼に会いたいただけ。

わたしは何度も何度も、彼の名前を呼んでいた。真澄ちゃん、真澄ちゃんと、その名をただひたすら繰り返し呼び続ける。

今すぐに、会いたい……。会いたいよ。真澄ちゃん、どこにいる

の？ 返事して。

いくら呼んでも、彼の返事が聞こえるはずなどなく。わたしの声は、そのまま北風に乗って、車のエンジン音に次々とかき消されていく。

なんで、帰ってきてくれないの？ どうして、何も連絡してくれないの？ わたしが、真澄ちゃんの彼女じゃないから？ わたしのことなんて、もうどうでもいいから？

いやだ。そんなのいやだ。絶対にいやだよ。わたしは力いっぱい、首を横に振った。

吉永君の声が聞きたい。わたしのことを優しくゆうつて呼ぶ声を…… もう一度聞きたい。それだけなのに。わたしの願いは、たったそれだけなのに……。

今、どこにいるの？ 何してるの？ 引越したって本当？ おじいさんの具合は？ また会えるよね……？ こんなにもいっぱいいろんなことが知りたいのに、わたしにはそれを聞くすが無い。

吉永君のメールアドレスも携帯番号も、すでに消去したわたしには、彼と連絡を取ることもすらもう叶わないのだ。

こんなにも、どうしようもないくらい彼のことが好きなのに。あきらめることなんて出来ないってとくにわかっていたのに。

麻美にいい友達だと思われなくて、偽善ぶってた自分に返ってきた答えがこれだったんだ。何もかも、もう遅かったんだよね。きつと……。

真澄ちゃん。ねえ、お願い。わたしに連絡してきて。電話でも、メールでも、何でもいいから。さよなら、の一言でも……いい……から。

わたしは、手のひらで、指先で、そして制服の袖口で、とめどなく流れる涙を拭いながら、祈るような気持ちで携帯を取り出し、未登録番号の着信拒否を解除した。無駄だとわかっていても、吉永君の連絡が受け取れるように……。

そしてふと顔を上げると、目の前に以前見た景色が広がっていることに、今更ながら気付く。いつの間にか、こんなところまで来ていたんだ。

公園だ。涙で滲んだその公園の風景は、間違いなく吉永君が長野に行く日の夕方に一緒に行ったあの公園だった。

誰もいない公園の片隅にあの日と同じベンチがある。吉永君と座ったあのベンチに、わたしは一人、そつと腰を下ろした。

まだ無言のまま何も語らない携帯を両手でぎゅっと握り締めながら。

35・涙

どれくらいそうやって公園にいたのだろう。着いた時はあんなに明るかったのに、もう辺りは真っ暗だ。公園内の街灯なんて気休め程度にしかない。

木の枝がかさつと揺れるたび、何かがそこにいるような気配がして落ち着かない。携帯を握り締めていた手は、いつのまにか氷のようにならえて、皮膚の感覚がなくなっていた。

わたしは一向に鳴らない携帯を、じつと見つめる。そして画面を開き、麻美の電話番号を表示させた。最後の手段だ。麻美にだけは絶対に聞けないと思っていただけで、これしか方法が思い浮かばない。

マンションの人に吉永君ちが引越したって聞いたんだけど……と遠まわしに訊ねてみよう。麻美ならきっと知ってるはず。

わたしは、まだ止まらない涙を冷たい指先でぬぐい、通話ボタンを押した。何度かコールした後、お決まりのメッセージが流れる。電源を切ってるのだろうか。もう一度かけてみたけれど、やっぱり通じない。

鼻の奥がつんとしてくる。また涙がこぼれそう。麻美、お願い。電話に出て……。

何度やっても同じ。とうとう麻美とのコンタクトをあきらめたわたしは、今度はさがるような気持ちで絵里に電話をかけていた。

『はい、あたし。優花？　なんか用？』

絵里の明るい声が耳にしっかりと届く。誰もいない公園に姿の見えない仲間が増えたみたいだ。絵里、わたし、わたしね……。

『ちよつと優花？ 聞いてる？ どうしたの？ …… ねえ、返事してよ』

絵里の声がなつかしくて、耳に心地よくて……。返事をしようと思っただけど、ちつとも声にならなくて。

『優花、いるんでしょ？ 何かあった？ ねえ、なんとか言って』

「…… えり。…… あのね、わたし……。うつつ……」

『優花？ 泣いてるの？ ねえ、どうしたの？ また変なヤツに絡まれてる？』

「えり、ごめ……。ん。そうじゃないの。ちがうの。あのね、あの…

…ね。吉永君がね……」

『吉永がどうしたの？』

「いなくなったの。どこかに行ったの。荷物を全部運び出して、家にも誰もいなくて、車もなくて、それに、それに、自転車もない…
…」

何もかも、なくなってた。あつたのは表札だけ。

『今、どこ？ そこ家じゃないでしょ？ 場所は？ あたし今さ、アネキとそのカレシも一緒なの』

絵里に問われるがまま、隣にある小学校名を伝え、その向かいの公園にいると答えた。

『わかった。すぐに行くから、そこ、動かないで』 と言って絵里

がプツツと電話を切る。

大変だ。絵里がここに来てしまう。わたしったらなんてことしちゃったんだろ。せつかく絵里がお姉さんとそのカレシと楽しく過ごしてるところだったのに。こんな風に泣きながら電話したら、誰だって心配するに決まってる。

わたしはポケットからハンカチを出して、涙を拭った。いくら絵里にでも、こんなひどい顔は見せられない。

そして今だけ、吉永君のことは忘れよう、楽しいことだけ考えて絵里を待とうとわざと作り笑いを浮かべて気持ちを奮い立たせる。涙が何度も伝った後がごわごわして、頬のあちこちが突っ張る。瞼だつて重い。この暗闇だけが救いだ。これなら、絵里にもはつきりと見えないだろう。

わたしは髪を手櫛^{てくし}で整え、ベンチから立ち上がり、道路の方に向かった。

車のライトが近付いてくる。次第にスピードを落とし、白いセダンがわたしの前で止まった。後ろのシートから絵里がするりと降りてきた。

「優花。どうしたのよお。もうっ」

絵里がいつもの甘いコロンの香りを纏いながら、わたしに抱きついてきた。

車が軽くクラクションを鳴らし、わたし達から遠ざかっていく。

せつかく、もう泣かないって決めてたのに、絵里の姿を見たとき、もう、もう、もう決心が崩れ去る。わたしは絵里の腕の中で、崩れるよ

うに泣き続けた。とても日本語とは思えないようなとぎれとぎれのわたしの説明を、絵里はうんうんと優しく聞いてくれた。

人間の泣ってどれくらいあるんだろって思えるくらい、泣いた。泣いても泣いても次々にあふれてきて、枯れることはない。

絵里に体を半分預けるようにして、家に向かって歩き始めた。その間、絵里はずっと携帯片手に麻美に連絡を取っているけど、やっぱり繋がらない。

「ねえ、優花。麻美はきつと何か知ってるよ。今日は繋がらないけど、明日、学校に行けばわかるって」

「うん」

「それにさ、いくら荷物を運び出したからって、引越したとは限らないし」

わたしは絵里の話に耳を傾ける。荷物を運び出すイコール引越したと思っただけ、違うの？

「だって、学校の誰もそんなこと言っただけでしょ？ それにもし引っ越すなら一応彼女である麻美が知ってるはずじゃない？ そんなそぶりちつとも見せなかったしね。そうだ！」

何か閃ひらめいたの？ 絵里がポンと手を打った。

「もしかしたら……。おじさんとおばさんだけどこかに引っ越したのかもしれないけど、吉永は近くの親戚の家から学校に通うってのはどう？」

そんな都合のいい話があるのだろうか？ 絵里の突飛な発想のお

かげで、涙はすっかり止まったけれど、世の中そううまくはいかないと思う。

「きつとそうだよ。何もトラックが荷物を運んだからって、吉永まで一緒にどこかにいってしまうとは限らないと思うんだ。その証拠に、誰も吉永が引越したなんて言わないし、優花に何も連絡してこないんだよ。ね？」

絵里がわたしを見てにつこり笑う。そう言われればそんな気もする。わたしはさっきまであんなに大声をだして泣きわめいていた自分が急に恥ずかしくなった。連絡がないことが、何も心配いらないうって証拠。そう思えばいいんだね？

絵里、ありがとう。絵里が来てくれてよかった。マンションの下に着いた時には、少し希望の光が見えたような気がした。

わたしのためにこんなところまで駆けつけてくれた絵里を、このまま帰すわけにはいかない。せめて夕飯だけでも一緒に誘ってみた。でも絵里はぶんぶんと首を横に振る。

「優花、ありがと。でも、今夜はやめとく。だって、アネキがカレシをうちに連れて来るって言うてたからさ。あたしも顔出ししなきゃね。だから優花はゆっくり休んで。そして、明日、麻美に詳しく聞いてみよう。じゃあね、ばいばい」

制服のチェックのスカートを揺らしながら、絵里がくるりと反転し走り出す。

「え、絵里！ 待って。バスで帰るの？」

「うん。大丈夫だって。高校までもどれば、その先は定期もあるし」

「じゃあ、バス停まで送ってく」

「いって。すぐそこだし……って。あそこにお出ましたのは、もしかして鳴崎？」

絵里の視線の先には、カバンを肩に担ぐようにしてマンションから出てきた勇人君の姿が……。

「あれ？ ゆうちゃん？ それに……ほ、本城さん」

「悪かったわね、あたしで」

「そ、そんなことないよ。とんでもないです……」

絵里の姿に怯える勇人君。あれ？ この二人って、いつのまにかこんな力関係になってたんだ。勇人君は、マジで絵里のこと、怖がつてる。前の麻美のことがあるから、絵里には頭が上がらないんだね。

絵里に愛想笑いをした後、突然真顔になった勇人君が、わたしに詰め寄ってきた。

「それよりゆうちゃん。ホント、びっくりしたよなあ。俺も今日あいつから電話で聞いたんだけど……。あれ？ もしかして、知らない？ 真澄のこと」

勇人君……。何か、知ってるんだね。わたしは唇を噛み締めて、勇人君の顔をじっと見つめた。

36・名コンビ

「あいつ、黙って行っちまうもんだから、まさか転校するなんて思っ
つてもみなかつたんだよ」

「転校……するんだ」

心臓が急にドクドクと鼓動を早める。身体が少し揺らいだ。

「優花、大丈夫？」

絵里がすかさず腕をとって、支えてくれた。一瞬何事かと目を見
開いた勇人君が、一呼吸おいて話を続ける。

「俺達さ、ちょっとまえにやり合っただろ？ それもあつて、しば
らくはお互い無視してたんだけどね。エレベーターで顔を合わせた
時なんて、そりゃあもう、最悪だったよ。そしたら、長野に行く前
日だったかな。あいつから折れてきて、今生の別れみたいなことを
言い出すからおかしいなとは思ってたんだ。なら、案の定……。長
野のおじいさんが寝たきりになって、向こうに家族で住むことにな
ったって今日突然電話がかかってきて」

「おじいさん、寝たきりなんだ……」

どうなるのかな？ おじいさん。また元気になるといいのにな。
吉永君もきつと心配してるよね……。なのになにわがしたたら、自分の
ことで精一杯で、黙って引越した吉永君を責めるばかりだったん
じゃないかって、胸が痛む。

「ああ。おじいさん、かなり悪いみたいだ。真澄のお父さんはこっ
ちの仕事の関係で向こうに行くのを渋ってたみたいだけだな。でも、

ぶどう園のこともあるし、仕方なかったんだと思うよ。そうそう、新しい高校も決まったらしいぞ……。お、おい。ゆうちゃん？ どうしたんだよ」

「あんたって人は、なんでそんなに鈍感なんだろ。自分だって、マミに恋してるんならわかるでしょ？ 優花の気持ち」

ついに涙が堪えきれなくなって泣き出したわたしをかばうように絵里が勇人君に詰め寄る。

「ゆうちゃんの気持ち？ あ、ああ……。それならわかってるつもりだよ。でも隠しておけることじゃないし、ゆうちゃんだって知っておく必要があるだろ？」

「だからって、何もそんなにストレートに言わなくたって。今日だって、何の前触れもなく急に吉永んちが引越ししちゃうから……。優花がどれだけショックを受けたかわかってんの？」

「本城さん……」

今にも掴みかからんばかりの絵里の剣幕に、勇人君がじりじりと後ずさりする。

「絵里。もう、いいって。わたしは平気だって」

わたしはあわてて絵里の腕を引き寄せた。そうだ。ここでめそめそ泣いてる場合じゃない。絵里に迷惑をかけたうえに、勇人君にまで気を遣わせたら、今度はわたしが最低最悪人間になってしまう。

「勇人君、ありがと。わたしもなんだかおかしいなって思ってたんだ。今の勇人君の話を聞いたら、全部納得したよ。吉永君、きつと前から引越しのことわかってたんだと思う。でも、わたし達まわりのみんなを驚かせたくなくて、何も言わなかったんだね」

「違う。それは違うと思うな」

勇人君の思わぬ否定に、絵里が再び彼を睨みつける。余計なこと言わないでよって、絵里の目が訴えている。

「本城さん、安心して。俺はゆうちゃんの味方だから」

勇人君が、絵里に向かって目を細めた。絵里の表情が、ほんの少し和らいだように見える。

「あいつ、自分が辛いから言えなかったんだよ。本当は行きたくなかったんだろうな、向こうに。ゆうちゃん、最後のチャンスだよ。来週、こっちに帰ってきて、学校の転校手続きをするって言ってた。大園のことは気にせず、おまえの気持ちをちゃんと伝えた方がいいと思うよ。あいつバカだから、ゆうちゃんに言ってもらわないと、自分の本心に気付かないんだよ」

「は、勇人君ったら……。でもね、わたしそうするつもりだったの。ちゃんと気持ちを伝えようって、思ってるから」

「よし！ いいぞ、ゆうちゃん！ ああ、俺が堂々とおまえ達を応援できたんだよ。一発くらい殴ってやれば真澄の目も醒めるんだろうけど。それをやっちゃうと、あいつと大園を無理やり引き離すことになるだろ？ そりゃあ、俺だって、一日でも早くあいつらの仲を引き裂いてやりたいけど。これ以上、大園を傷付けたくないし、男としても卑怯な手は使いたくないから……。ゆうちゃん、ごめん。力になれなくて」

「勇人君……。ありがと。そして絵里もありがと。わたしはもう全然大丈夫だから。気をつけて帰ってね。そうだ！ 勇人君、駅まで行くんでしょ？」

「そうだけど？ あっ、もしかして本城さんもバス？」

「うん。絵里は途中で乗り換えるけど、そこまで一緒に帰ってもら

える？」

「俺は別にいいけど……。でも、本城さんが……」

急激に勇人君のテンションが下がっていくのがわかる。

「あ、あたしだって、別にいいけど。っていうかさ、送ってもらわなくても、平気なんだけど。別に鳴崎がいてもいなくても一緒にしよ？」

「それ、ちょっとカチンときた。そんな風に言われると、何が何でも送りたくなるね。何でキミはいつも怒ってるんだろ。こんな人がゆうちゃんや大園と友達つてのがまずは信じられないよ」

「鳴崎、あんた結構いい度胸してるわね。憶えておきなさいよ、いわね」

絵里の綺麗な横顔が、ツンと上を向く。

「はん！ 俺だって、男つてとこ見せてやる。おまえみたいなあつかましい女、初めてだ」

「なによ！」

「なんだと！」

仲がいいのか悪いのわからないけど、結局あの二人、わたしが手を振ってるのも気付かないまま、ずっとああやって言い合いをしながら、バス停に向かって歩いて行った。

いつのまにか涙も乾き、心が随分軽くなっているのに気付く。あの二人に会ったおかげで、わたしが泣いていたことなんて、ちっぽけなことに見えるようになった。

もうちょっとだけ、待ってみよう。吉永君が学校に来るその日ま

で待っていてようと心の中でそつとつぶやいた。

次の日、学校ではすでに吉永君の引越しの話が話題になっていた。何人もの同級生や陸上部の先輩が同じマンションにいたので、噂が広まるのもすこぶる速い。

そんな中、絵里が浮かない顔をしてわたしに言った。

「マミさ、今日、学校に来てないんだよね。携帯も繋がらないままなんだ。放課後、家に一旦帰ってから、大園医院に寄ってみようと思っただ。もし、具合悪そうだったら、明日優花も一緒にお見舞いに行かない？」

「うん。行く。それにしても、マミ、どうしたんだろうね。風邪かな？ それとも。吉永君のことで、落ち込んでいるのかな……」

片想いのわたしですら、夕べはあんなに取り乱したんだもの。彼女である麻美ならば、もっとショックを受けていて当然だ。

でも、もうわたしは偽善者になるのは辞めたんだし、口先だけの励ましの言葉はかえって迷惑なんじゃないかと思う。ならば……。

「優花。やっぱ、優花は行かない方がいいかも。だって、吉永に告白するんでしょう？ もしマミが吉永がらみで臥せってるのだとしたら、優花とマミはライバル同士だもの。会うのは不自然だよ」

絵里の言うとおりだ。麻美には会わないほうがいいのかもしれない。

「そつする。マミのこと心配だけど、行くのは辞める」

「マミにはあたしの方からうまく言っとく。それにしても、吉永。」

いつ来るんだろうね」

「来週って言ってたよね。今日は木曜日だから、早ければ四日後。遅ければ、一週間以上だよ。……早く会いたいな」

「ふふふ。優花ってば、なんか変わったよね。そんなに吉永のことが好きならば、もっと早く打ち明けてくれてたら良かったのに……」

「こらっ！ 本城。自分の席に着けーい」

ホームルームのために担任が教室に入ってきたのだ。絵里はペロツと舌を出して肩をすくめ、わたしの前から瞬時に消え去った。

「えーっと。吉永のことなんだが」

担任の先生の張りのあるテナーボイスが教室中に響き渡った。

37・時が止まるその瞬間

「えー、吉永は、家庭の事情で転校することになった」

一瞬ざわついたものの、予想していたとおりだったのだろう。誰も先生を問い詰めたりしなかった。それを意外に思ったのか、先生が首を捻りながら、教室内の一人一人を見渡す。

「おまえら、知ってたのか？ いや、あまりにも反応が薄いから……。正直、これを言ったら泣き出す女子がいるんじゃないかと心配していたんだがな」

そう言つて、苦笑いを浮かべる。泣き出す女子が……。そつと周りを見渡すと、何人かの目が赤くなっているが見えた。……見なきやよかった。わたしまで胸がきりきりしてきて、目頭が熱くなってくるし。

「欠席連絡の時にお母さんからあらましは聞いていたんだが、本人の希望もあつて、今まで公言するのを控えていた。で……。明日、午後から学校に来るそうだ。みんなにあいさつがしたいと言っている。まあ、ここは小学校じゃないからな。お別れ会を開く予定はないが、はなむけの言葉くらい用意しておけ。あいつ、部活も勉強もがんばってたからな。先生も吉永がいなくなるのは寂しいと思うる」

とたんにみんなが神妙な面持ちになる。鼻をすする音も聞こえてくる。わたしは絶対に泣くまいと歯を食いしばった。

各委員からの連絡事項のあと、ホームルームが呆気なく終わりを

告げる。何人かの男子が先生の周りに集まっていたけれど、わたしは絵里と一緒にすぐに教室を出た。

「優花、よかったじゃん。明日、会えるんだよ。吉永と」

言葉とは裏腹に、絵里の表情は冴えない。

「うん。でも……」

「何、弱気になってるのよ。そりゃあね、あたしだってさっきは泣きそうだったよ。別に吉永が好きとか嫌いとかそんなんじゃないかも、涙がじわーって溢れそうになったもん。先生だって、マジで寂しそうだったしね。でもさ、今はメールだってあるんだしさ、離れ離れになっても心は繋がっていられるって。ね？」

「そうだけど……。わたしちゃんと言えるかな？ 吉永君の顔を見たら、何も言えなくなるんじゃないかって不安なの。それに、こんな突然の告白、彼にとって迷惑じゃないかって」

「またそんなこと言ってる。ダメダメ。優花、自信持って。迷惑なわけじゃない。あたしが吉永だったら、大歓迎よ。ウエルカムカモンって手をこまねいちゃう」

「ふふふ……絵里ったら」

絵里が手のひらを上に向けて、小指から順番にぱらぱらと折り曲げていく。

「明日のために、今夜はお肌の手入れがんばるのよ。お母さんの美肌パック、借りちゃいなよ。さーて、そろそろ行くとするか。マミのことはあたしにまかせてね。じゃあね、また明日」

絵里が元気よく手を振る。わたしも負けずに大きく手を伸ばして

振り返した。

エレベーターの前にある鏡に映して制服のリボンの位置を確かめる。これでよし！ 二学期になって一番の出来だ。両方の膨らみがほぼ同じで、歪みもない。もしかして完璧かも。

昨晩は思ったよりよく眠れた。絵里の言いつけは守らなかったけど……っていうか、母さんに聞いたらバックは持ってないって言うんだもん。仕方なく、乳液をいつもより多めにパタパタと叩き込んでおいた。

それと……。グロスを薄く、唇に延ばしてみた。恥ずかしかったけど、これくらいなら先生にも咎められないよね。

わたしはやる胸を抑えて、上から降りてきたエレベーターに乗り込んだ。

「よお！ ゆうちちゃん、おはよー」

「勇人君！ お、おはよ……」

「なんでそんなに驚くんだよ。なんか俺、犯罪者みたいじゃん」

ついさっきまで、鏡を見ながら夢見ごっこだった分、勇人君に心の中まで見透かされたような気がして、ぎこちなくなってしまうた。ごめんね、勇人君。

「ゆうちちゃんも、昨日聞いたろ？ おまえのクラスの担任、言っらしいな。真澄のこと」

「う、うん。聞いた」

「あいつ、今日の朝、車で向こうを経つそうだ。今ごろ、高速じゃないのかな」

「そうなんだ……。ねえ、勇人君。なんか、吉永君に会っの、すっ

ごく久しぶりな感じがする」

「俺だってそうだよ。ものごとろついた頃から、あいつとはずっと一緒だったしな。いるとうつとおしいけど、いないと何か物足りないんだよな」

勇人君が顎に手を掛け、エレベーターの天井を見上げながら言った。

「なあゆうちゃん。冬休みに、長野に押し掛けないか？ いや、ちよつと待てよ。おまえと二人つきりで行くつていうのも世間体が悪いから……。本城も誘えば？」

「絵里も？ やだ、勇人君。本当はマミの方がいいんじゃないの？」「もちろん、そうできればいいけど……。でも、考えても見ろよ。

あいつのところに、なんで大園を連れて行かなきゃならないんだよ。そんな余計なお膳立てはしたくないからね。これを機会に、大園には真澄のことをきれいさっぱり忘れてもらうつもりだから」

そっか。そうだよな。いつも明るく振舞ってる勇人君だけど、吉永君は恋敵でもあるわけだし。でも男の子の友情つて、こんなにも強い物なのかって、見てて羨ましくなる。

どんなに憎まれ口をたたこうとも、勇人君は吉永君をおとし貶めたりはしない。わたしと麻美もそんな風になれるのだろうか……。

「それと、真澄んちの三階。売らないつてさ。賃貸に出すらしいぞ。将来、こっちに戻ってくるのがあったら、またここに住むつて」

わたしは勇人君の思わぬ話に、立ち止まってしまった。

「おい、ゆうちゃん。一階だよ。降りるよ」

閉まりかけるエレベーターの扉をもう一度開けて、慌ててホールに出る。

引越しと同時にここを売り払うとばかり思っていたわたしは、意外な展開に胸が高鳴る。ということは、将来またここに帰ってくる可能性があるということだ。

わたしはますます心が軽くなっていくのを感じていた。

勇人君の思いがけない情報は、わたしにささやかな幸せと勇気を運んできてくれた。今日、吉永君に会ったら……。絶対に好きだって言える。そんな気がしてきた。本人も気付かないうちに、ためらいがちだったわたしの背中を押してくれた勇人君は、きょとんとした目をしてこっちを見ている。

んもうつ、勇人君っていい人だよ。ホントに好きだよ……。あつ、でもね、これは絶対に言葉にはしないからね。

だって、前に勇人君に言われたよね。誤解をまねくようなことは口にするなつて。へへへ、わたしも少しは大人になったかな。

その後勇人君は、クラスの友達と合流してバスに乗った。わたしは一人、空いている後ろの座席に座り、グロスが取れていないかそつと鏡を覗き込んだ。

こんなに緊張する授業は生まれて初めてだと思うくらい、身体がカチカチになっている。五時間目もドキドキしたけど、六時間目の今は、身体中が心臓になったみたいに、バクバク脈打っている。

斜め後ろの席には……。吉永君がいる。教科書をめくる音。ノートにペンを走らせる音。どれが吉永君の音なのか、はつきりとわかる。久しぶりに見る制服姿で、吉永君がいつもの席に座っているのだ。

昼休みが終わる頃教室の後ろの戸が開き、みんなのどよめきと共

に、彼が普段あまり見せないような照れた笑顔を浮かべて、教室に入ってきた。

でも……。その笑顔。前に見たことあるってそう思った。
わたしを広川君から助けてくれたあの日。バスターミナルで見た、あの笑顔だ。

そして次の瞬間、わたしと目が合った。笑顔が止まる。空気も止まる。周りの声も、風も、時間も。

すべてが止まった。

38・行かないで

でもそれは、ほんのわずかの間の出来事。吉永、久しぶりじゃん！ というクラスメイトの第一声で、瞬時に打ち消されてしまった。

チャイムが鳴り六時間目の授業が終わると吉永君が立ち上がり、お世話になりましたと化学の先生に頭を下げる。先生がそばに寄ってきて、吉永君の背中を豪快に叩いた。向こうでもがんばれよと言つて。

クラスのどの顔も、まだみんな笑顔のままだ。わたしも笑っている。みんなと一緒に笑っている。

でも心の中では、泣いていた。だって、今日で最後なんだよ。吉永君がこの教室にいるのも、そして一年五組のクラスメイトなのも……。この一瞬一瞬が大切で、愛しくて、一生このままで時が止まればいいのにと、本気でそう思った。

ホームルームが始まって、吉永君がみんなの前であいさつをしている時も、クラスメイトがおもしろおかしく次々に別れの言葉を並べている時も、わたしはただひたすら下を向いて、机の木の模様をじつと眺めていた。

絶対に泣かないって決めたから。最後まで笑顔で見送ろうとそう決めていたから。

でも吉永君の声は一字一句聞き漏らさなかった。わたしの心にしっかりと刻み付けていった。

絵里が吉永君を呼び止めてくれて、図書室の裏手のベンチで告白

することになっている。受け入れてもらえなくてもいい。この気持ちをわかってもらえるだけでいいと思ってる。もう一度アドレスを訊いて、メールのやり取りだけでもして欲しいとお願いするつもりだ。

ホームルームが終わっても、吉永君はまだ男子に囲まれていた。違うクラスからも部活仲間や中学の同級生たちが集まってきて、教室が人で溢れかえる。

そろそろ行くよと立ち上がる吉永君にすかさず絵里がアタックを開始した。

「吉永。ちょっと待って」

わたしは先に廊下に出て、そつと絵里の様子を目で追っていた。

「なに？ 本城」

「今から少し時間ある？」

「ああ。少しなら」

「じゃっ、この後、図書室裏手の……」

「ベンチ？」

吉永君がその瞬間わたしを見て、ベンチと言った。もしかして気付かれてる？ 二人が並んで廊下に出てくる。

「そつ。ちょっとだけ話したいことがあって」

「本城が？」

「あたしじゃないわよ」

絵里の段取りどおりにスムーズにやり取りが進んでいる。いくら決心したと言っても、やっぱりドキドキは収まらない。足まで震え

出す。麻美が欠席している時に、ぬけがけみたいでズルいかなとは思うけど、今日しかないのだ。

昨日絵里が麻美の家に様子を見に行ったら、風邪で寝込んでいるからと家に人に追い返されたらしい。絵里が困惑しながらそう教えてくれた。

麻美だけでなくわたしにも心を砕いてくれている絵里に報いるためにも、しっかりと目的を遂げようと、決意も新たに深く息を吸い込む。

「誰なんだ？」

「ふふふ。それはお楽しみ、っていうか、吉永はもうわかってるんじゃないの？」

吉永君がまたわたしを見る。恥ずかしさのあまり、目を伏せたその時だった。

「真澄君」

聞き覚えのあるその声にわたしはふと顔を上げる。廊下の向こうから駆け寄ってくるのは麻美？　なんで？　今日も欠席だったはずじゃ……。

「真澄君……。なんで、黙って行っちゃったの？　メールしても返事もくれないし。あたしたち、終わったの？」

麻美のただならぬ様子に、廊下を歩いている人たちまでもが振り向く。絵里もわたしも何も言えずにただ傍観していることしか出来ない。

「大園……」

「あたしがどんな気持ちで今日までいたか、真澄君にわかる？ 長野にしばらくいるって言ってただけで、転校するとは聞いてなかった」

「誰にも言っていないよ。勇人以外には」

「そんなのいや。鳴崎に言って、なんであたしには言えないの？ 優花にも……言っていない？」

いつもの麻美とは到底思えない怯えたようなうつろな瞳がわたしを捉える。どうしてわたしなの？ 麻美、わたしも知らなかったんだよ。勇人君に聞くまでは。

「言っていない」

吉永君が伏目がちにわたしを見てそう答える。

「真澄君、お願い。わたしの最後のわがまを聞いて。……今日で今日で、本当に終わりにするから。だから、わたしに見送らせて欲しいの。ね？ いいでしょ？」

「ま、マミ。いつたい、どうしたの？ 身体の具合はいいの？」

絵里がマミの両肩を押さえるようにして、彼女の顔をのぞき込む。

「絵里っ、放つといて！」

麻美が乱暴に絵里の腕を振り払う。

「絵里には関係ないでしょ？ 絵里は、絵里は……。あたしの気持ちなんてわからないのよ」

「マミ。ほんとにどうしたって言うの？ 変だよ。マミ、おかしい

よ
「

絵里の声にはいつさい耳を貸そうとしないで、麻美が吉永君に詰め寄っていく。

「お願い、真澄君！」

麻美が吉永君の腕にしがみついた。吉永君が何か言いたげな悲しそうな目でわたしを見る。

言わなくちゃ。吉永君、待って。真澄ちゃん、行かないでって今すぐ言わないと……。

「吉永君！」

わたしはその場で彼の名を呼んでいた。

「マミの。マミの願いを……叶えてあげてっ！　お願い」

わたしはそう言ったあと、全身の力がすーっと抜けていくのを感じていた。

38・行かないで（後書き）

次回最終話になります。

39・そばにいて 1（前書き）

本日中に最終話まで掲載予定です。
お待たせして申し訳ありませんでした。

39・そばにいて 1

「優花、ほんとにあれで良かったの？」

吉永君と麻美の後をついていくわけにもいかず、誰もいなくなった教室で絵里と向かい合って座っていた。

「なんで、あんなこと言ったの？ どうして吉永を引き止めなかったのよ。やっぱ、吉永の首根っこ、とっ捕まえるべきだったよね」

絵里はさっきから同じことばかり言って、わたしを責める。でも絵里の怒りも最もだ。せつかく親身になって取り計らってくれたことも、すべて水の泡になってしまったのだから。本当に悪かったと思うてる。

「でもさ、なんで吉永も優花の言ったこと、鵜呑みにしちゃうんだろ。優花が呼び出してるんだって、絶対あいつわかってたよ。なのに、どうしてマミのわがまを聞く？」

絵里の憤りが再び勢いを増す。

「だって……。マミ、これで最後だって言ってたし……。具合も悪そうだったもの」

「それにしても、納得できない。優花も優花だけど、吉永も吉永よ！ 吉永って、マミに何か弱みでも握られてるの？ あんなの絶対おかしいよ。なんかさ、マミが許せなくなっちゃった。昨日だってマミンちで門前払いだよ。おばちゃんの方がおろおろしちゃってさ。マミがあたしに会いたくないって言ったんじゃないかな？ せつかく行ったのに、ひどいよ。もうマミにはついていけないかも」

「絵里、マミのことそんな風に言ったらかわいそうだよ。マミだっていろいろ悩んでたみたいだし」

絵里はまだ知らないんだ。麻美も転校が決まったってこと。麻美はまだわたし達に自分の口からそのことを告げていない。わたしだって吉永君が言ってくれなかったらまだ知らなかったわけだしね。麻美が行く予定の私立高校は、ここからだと言野とは正反対の方向にある。麻美の気持ちを考えれば、さっきあそこでわたしが何が何でも自分の思いを押し通すなんてことは、とてもじゃないけどできる状況じゃなかった。

「優花、このままじゃだめだよ。そうだ。鳴崎に吉永がいつここを経つのか訊いてみるってのはどう？ あいつなら吉永のこといろいろと知ってそうじゃない？ マミがいたって別にいいじゃん。優花、そうしようよ。ね？」

「絵里。もういいって。今日は、マミの願いを叶えて……」

「優花！ いい加減にしなさいよ。いつだってマミのことばかり。もう吉永と会えなくなるんだよ。優花だって、吉永を見送る権利があるんだから！」

「そんなの、ダメだよ。だって、だって、マミは……」

そう。麻美も転校しちゃうんだよ。わたし達より、もっと吉永君と遠い所に離れてしまう。

「マミがなんだって言うのよ。吉永がいなくなっても、後にはちゃんと鳴崎が控えてるんだよ。マミは幸せ者なんだから」

「違うの。マミは、マミはね。転校が決まったって……。来年から私学の全寮制の高校に行くことに決まったって……。そう言った」「あつ……」

絵里が目を見開いて、絶句する。

「だから……。本当に、これが最後だと思うから。マミの願いを叶えてあげて欲しい……」

やっぱり絵里は知らなかったんだ。絵里と麻美は中学の時から親友同士。わたしが吉永君と離れ離れになると同じくらい、絵里は麻美との別れが辛いはず。そしてその親友から隠しごとをされたのはもつとショックなはずだ。

「なんでそのこと知ってるの？ マミが言ったの？ 確かに成績次第で転校するかもってのは聞いてた。でも決まっただなんて、知らないよ……。ねえ、いつ聞いたの？ 優花、教えて」

「そ、それは……。吉永君が」

「吉永が？」

「う、うん。マミから聞いたって」

「なんなの、それ。じゃあ、マミはそれを利用したってこと？ 吉永の気をひくために……」

絵里は、教室のどこか一点をじつと見つめた後、立ち上がった。

「優花。ちょっと待てて。あたし、行つて来る」

「絵里、待つて！ どこに行くの？」

「すぐに連絡する。だから待つてて！」

絵里はカバンを手にすると、教室から瞬く間にいなくなった。何をしに行ったの？ まさか麻美のところ？ わたしは何か取り返しのつかないことを言ってしまったんじゃないだろうかとますます不安になった。

絵里が行ってしまったてからすでに三十分くらい経つ。まだ外は明

るい。ラグビー部のストライプのユニフォームが、グラウンドをとこる狭しと駆け回る。

その南側の一角で、陸上部がダッシュを始めていた。何度も何度も短い距離を繰り返し走る。途中、太ももを高く上げてその場駆け足をしたり、ストレッチを組み込みながら、ずっと同じメニューの練習が繰り返されている。

前まではそこに吉永君がいた。ストップウォッチを持った麻美もいた。なのに今は……。その二人とも、もうそこにはいない。

さつき絵里にメールを送ったけど、まだ返事はない。絵里には何か心当たりがあるのだろうか。

それにしても、いつまでここにいないといけないの？ このまま教室でじっと待ってるなんて無理だ。こんなことなら、わたしも絵里を追いかけて行けばよかったと後悔する。

わたしだって、本当は……。吉永君を見送ってたかった。彼に気付かれなくてもいい。最後の姿をこの目に焼き付けたかった。

わたしは待ちきれなくなって学校の外に出る。もうすぐ五時。段々あたりが暗くなってくる。十一月の日暮れは思いのほか突然に、そして早くやってくる。

バス停のベンチに腰掛けて、時折手の中の携帯を覗き見る。そして木枯らしがぴゅっと吹き抜けたその時、目の前に止まったバスから一番に降りてきた女子高生と目が合った。

彼女が力なくわたしの名前を呼んだ。

「優花……」

40 そばにいて 2 (前書き)

本日二話目の更新です。ご注意ください。

40・そばにいて 2

「優花……」

麻美……。どうして麻美がここに？ 吉永君と一緒にだったはずじゃ……なかったの？

「優花。こんなところに、いたんだ……」

どこか覇気のない目をした麻美が、遠慮がちにわたしのそばにやって来る。そして、わたしの前で立ち止まった。

「優花、ごめん……」

麻美は下を向いたまま、搾り出すような声を出す。

「ごめんね。あたし、あたし……」

その時、麻美の身体が大きく揺れた。

「どうしたの？ ま、マミ。しっかりして！」

よろけそうになる麻美を支えながら、ベンチにゆっくりと座らせる。わたしは麻美の細くて冷たい手をそっと握った。

「優花、ありがと……。さっきね、駅で絵里に会った」
「絵里に？」

麻美はうつろな目でわたしの顔を見ながら、こくと頷く。

「絵里から電話があつて……。あたし、絵里にもひどいことしたの。それにね、優花にも……。優花のこと、わかつてたのに。あたしっ
たら……」

「わかつてた？ 何がわかつてたの？」

「優花が、真澄君を好きだつてこと……」

「マ……」

麻美のあまりにもストレートな物言いに、気の利いた返事が見つからない。だってそれは、真実だから。

「わたし達ね、ほんとには付き合つてなんかいなかったの」

わたしはおもわず息を呑み、麻美の顔をじつと見つめた。

「形だけの付き合い……。ただそこにいるだけの付き合い。それだけのこと。会う約束だつて、いつもあたしから。……キスしたつていうのも、嘘。あたしね、一度だけ彼にキスをねだつたの。ふふ……。おかしいでしょ？ 自分でもなんでこんなに大胆なんだろうつて、不思議だつたけどね。でも。はつきりと言われたの。無理だつて……」

わたしは、消え入りそうな麻美の声をただ黙つて聞いていた。

「さつき、絵里に聞いたよ。優花があたしのために、自分の気持ち隠して真澄君とのことを応援してくれてたつて。あたしも、優花が彼のことを好きだつてわかつていたのに、優花の優しさに甘えて、彼を独占しようとしていたの。あたしの転校のことも、卑怯なやり方だとわかつていたけど彼に言わずにいらなくて。あたしっかわいそうでしょ、だからこっちを見てつて……。なんて嫌なやつな

んだろっ……」

麻美の頬に涙が一筋伝った。

「マミ。わたしはマミが思うほど、優しいとかそんなんじゃない。いつもマミに嫉妬して、自分の取った行動を後悔して……。今日だって、もしあの時マミが現れなかったら、マミに内緒で抜け駆けしてたかもしれない。吉永君を引き止めて、わがまま言ってたかも……。ね？ ひどいでしょ？ だから、マミはそんなに卑下しなくていいの」

「優花……。あのね。今、真澄君、塾の退会手続きや、おばさんに頼まれた用事をいろいろ済ませてる最中なの。それが終わったら、新幹線で新大阪を出て名古屋で特急に乗り換えるって言ってた」

麻美は携帯を取り出し、時刻を確認する。

「大丈夫。間に合うわ。優花、こんなこととしてられない。さあ早く駅に行って」

麻美が立ち上がりわたしを急^せき立てる。

「どうして？ 麻美が行くんじゃ……」

「最後に彼に泣きついて、電車の乗車時刻も教えてもらったけど……。行くのはあたしじゃない。優花だよ。優花が行くべきだよ」

「何言ってるの？ 吉永君だって、麻美に見送って欲しいから教えただんだと思う。なのにながしが行ったら、吉永君、びっくりするよ。なんでわたしなのって」

「優花。その心配はないって。あたしが一番ショックだったこと、何だか知ってる？」

麻美の唇が震えている。吉永君に何か言われたのだろうか。そんなに辛いことなら、言わなくてもいいのに。

「ううん」

わたしはもうこれ以上何も言わなくてもいいよという意味もこめて、首を大きく横に振った。でも麻美は、わたしをまっすぐに見て幾筋もの涙を流しながら言ったのだ。

「二度も……呼び間違えられたの。ゆうつて。最初は誰のことかわからなかった。でも。彼の表情を見てたら、ふと優花の顔が思い浮かんで……。ゆうつて優花のことだよな？ 違う？」と。

「そ、それは……」

「やっぱりそうなんだ。わたしは一度だって、マミ……いや麻美あさみって呼ばれたことないんだ。やだ。優花ったら、なんて顔してるの？」

麻美が泣いたままくすつと笑って、わたしを指差す。わたしったら、いったいどんな顔をしてたんだろう？ 恥ずかしくなって、あわてて両手で頬を押さえた。

ねえ、吉永君。たとえ麻美とはかりそめの付き合いだったとしても、自分の彼女の名前を言い間違えるなんて……。それ、最悪だから。その時の麻美のショックを思えば、胸が……痛む。

でも……。二度と呼ばれることのないその名前を、もう一度、彼の口から聞きたいと思った。無理だとわかっていても、吉永君にゆうつて呼んでもらいたかった。

「優花、バスが来たよ。早くこれに乗って。……真澄君によろしく

ね。いろいろありがとうって……言っといてね」

「マ……」

麻美に無理やり腕を引っ張って立たされた拳句、バスの乗り口に押し込まれる。

「六時四十分新大阪発の新幹線だから。いつもの駅を六時前に出るはず。絵里が駅にいるから、真澄君を引き止めてくれているかも……」

麻美の声がバスのドアで閉ざされる。わたしは一番後ろの座席に座ると、立ちすくんだままの麻美の姿を視界に捉える。わたしが見ているのに気付いた麻美が、懸命に笑顔を作って、小さく手を振った。わたしは胸に手をあてながら、麻美ありがとうとそつとつぶやいた。

41・そばにいて 3 (完結)

バスを降りると同時にポケットの中の携帯が震える。絵里からだ。

優花、何してるの？ 急いで！ 吉永、行っちゃったよ。早く、早く、早く！

わかったすぐに行くと言った後、携帯を耳にあてたまま絵里の誘導に従う。

麻美の言ったとおりだ。絵里が吉永君を引き止めていてくれたのだろう。

でも、行っちゃったってことは、もう時間がなくなっちゃったってこと？

わたしはわき目も振らず、人ごみを掻き分けて駅の西改札口に向かった。

同じように携帯を耳にした絵里が、大きく片手を振って、こっちこっちと叫んでいる。

「優花、遅いよ！ その顔は、マミに会えたんだね。へへへ……。あたしのおせっかいもたまには役に立つでしょ？」

絵里が首をすくめておどける。が、しかし……。

「おっと、こんなことしてる場合じゃないんだってば！ こんな時に信じられないんだけど、吉永ったら携帯の電源切ってるみたいでさ。一向に捕まらなくて……。これでも鳴崎と手分けして随分探したんだよ。そしたらどう？ 今ここに着いたら、吉永らしき人が改札くぐって行ったの。あれは多分吉永だと思う。これ、入場券」

絵里に入場券と書かれた切符を手渡されると、早く行きなさいと背中をぐいっと押された。

わたしは結局、何も抵抗出来ないまま人の流れに紛れるようにして改札を通り抜ける。

振り返り絵里にありがとうと言って手を挙げた。

絵里がそんなこといいから早く行けと、ジェスチャーでわたしを追いかう。

わたしはうんと大きく頷いて、プラットホームに繋がる階段を一段抜かしで駆け上った。

あと数段というところで、停まっていたチョコレート色の特急電車の扉がアナウンスと同時に閉まる。まさかこれに吉永君が乗っているの？

何かが挟まったのだろうか。一度しまった扉がまた開いて、ホームにぎりぎり辿り着いた人たちが幸運にも何人か乗り込む。

そして今度こそきっちり閉まった。

わたしは大急ぎで電車の後部から前の車両に向かって、立っている人を避けながら縫うようにホームを駆けた。

見落とさないように、電車の中の人物を窓越しにしっかりと確認しながら。

知らない人がわたしの動きに気付いたのか、怪訝そうな顔をしてこっちを見る。

吉永君はまだ見つからない。いったい、どこにいるの？

この電車じゃないの？ 絵里が見たのは違う人？

とうとう、電車がゆっくりと動き出す。それに合わせてわたしも歩くスピードを上げる。

いない。ここにもいない。次の車両にも……いない。カラフルな歌劇団の広告ばかりが目に入る。

ホームの真ん中辺りに来た時、一旦通り過ぎた車両の窓が、わたしの目の前をゆっくりと横切って行く。

それはまるでスローモーションのように、ひとつひとつの景色がくつきりと目に焼きついていった。

するとその中に、わたしを見ている視線があることに気付く。

まさか……。いた。吉永……君。

制服姿の吉永君がこっちを見ながら、進行方向とは逆に車内を進んでいる。そしてドアのところに顔を寄せ、何かを言った。

聞こえない。吉永君、聞こえないよ。吉永君を乗せた車両は瞬間に遠ざかって……。

背伸びをして大きく手を振ったけど、もう見えないよね。

追うのをあきらめたわたしは、荒くなった息を静めるように胸を押さえて立ち止まり、電車の最後部を呆然と見送っていた。

とうとう行ってしまった。電車が見えなくなっても、そこから目を離すことが出来ない。

もうどうすることも出来ないのに、その場から動けなくて……。

これから先も、いつでも一緒だと思っていた。何の疑いもなく、そう信じてた。

進む進路は違ってても、家に帰ればいつでも会えるんだって、そう思ってた……。

なのに。本当にもう、行ってしまったんだね。

最後に一言でもいいから吉永君の声が聞きたかった。
また会えるよねってわたしから言いたかった。ああ、会えるよって言って欲しかった。

そして、そして……。あなたに。

ずっと、ずっと、そばにいて……。欲しかった。

突然震えだした手の中の携帯に、はっと我に返った。

もしかして絵里なの？ わたしから連絡しないといけないのに、ごめんね……。

わたしは画面を開き、送信者を確認する。

えっ……。

未登録だけど、このアドレスは……。きっと知っている。

心臓がドクドクと騒がしく鳴り始めた。まさか、そんな……。

わたしはそのメールを何度も何度も繰り返し読んだ。そして同じホームの下り線の電車が来るのを待った。

特急電車を一本見送ったあと、下りの普通電車がゆっくりとホー

ムに入ってくる。

メールに記^{しる}してあったとおり最後部の車両に目を凝らす。
サラリーマン風の人、学生、塾通いの小学生。次々と人が降りてくる。

一番後ろの扉から降りてきた背の高い人と目が合う。

うそ……。

うそでしょ？

本当に、戻って来てくれたんだ。その人がわたしとの距離を縮めてくる。そして……。

「おまえなあ……。俺、今夜、長野に帰れなくなってしまったよ」

そう言っ、わたしの頭を片手で抱きかかえるようにして引き寄せた。

「真澄ちゃん……」

わたしは吉永君の腕の中で、彼を呼ぶのだけど、声にならなくて。

「おまえがここに来なくても、俺、きっと引き返してた」

吉永君がわたしの頭上でそう言った。彼の腕を伝って、くぐもったような声がわたしの耳に届く。

わたしは、こくこくと頷くことしかできない。

本物の吉永君がここにいる。夢なんかじゃない。

彼が来る前から泣いていたのか今泣き始めたのか。それすらわからないほど、わたしはいつのまにか顔中がぐしゃぐしゃになるくらい泣いていた。

真澄ちゃん、真澄ちゃんと、何度も彼の名前を呼びながら。

「ゆう、もう泣くなよ。今は。今だけは……。俺は、おまえのそばにいるから……」

カバンを足元に置いた吉永君が、そう言って、今度は両腕でわたしの頭を包み込んだ。

泣き顔のままそつと吉永君を見上げた時、わたしの一番大好きな真澄ちゃんの笑顔が、いつまでもいつまでも、そこに……。あった。

E
N
D

41・そばにいて 3 (完結) (後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

昨日(2008/11/12)最終話の更新が終わった後、もうどこにも気力が残っていないくて、こちらにて皆様にきちんとご挨拶も出来ず、まことに申し訳ありませんでした。

このそばにいてはストックも少なく、その日に書いて即更新という怒涛の日々でした。

恋愛小説といいながら、甘い場面もごくわずかで、主人公にそれほどの不幸も訪れません(汗)。

にもかかわらず、連日大勢の皆様にお越しいただいて、感謝の気持ちでいっぱいです。おかげさまで小説家になろう内の恋愛部門アクセスランキングで1位を頂くことができ、感激で胸がいっぱいです。

ランキングに投票して下さった皆様(投票していただくと、ランキングサイトの順位がトップページの皆様の目に付きやすいところに表示されて読者様が増えるしくみになっています)、そして、評価・感想、メッセージを下さった皆様、ブログにも足を運んでくださった皆様、本当にありがとうございました。

当初は、エピソードも書く予定だったのですが、続きを読みたいと言ってくくださる方がいらつしやるのと、私もまだ書き足りない部分がありますので、構想がまとまり次第、続きを書いてもいいかな……ということ、エピソードは控えたいと思います。

一応、本日を持ちまして完結とさせていただきますね。

またそばにいてを見かけましたらお是非ともお立ち寄りいただけますように……。

尚、そばにおいては2009年4月に、アルファポリスさんのトップページにてピックアップとして紹介いただきました。

クリスマス番外編 1・友だち以上、恋人未満（前書き）

番外編の改稿版です。

以前より少し話数も増えたので、物語の背景がわかりやすくなったかな…と思っています。

よかったら読んでみてくださいくださいね。

初めての方は、是非、本編（片思い編）から読んでいただけたらいいな。

どうぞよろしくお願いいたします。

クリスマス番外編 1・友だち以上、恋人未満

「……ってなわけ。だ、か、ら。あれれ、優花ちゃん。どうしましたか？ こらっ、ゆうかつ！」

絵里がわたしの鼻のてっぺんを、だ、か、ら、と三回人差し指で突いた後、大声で叫んだ。

教室の後の席に集まっていた男子がぎょつとした顔をして一斉にこちらを向く。

それでようやく、どこかにさまよっていた意識を現実の世界に取り戻すのだ。

「んもうつ！ 優花ったら。もしかして、あたしが言ったこと、なんにも聞いてなかった？」

絵里がすねたように口を尖らせる。

「う、ごめん。ちょっと考えごとしてたから。えっと。なんだっけ？」

叱られるのは覚悟で、わたしはもう一度絵里に訊ねた。

「はあ？ 全く何も聞いてなかったの？ 優花、ねえ、そうなの？」

「うん……」

わたしはしょんぼりとうな垂れた。絵里には悪いが、本当に何も聞いてなかったのだ。

絵里が大仰に首を振り、あーっと唸るような声を出す。

あきれてやってられないとでも言うように。

「じゃあ、もう一度言うからね。ちゃんと聞いてよ！ クリスマスプレゼント。今度の土曜日、一緒に買いに行くって話し。まさか忘れたなんて言わないよね？」

「あ……。う、うん。そうだったね。そうそう。思い出した。忘れるはずないよ。あは、ははは……」

「優花、あははじゃないよ。しっかりしてね。大事なことなんだから」

「うん。わかってる。絵里、ごめんね」

これ以上絵里の機嫌を損ねないようにと、わたしはあくまでも低姿勢を貫く。

ちゃんとプレゼントを買って、クリスマスまでに長野に着くように送るんだよと、絵里に何度も釘を刺されていたのだ。

「ホント、あれ以来、優花はいつもこんな調子だもんね」

絵里の意味ありげな視線が今日もまたわたしの胸にチクリと突き刺さる。

「絵里ったら、またそんなこと言ってる。考えすぎだって。わたしは前からずっとこんな感じだよ」

「何言ってるの。絶対に、あの日から優花は変わったんだってば。誰のこと考えてんのか、あたしは知らないけどさ」

知らないと言いながらも、すべて知ってますよと絵里の目がはっ

きりと語っている。

「ちがうって。そ、その人のことなんか、考えてないってば」

わたしは頭をぶんぶん振って、誤解を解こうとがんばるが。所詮、ぬかに釘、のれんに腕押し。否定すればするほどむなしくなるばかりだった。

「このおーっ、幸せ者がっ！」

絵里が力任せにわたしの頬を両手ではさみこんだので、口びるがまるで鳥のくちばしのように前にぶによっと突き出た。

「絵里ったら、恥じゆかしいよ。ほ、ほら、みゆんなが見ゆてるから。おによがい、やみよて（お願い、やめて）」

自由にならない口を駆使して、絵里に涙目で抗議する。

「だって、優花の目がハートマークになってるんだもん。誰だってこうしたくなるって。それにしても、まだ信じられないよね。あたしたちの中で一番そんなことには興味ありませんって顔してた優花が、真っ先にカレシ作っちゃうんだもん。あたしなんて、先輩にふられてから、ちつともいいことないし……。あと二週間で相手探せって言う方が無理」

やっと手を離れた絵里が机に肘を突いて手のひらに顔を載せ、不服そうに口をへの字に曲げた。

「絵里。ちょっと待って。だから言ってるでしょ？ ……吉永君は、その。か、カレシじゃないって……」

クラスのみんなに聞かれないように声をひそめ、できるだけ絵里の耳元に近付いてそう言った。

絵里はあの日以来、ことあるごとにわたしと吉永君のことをネタにしてからかう。

「はいはい。優花の大切な真澄ちゃんとやらは、付き合ってもいない女の子と、幼なじみってだけで嬉しそうに手をつなぐんだよね。こうやってべったりくっついてさ」

絵里が急に立ち上がり、ぐるりと回ってこっちにやって来たと思ったら。同じ椅子に無理やり半分座って、ぺとっとくっついた。

わたしが吉永君を追いかけて駅に行った日のことを、いつもそうやって冷やかして、おもしろがるのだ。

あの日、わたしと吉永君がホームを降りて改札口から出て行くと、まるで温泉旅館のスタッフの出迎えのように、絵里と勇人君が手をこまねいてそこで待っていた。

ほーらね、やっぱり二人そろって戻って来た……と言って、絵里は得意げに胸を張る。

その時のわたしと吉永君が、まるで恋人同士のようにべったりと寄り添っていて、どこをどう見てもラブラブだったと絵里が言うのだ。

でもわたしにはちゃんとした言い訳がある。あの時は、ああするしか方法がなかったからだってね。

駅のホームで吉永君と会えたのが奇跡のように思えて、嬉しさの余り、その場から動けずにと泣いていた。

そんなわたしを放っておけなくなった吉永君が仕方なく手を引いて、無理やり連れて降りた、というわけだ。

そうするしか選択肢がなかったのだから、断じてラブラブでくっついていたわけではないと説明するのだが。絵里は全く信じようとなしない。

そして、勘違いした絵里と勇人君の二人が、邪魔しちや悪いよねと言って、ニヤニヤしながらその場からいなくなったものだから、残されたわたしが吉永君と二人だけになって、どれだけ気まずい思いをしたか……。

絵里はその事実すら、またまたそんなこと言っちゃってと笑うばかりで、まじめに取り合ってくれないのだ。

結局その日、吉永君は名古屋発の特急電車に間に合わなくなってしまうたので、急遽、勇人君の家に泊まることになった。

そして次の日、これまた勇人君の陰謀でわたしが一人で吉永君を見送ることになったのだけど、もちろん、一緒に行けるのは大阪まで。

本当は長野までついて行きたかった。いや、せめて名古屋まで一緒に行きたかった。でもそんな願いが叶うはずもなく。

次の日からはもう会えないのに。学校でも、マンションでも、絶対に会えないのに。

無情にも別れの時は、あつという間にわたしの前に訪れた。

じゃあな……と言って、信じられないくらいあっさりと、私鉄の改札口に吉永君が吸い込まれていく。

タベとは違って時間にゆとりがあるので、旅費の節約のため新幹線は使わない。私鉄で名古屋に向かうことになったのだけれど。

吉永君がわたしの前からぐんぐん遠ざかっていく。大きな後姿が瞬く間に人の波に飲まれて見えなくなった。

締め付けられるような胸の痛みを感じながら、歯を食いしばって

涙をこらえた。

何度も瞬きをして涙を押しとどめ、絶対に泣かないぞと自分に言い聞かせる。

そして、必死の思いで笑顔を保って手を振り続けた。

そんなわたしの思いなど知りもしないのだろう。吉永君は結局振り返ることもなく、黙って走って行ってしまったのだ。

それでよかったのかもしれない。

もし吉永君が振り返ったならば、きっと別れるのが辛くなって、前日と同じように泣いてしまったに違いないもの。

そして泣いてるわたしの姿を見たら。優しい吉永君はそんなわたしを一人にできなくて、再び舞い戻り、永久に長野に戻れなくなってしまう。

だから。これでよかったのだと思うことで、気持にふんぎりをつけたのだ。

ただし、わたしにとって、ちょっぴり嬉しいこともあった。

毎日でなくてもいから、メールをして欲しいと吉永君がわたしに提案したのだ。

最初は耳を疑った。まさかあの吉永君がそんなことを言うなんて、俄かには信じられなかったから。

今度は絶対に削除するなよと言いながら、アドレスや番号をわたしの携帯に送り込む。

吉永君と遠く離れていても、メールや電話でつながっていられる。わたしはこの宝物を二度と手放さないと、心に誓った。

今まで、あんなに近くに住んでいても遠くから見つめていることしか出来なかった吉永君が、今ではこんなにも身近に感じられるようになるなんて。いったい誰が想像しただろう。

あの日も、吉永君の背中が見えなくなったとたん、すぐに彼にメールを打っていた。

昨日は戻ってきてくれてありがとう、気をつけて帰ってね……と。たったそれだけのことだけど、嬉しくて天にも昇る気持だった。

帰ってくる返事は、ああとか、うんそうだねとか、わかった……とか。本当に短いものばかりだけど、返信スピードだけは誰にも負けない。

それはもう、待ち構えてて準備してたの？　って思えるくらいに素早かった。

吉永君は自分からメールを送るのは苦手だが、読むのは好きだと言っ。

学校のことや、マンションで起こったことを知らせてくれると嬉しいと言った。

それと、もうひとつ。首を傾げるようなリクエストをされた。

吉永君には兄弟がない。だからかどうかは知らないが、妹の愛花のことでも知らせて欲しいと言っのだ。

最初にそれを聞いた時、えっ？　なんで？　と心の中が、疑問符で埋め尽くされた。

まさか、吉永君が妹の愛花のことを……？　わたしはとんでもない妄想で、心が押しつぶされそうになった。

ところが、彼の表情やしやべり方を見ていたら、そんな不安もすぐに吹き飛ぶ。

含み笑いをして、わたしに意味ありげな目配せをする吉永君は、あきらかに愛花の予測不可能なユニークな行動を楽しみにしているような態度だったのだ。

わたしはそれくらいのことと嫉妬した自分が、恥ずかしくなった。

吉永君と愛花が特別な関係になることなんて、絶対にあるわけがないのに。

愛花は昔から吉永君を親分のように慕い、なついていた。

野球やサッカーの仲間にも入れてもらっていたので、わたしよりずっと一緒にいる時間が長かったはずだ。

いきなり突拍子もないことをする愛花は、おもしろネタには事欠かない。石水家のムードメーカーでもある。

もう少し落ち着いて早とちり名人の汚名を返上すれば、姉より数段整った顔立ちをしている彼女のことだ。きつともてるに違いない。いつも思っている。

愛花の将来の夢は宇宙飛行士になることだ。

スペースシャトルに乗って宇宙ステーションに行き、さまざまな国の人たちと一緒にエネルギーの研究がしたいと、小さい頃から口ぐせのように言っていた。

わたしは妹の夢が叶うような気がしている。愛花はそんな不思議な子だ。

昨日も無重力に耐える訓練だと言って、パソコンの前においてある事務用回転椅子に座り、勢いをつけて、超高速回転を何度もやっていた。

もちろん、回りすぎてふらふらになっていた愛花の様子をこと細かに吉永君に知らせたのは言うまでもない。

さつき絵里に話を聞いていないと言われたばかりなのに、また吉永君のことを考えていた自分に気付き、あきれてふうつとため息を

ついた。

「どうしたの？ 今度はため息？ せっかくの幸せが逃げちゃうよ」
狭い椅子に二人で腰掛けたまま、絵里が覗き込むようにして言った。

「ねえ、優花。吉永はクリスマスにはこっちに来るんでしょ？ だったら、プレゼントは直接渡した方がいいかもしれないね」

絵里はわたしと吉永君の関係がもどかしくて仕方ないのか、しきりにクリスマスの過ごし方をあれこれ指図するようなことを言う。

だから……。わたしたちはまだ、そんな関係じゃないんだってば……。

「ええっ？ 何？ 今、なんか言った？」

わたしの心の中を読み取ったかのように、絵里が目をくりくりさせて訊ねる。

「あつ、いや、何でもないよ。ねえねえ絵里。吉永君は多分、クリスマスにはやと君の家に来るはずだから、その時にプレゼント……渡そうかな？」

「うん。それがいいよ。さうて。そうと決まったら、プレゼントは何がいいかな？ そうだ。あたしのアネキに訊いてみようか？ いいアイデアをゲットしたら、今夜優花にメールするね。ところで吉永は……。優花に何をプレゼントするのかな？ やっぱ、指輪かな？」

「やだ。絵里つたら、またそんなこと言ってる。そんなわけ……ないよ」

絵里のとんでもなくぶっ飛んだ発想にあきれながらも、わたしは頬が熱くなるのを感じていた。

たとえ指輪でなくても、彼からのプレゼントなら、何でも嬉しいでも……。

彼からプレゼントをもらえる保障は何もない。

というのも。実はまだ、吉永君に好きだと告白していないのだ。あれほど告白するぞと息巻いていたのに、駅のホームで気付いた時には彼に抱きしめられていたし、あの日も、長野に帰った次の日も。

別れる瞬間まで、ずっと吉永君と手をつないでいた。

彼があまりにも近くにすぎで、告白のタイミングが見つからなかったというのが一番の理由だ。

でも、何も言わなくても、すでにわたしの気持ちは彼に通じていると思っっている。

そのこともちゃんと絵里に言ったのだが、そんな状況であるにもかかわらず、もう付き合っているのも同然だと言って譲らない。

わたしのために戻ってきて、そのあとずっと手をつないでいた事実は、吉永君がわたしを恋人として捉えている証拠だとも言っ。

お互いに好きだとも、付き合おうとも言ってないのに？

絵里の強引な見解は、やはり今のわたしには納得できるものではなかった。

彼との関係は、どのように説明すればいいのだろう。

授業開始のチャイムが鳴る。

じゃあ、またあとでねと言って、絵里が自分の席に戻って行く。

「友達以上、恋人未満……かな？」

わたしは立ち去る絵里の背中に向かって、吐息混じりに、ぼそつとつぶやいていた。

クリスマス番外編 2・クリスマスなのに

ごめん。クリスマスにそっちに行けなくなった。
年が明けたら必ず行く。本当にごめん。

わたしは何度も何度も同じメールを見ていた。

昨日吉永君から届いたメールは、一気に地の底に突き落とされるような、衝撃的な内容だったのだ。

プレゼントも買ったし、あとはクリスマスを待つだけだということに……。

吉永君の通っている公立高校は、二十五日まで登校することになっている。

前期後期の二学期制なので、当日は終業式という形式だった行事はなく、大掃除とホームルームがあるだけと言っていた。

それが終わり次第、午後にはこっちに向かう予定だった。

イブに会えないのは授業があるから仕方がないとあきらめていたけれど、まさかクリスマス当日も会えないなんて……。

クリスマスを指折り数えて待っていたわたしは、ショックのあまり声も出ないほど落ち込んでしまった。

吉永君のお父さんが急遽ぶどう園を継ぐことになってから、いろいろと大変だというのは聞いていたけど……。

ここまで忙しいとは、全く想像すらしてなかった。

今までぶどう園のことはおじいさんに任せっきりだったので、作業に慣れないおじいさんを手伝うため、部活にも入らず真っ直ぐ帰宅しているんだと、先週彼から電話で聞いたばかりだ。

これから訪れる雪の季節に備えて、ぶどうの木にわらを巻きつけ

たり、枝の選定をしたり、肥料を施したり……。

朝顔しか育てたことのないわたしには、ぶどう栽培など未知の世界の出来事なのだが、とにかく目が回るほど忙しいというのは、彼の電話で伝わってきた。

でも。だからって、クリスマス当日まで働くだなんて、わたしには到底理解できなかった。

だが、こっちに来れなくなった理由が、ぶどう園の手伝いのせいだと吉永君が言ったわけではない。

メールには何も理由は書かれていなかった。
つまり、別の用事が出来た可能性もある。

だとしたら……。それはそれで、またもやなんとも形容し難い複雑な気持ちになるのだけど。

わたしや勇人君に会うよりも優先したい用事があると考えただけで、胸が苦しくなった。

もちろん、吉永君に告白したわけでも、彼に告白されたわけでもない。

恋人同士ではないのだから、会えなくなったからと言って、わたしに彼を咎める資格があるはずもなく。

所詮、メールと電話だけの付き合いなんて、この程度のものなのだ。

わたしが吉永君にとって、少しも特別な存在ではないと証明されずにすぎない。

毎日送っていたメールも、昨日今日と、送信する気にならない。
携帯の画面を開いては閉じてを繰り返すばかりで、一文字だって

埋まらない。

学校で今日一日あったことも、何一つ思い出せないくらい、昨日のメールのことで頭が一杯だ。

期末テストの結果が今日返ってきたことだけ、机の上に広げてる印刷物でわかる。

高校入学以来、やっとまともな点数を取れたにもかかわらず、わたしの心は沈みこんだままだ。

絵里にどう言えばいいのだろう。

何も言わなくても、勘のいいこの親友は、わたしたちの間に何かあったことくらいすぐに気付くに違いない。

絵里と一緒に買いに行ったプレゼントは、郵送すればそれで済むけれど、それすらも迷惑かもしれないと思うと、いたたまれなくなるのだ。

わたしはベッドの上にポンと放り投げた吉永君へのプレゼントの包みを、恨めしげに眺めていた。

中身は……。

オフホワイトの手編み風マフラーだ。

自分で編んでみようと思ったのだけれど、絵里の猛烈な反対にあり、いとも簡単に却下された。

よく練習してから贈った方がいいと言われたのだ。

絵里のお姉さんが彼氏にセーターをプレゼントすると言って編み始めたのはいいが、ほどこいてばかりで、とうとう完成しなかった……ということがつい最近あったばかりらしい。

わたしだって、くさり編みしかやったことがない。

絵里のお姉さんと同様、編み目の揃わない無残な物に仕上がるのは目に見えていた。

だから今回は作るのはあきらめ、店をあちこち回って、吉永君に似合いそうなマフラーを一生懸命選んだというのに。

彼の目の前でそれを渡すことが叶わないだなんて……。

わたしはグスンと鼻をすすり、枕カバーを涙で濡らしながら、そのまま眠ってしまった。

次の朝、絵里に話を聞いてもらうために早めに家を出たわたしは、マンションのエレベーターを降りたところで、珍しい人に出会った。

「よお、石水っ！」

と、突然後ろから声をかけられ、あわてて振り返ると。

昔とちつとも変わっていない、少しとぼけたような懐かしい顔がそこにあつた。

横に並ぶとわたしと同じくらいの背格好の彼は、中三の時同じクラスだったクッキーこと、久木悠斗君くきゆうとだったのだ。

「クッキー、久しぶりだね」

クッキーは、吉永君や勇人君と同じで、小学校からの付き合いだ。トランペットを吹くのが得意な彼は、将来はアメリカのブラズバンドパフォーマンスのメンバーに入るんだと言って、隣の市にある吹奏楽で有名な私立の高校にわざわざ通っている。

「石水も、元気そうだね。俺はいつも朝練行ってるから、マンション内の同級生にはほとんど誰にも会わないよ。今日はちょっと寝坊して、こんな時間になってしまったけど。石水も部活があるの？」

「あつ、いや違うよ。今日はちょっと友だちに話があつて……」
「ふうん、そうなんだ」

クッキーって、こんなキャラだったっけ？ 彼の変貌振りに目を見張ってしまう。

昔は、自分から話しかけてくることなどほとんどなかったような気がする。

高校生活が充実しているのだろうか。自信に満ち溢れているようにも見えた。

「真澄、いなくなっちゃったよな」

突然クッキーの口から飛び出た名前に、わたしはビクツと肩を震わせた。

吉永君のことに過剰反応するわたしの体質は、彼が転校した後も少しも改善されていない。

「俺、真澄のこと、ずっと知らなくて。ついこの間、勇人に教えてもらってびっくりしたんだ。確か、石水も真澄と同じ高校だったよな？」

「う、うん。クラスも同じだったから、わたしも吉永君の突然の転校に驚いたひとりなんだ」

出来るだけ心を落ち着かせて、普通に話したつもりだった。

というのも、吉永君と最近また親しくなったことを、クッキーに知られたくなかったから。

クリスマスに会う約束が叶わなくなった今、まるで付き合っているかのように誤解されるのは、どうしても避けたかったのだ。

クッキーが開きかけた口を閉ざして、なぜかそのまま黙り込んで

しまった。

お互いを探り合うような気まずい空気が漂う。

勇人君がわたしと吉永君の関係を誇張して彼に吹き込んだことも考えられる。

クッキーの顔色を伺いながら、わたしは彼の次の言葉を待った。

「そうだ！　ちょうどよかった。あのさあ……」

突如明るい声を上げたクッキーが上体を屈め、カバンの中からカラフルに印刷されたチラシのようなものを取り出した。

「俺、今度の吹奏楽部のクリスマスコンサートで、ソロのパートもらえたんだ。市民会館の中ホール。よかったら見に来てよ」

一年生では、俺だけがソロに選ばれたんだ……と言って、はにかむ。

はい、これ、と手渡されたチラシは、コンサートのプログラムだった。

「これが入場の引き換え券代わりになるから。部員一人当たり、十人は客を呼ばなきゃならなくてさ。他にも誘う予定だから、気にせず来てよ」

カラーコピーのプログラムにさっと目を通す。12月25日、午後5時開演。

二十五日……。そう、その日は吉永君との約束の日だ。

でも、その約束は、白紙にもどってしまった。

「あれ？　都合悪い？」

黙ったままプログラムをじっと見ているわたしに、クッキーが慌てたように裏返った声を出す。

「そりゃあそうだよな。その日は、もうクリスマスだし……。カレシがいたら、やっぱり無理だよな？ それなら別に断ってくれてもいいんだけど」

クッキーは頭をぼりぼりかきながら、照れ笑いを浮かべる。

わたしは少し時間を置いた後、首を横に振った。カレシがいるだなんて、そんなことあるわけないよと言って。

「ええ？ ホントに？ ならクリスマスコンサート、来てくれる？」

うんと言って、こくりと頷いた。

もちろんクッキーのソロ演奏も気になるけど、それ以上に吉永君と会えないクリスマスが辛いのだ。

クッキーのコンサートに行けば、寂しさを忘れられると思った。

「行く、行く。だってクッキーは、中学のときから、めっちゃトランペットうまかったもんね。なんだかすっごく楽しみになってきちゃった。あつ、ねえねえ、クッキー。友だちも誘っていいかな？」

絵里や勇人君も誘ってみようと思いつく。

十人もお客さんを呼ばなければいけないのだ。ここはクッキーに協力するいいチャンスかもしれない、とひらめいたのに……。

「あつ。そ、それはダメだよ。そのプログラム一枚につき、その……。一人しか入場できないんだ」

「えっ？ そうなの？」

わたしは驚いてクッキーをまじまじと見た。彼も困惑した顔でわたしを見る。

「石水、せっかく言ってくれたのに、ごめんな」

「ごめんだなんて……。そんなこと、気にしないで。わかった。じやあ、わたし一人で行くね。市民会館なら駅の近くだし、場所もよく知ってるから」

行くと言ってしまった以上、友だちを誘えないからという理由だけで、やっぱり行きませんとは言えない。

「サンキュー、石水。二十五日、待ってるな。俺、ソロのところ、絶対に成功させるから。じゃあ、また！」

クッキーが満面の笑みを浮かべ、手を振る。

「あ……。ま、またね」

反対方向のバス停に走って行くクッキーを目で追いながら、胸の前で小さく手を振った。

吉永君と会えないクリスマスに、突然誘われたコンサート。

昔なじみの同級生に、たまたま誘ってもらったコンサートだけど

……。

胸の中で、得体の知れないもやもやしたものが密かに蠢き始めているのを、わたしはおぼろげに感じ取っていた。

クリスマス番外編 3・同級生

「何よ、それ！　なんであいつ、こっちに来ないの？　そんなのおかしいよ。ありえないって！」

絵里は、頭のとっぺんから湯気を出しているんじゃないかと思えるくらい顔を真っ赤にして、怒り狂っている。

わたしが吉永君からのメールについて相談したとたん、このありさまだ。

「吉永が自分からクリスマスにこっちに来るって言ったんでしょ……？　なのにどうして急に来れなくなるわけ……？　絶対変だよ。ちゃんと理由を訊いた方がいいと思う……！」

教室にはすでに何人が登校してきているので、あくまでも基本はひそひそ声で。

でも感情のおもむくまま突然大きくなる絵里の声に、さつきからハラハラさせられっぱなしだ。

「それはそうなんだけど……。多分、家の手伝いがあるから、来れなくなっただんだと思う。ぶどう園の仕事、すっごく大変そうなんだもん」

「ええっ？　ぶどうなんて、夏の終わりくらいに、プチって実をもぎ取ればいいだけじゃん……。今は十二月だよ。もうどこにもぶどうはぶら下がってないって……。本当に忙しいの……？」

「う、うん。おじいさんが収穫後の手入れをしないうちに倒れちゃったから、吉永君とおじさんが、広大なぶどう畑で、木にわらを巻いたり、肥料を……」

「わら？　肥料？　なんだかよくわかんないけどさ……。忙しいっ

てわかってるなら、クリスマスに来るなんて、優花を期待させるようなこと言わないで欲しい……。優花がどれだけ楽しみにしてたか、あいつは何もわかつちやいないのよ。ちよつと携帯貸して。あたしが代わりに、訊いてあげるからさ」

絵里がわたしの携帯を奪い取ろうと手を伸ばしてきた。

「だ、だめだつて。いいの。もうちよつとしたら、何か連絡くれるかもしれないし。それまで待つてみる」

絵里にそんなことされたら、吉永君だつて困るに違いない。

わたしは携帯を奪われないように、自分の胸のあたりでぎゅつと抱え込んだ。

「んもう、優花ったら、ホントのん気なんだから。来年のクリスマスまで待ち続ける、なんてことにならないようにね。まあ、生真面目なあいつのことだから、浮気はないと思うけど」

「浮気？」

全身から、さーっと血の気が引いていくのがわかった。

浮気……。そのことも何度か頭の中をよぎったのは事実だが、極力考えないようにしていた。

けれど、絵里の口からその言葉が出たとたん、喉がからからになるほどダメージを受けてしまったのだ。

「やだ。何マジになってんの？ だから、浮気の心配はないって言うてるんだけど？」

わたしの様子を見て、絵里があわててフォローしてくれるが、そんなにすぐ切り替えられるほど、わたしの心は強くない。

「あつ、うん。でも、わたしたち、その。付き合ってるわけじゃないし、別に誰と仲良くなったとしても、浮気とかにはならないと……」

そう思うことで、ショックを和らげようとかんばったのだけども、ますます心の中は不安でいっぱいになる。

「優花。どうしてそんな弱気になってるの？ だからいつも言ってるでしょ？ あんたたちは誰がなんと言っても、正真正銘、恋人同士なんだから。そこは自信を持って。だからこそ、初めてのクリスマスに約束を破るってのが、許せないの！ 家の手伝いだかなんだか知らないけど、優花との約束以上に大切なものがあるっていうのが信じられない！」

絵里の言うとおり浮気でないとすると、理由はやはり、家のことなのだろう。

おじいさんの具合がますます悪くなったということも考えられる。吉永君に連絡を取ろうとしないわたしに、絵里は学校にいる間中、不満そうだった。

でも……。もう決めたこと。吉永君を信じて、彼から連絡が来るのをもうしばらく待ってみることにしたのだから。

ところが。待てど暮らせど、彼からは何も連絡が無い。

時ばかりがむなしく過ぎてゆき、わたしの心には、ぽっかりと大きな穴があいたままだ。

あの日のメールを最後に、結局何も連絡を取り合わないまま、クリスマススイブを迎えることになってしまった。

すでに寂しさと不安の限界を超えていたわたしは、イブの夜、とうとう絵里の助言どおり吉永君に電話をかけてしまった。

久しぶりに聞くその声は、いつもと変わりなく低く落ち着いていて、とても響きのいい声だった。

ところが返ってきた返事は、メールの文章と一字一句違わなくてごめん、明日は行けないと繰り返すばかり。

理由を訊いても、ちよつと……と言葉を濁して、そのまま黙り込んでしまう。

そして、わたしがメールも電話もしなかったこの数日間のこと、別段何も咎められることはなかった。

それは言いかえれば、わたしのことなど、何も気に留めていないというようなものだ。

理由を訊いても、不明瞭な返事しか返ってこないし、わたしからの連絡を待っている様子もない……。

吉永君を駅まで追いかけて行ったあの日。

確かに二人の心が繋がったように感じたのは、わたしの思い過ぎだったとでも？

こんなこと、考えたくもないけれど。

まさか、そんなことがあるはずない、とも思っけれど。

転校した高校に好きな人が出来たのだとしたら……。

あるいは、吉永君を一目見て恋におちた誰かが彼に告白して、彼の気持ちとその誰かに傾いてしまった……とか。

わたしは彼との短い会話のあと、じゃあまたねと言って電話を切り、制服のスカートのままベッドにもぐりこんだ。

とめどなく溢れてくる涙と共に過ごしたクリスマスイブは、とて

つもなく長くて辛い夜になってしまった。

今日から冬休みだ。

絵里と駅前のショッピングモールに行つて、映画を観る約束をしている。

せっかくのクリスマスに仲良しの女子同士でデートだなんて、ホント笑っちゃうよねと言いながらも、わたしは心の底から愉快的気分になったわけではなかった。

絵里は、映画が終わつたらうちに来ないかと誘ってくれている。お姉さんの彼氏も来るので一緒にパーティーをやるうと、わたしの返事も待たないうちから、すっかりその気になっているのだ。

今日は二十五日。本当なら、吉永君と会って、プレゼントを渡して。

そして、もしかしたら、デートらしきこともできたかもしれない、クリスマス……だ。

絵里にはまだ言っていないけど、映画の後、クッキーの吹奏楽部のコンサートに行くつもりになっている。

別にこそこそする必要はないのに、なぜか言い出しにくくて、何も言えないまま、ずるずると今日を迎えてしまった。

急用が出来たから先に帰るねと言って、さりげなく絵里と別れればいいと安易に考えていた。

なのに、待ち合わせ場所で絵里に会ったとたん、それがとんでもない間違いだと気付かされるのだ。

映画館のロビーにひょっこりと姿を現したその人に、腰を抜かさなばかりにびっくりさせられたのだから。

「よおっ……」

力なく右手を上げるその人に慌てて駆け寄った。

「な、な、なんで、はやと君がここにいるの？」

「ま、まあな」

勇人君がわたしから目を逸らし、照れくさそうに首の後ろをポリポリと掻いている。

「へへへ。びつくりしたでしょ？ 実は昨日から鳴崎も誘ってただけ、優花には内緒にしてたんだ。だって、優花の驚く顔が見たかったんだもん！」

絵里のいたずらっぽい目がキラリと光る。それにしても内緒にするなんて、絵里も人が悪い。

勇人君が来るとわかっていれば、こんなところにこのことやっ
て来なかったのにと悔やまれる。

これは、もしかしてもしかするのではないかと、絵里と勇人君を
見てあれこれ妄想してしまう。

だって、クリスマスに誘い合って約束してる男女といえ、やっ
ぱり、あれしかない。

そうに違いない。二人はきつと付き合い始めたんだ。

願ったり叶ったりの急展開に頬の筋肉が緩み、にたにたしてしま
う自分を止められなくなった。

麻美への思いに悩む勇人君と先輩との恋に破れた絵里。

ハラハラさせる二人のやり取りも、捉えようによっては、仲がい
い証拠とも取れる。

でも、わたしのそんなよこしまな予想は、あっという間に砕け散ってしまった。

勇人君がここにいるのには、ちゃんとしたわけがあったのだ。つまり、わたしと同じ状況に陥った不幸仲間……ということらしい。

クリスマスイブだった昨日、勇人君は彼の想い人である麻美にプレゼントを渡すため、絵里の力を借りていたのだが……。

麻美は終業式が終わってすぐに、隣町にある大手予備校の大学受験集中講座を受ける予定になっていて、勇人君の壮大にして命がけのクリスマスプロジェクトが瞬く間に中止せざるを得なくなってしまう……というわけだ。

それで、告白は愚かプレゼントすら渡せず、激しく落ち込んでいる勇人君を救済するため、今日の映画に誘ったのだと、絵里がニヒヒと笑いながら説明する。

確かに今日の勇人君は、映画を観ている間中もずっと無口で、ムスツとしていた。

おまけに泊まりに来ると言っていた親友の吉永君にも約束を取り消されているので、不機嫌さも倍増しているのだろう。

吉永君は勇人君にも来れなくなった理由をはっきり言っていないらしく、もうあいつは友だちじゃないとまで断言するほど、勇人君は怒っていた。

今年のクリスマスは踏んだり蹴ったりだったと、映画のあとに行ったケーキシヨップで、ショートケーキをフォークで蜂の巣状に突きながら、勇人君がしきりにばやいている。

「さあーと。じゃあ、今からあたしんちに行って、ケーキよく、パーっとやろうよ。うひゃー。ケーキ食べながら、景気よくだって

あたし、いつの間にオヤジギャクなんか言ってるんだろ、はっはっはっ……！」

どこまでも暗い勇人君と、好きな人に振られたも同然な態度を取られて落ち込んでいるわたしを氣遣って、わざと明るく振舞ってオヤジギャグまで飛ばす絵里には悪いのだが。

ここできちんと、絵里の家に行けないことを言わなければならぬ。

わたしは食べかけのミルフィーユの横にフォークをそつと置いた。そして、勇気を奮い起こし……。

「絵里、ご、ごめん。今日はその……」

絵里の目を見ながら話をゆっくりと切り出す。

「どうしたの？」

絵里と勇人が声をそろえてわたしを見る。こ、怖いよ。二人の目が、まるで獲物を捕らえる猛獣のようにギロリと光るのだ。

「いや、そ、その……。このあと、ちょっと用があつて、絵里んちには……」

「行けないって言うんじゃないでしょうね？ そうなの？ 優花、ねえ、どうなのよ！」

絵里が身を乗り出して詰め寄る。どうしたというのだろう。まだ何も言っていないのに。

「ゆうちゃん。いったい、どうしたのさ？ まさかとは思いつけど、真澄が来ないからって、自暴自棄になるなんて許さないぞ。今日の

おまえ、俺以上に落ち込んでるだろ？」

勇人君も容赦なく攻め込んでくる。

あまりにも激しい二人の気迫におののき、もうこれ以上あのことは隠し通せないと降参の白旗を揚げた。

「あの、それが……。実は今から、コンサートに……行くんだ」
「誰と？」

本当のことを言っただとたん、すかさず絵里が訊く。

「ひ、ひとりだよ」

そうだ。うそじゃない。クッキーに誘われたけれど、行くのは一人だ。

「ホントに一人で？　なんか怪しい……。優花、ちゃんとして見て。何のコンサートなの？　そんなの今初めて聞くし。ねえ、優花、本当のこと教えて。隠し事はダメだよ」

絵里の誘導尋問は天下一品だ。誰だって瞬く間に丸裸にされてしまふのだから。

「あ、あの……。クリスマスコンサートなんだ。中学の同級生が活動してる、吹奏楽部の……」

「吹奏楽部？　中学の同級生の？」

絵里が不思議そうに首を傾げる。

「うん。そうだよ」

これ以上訊かないでとすがするような気持ちを込めて、絵里に懇願の視線を送りながら、こくりと頷いた。

「中学の同級生か。じゃあ、俺も知ってるよな、そいつのこと。女？ それとも男？ いったい誰なんだ？」

勇人君は、もうすでにそれが誰であるのか気付いているのだろうか。

吹奏楽部に入っている同級生といえば、人物像はかなり絞られる。

もう逃げられない。追い詰められたわたしは、ついに観念して、すべてを打ち明けることにした。

クリスマス番外編 4・忠告

「はやと君、あのね、その人は……。クッキーなの」

勇人君の目つきが険しくなる。

「クッキー？ それって久木のことだよな？ なんでゆうちゃんが、クッキーのコンサートに行くんだよ！ ゆうちゃんとクッキーがそんなに親しい仲だったなんて、俺は今日まで知らなかった。どう考えたって、おかしいよ。だっておまえは、真澄のカノジョなんだろう？ なんで違う男とクリスマスを過ごさなきゃならないんだ！」

一刀両断だ。ものの見事に、すばつと切られた。

そんな風に言われるのがわかっていたからこそ、このことを誰にも言いたくなかったのだ。

「はやと君、聞いてくれる？ あの、わたし、まだ吉永君の彼女だと決まったわけじゃないし。それに、クッキーのコンサートだって呼ばなきゃいけない十人のうちの一人として、誘われただけなんだもん」

必死に潔白であることを説明して理解してもらおうと思ったけど、相手は思った以上に手ごわい。

「ゆうちゃん、いいかい？ 真澄はあのとおり無口だし、自分の気持をつまく伝えられないタイプだと思う。でもさ、おまえのことをとっても大事に思っているのは間違いないと思うんだ。そりゃあ、今日こっちに来なかったのは許されることじゃない。俺だって楽しみにしてたのに、なんで来ないの？ って思ってるし。でも、だか

らと言って、クッキーの誘いにホイホイのるなんて、ゆうちゃんらしくないよ」

「そうだよ。鳴崎の言うとおりだよ。ねえ、優花。そのクッキーって子、なんか下心みえみえって感じがするんだけど。同級生ってことは、吉永も知ってる人なんだよね？」

「うん……」

下心がみえみえだなんて。あまりにもショッキングな絵里の発言に、どんどん気持が沈んでいく。

「ならば、余計にダメじゃん。吉永がこのことを知ったら、怒り狂っちゃうって！」

絵里の言いたいことはわかる。でも、わたしがメールをしなくても気にならない人が、クッキーのコンサートに行ったくらいで怒るとは思えない。

クッキーにも、そしてもちろんわたしにも。コンサートを楽しむ以外の理由は何も存在しないと訴え続けるのだが。

「だからさっきも言ったけど。わたしはクッキーにとってはただのお客さんで、十人のうちの一人なんだってば。吉永君にも、その、その、コンサートのことはちゃんと報告するつもりだし……」

「ウソ！ あれ以来、まだあいつに何も連絡してないくせに。だって、優花ったら、あたしたちにも内緒でこそとコンサートに行こうとしたんだよ？ 優花だって、心のどこかでマズイって思ってたくせに！」

「絵里……」

絵里にすべてを見抜かれてしまった今となっては、もう反論の余

地は残っていないのかもしれない。

「それに」

尚も勇人君が追い討ちをかけてくる。

「さっきからずっと気になってるんだけど。その十人のうちの一人
って、何？」

探究心の強い勇人君は、納得するまでわたしを質問攻めにするつもりらしい。

「それは、言葉通りの意味だよ。つまり、部員がそれぞれに観客を集める手はずになって、クッキーが十人分のお客さんの勧誘を任されてることなんだけど。せつかくのコンサートだもの。会場がいっぱいになった方がいいに決まってるでしょ？」

わたしは何の疑いもなくそう信じて、クッキーの話を受け止めていた。

ところが勇人君はまだ首を縦に振ろうとしない。

「あのさ、ゆうちゃん。クッキーの行ってる高校の吹奏楽部はね、コンクールの全国大会にも名を連ねる強豪校なんだ。で、定期演奏会も学園祭も、前売りチケットは即売り切れって聞いている。そのクリスマスコンサートだって、クッキーが走り回らなくても、すでに客は埋まってるはずなんだけど……」

「ええっ？」

「だから、ゆうちゃんが誘われたのは、もしかしたら家族に割り当てられた座席なのかもしれないな。行ってみればわかるよ。多分、立ち見がでるくらい盛況なはずだから」

じゃあ、クッキーはなぜあんなことを言ったのだろう。

わたしはひざに乗せたファアのバッグを無意識のうちに両手でぎゅっと握り締め、マンション内でクッキーと出会った朝のことを、順を追ってひとつずつ思い出だしていた。

コンサートにはちょうどだけ顔を出してすぐに帰るからと二人を安心させ、たった今店を出たばかりだ。

気分転換になるかもしれないから楽しんできたらいいよと、絵里はわたしを信じて送り出してくれたけれど、勇人君は難しそうな顔をしたままで、手も振ってくれなかった。

勇人君は昔から生真面目なタイプだった。男子には珍しいくらい細かいところによく気がつくし、世の中のしくみにも造詣ぞうけいが深い。

だからと言って、クッキーのことでそこまで深読みする必要があるのだろうか。

クッキーとはたまたま偶然、登校途中に出会っただけなのだし、強引に誘われたわけでもない。

部活のコンサートくらい、誰でも気軽に誘い合ったりするだろうし、到底そこに特別な意味合いがあるとは思えなかった。

たとえば、吉永君に知られたとしても、胸を張って真実を伝える自信がある。

コンサート会場に向かって歩きながら、なんだか無性に腹立たしくなってきた。

たかだか近所の同級生の部活のコンサートに行くだけで、どうしてここまで友だちに指図されなければならないのだらうと。

徐々に行き場の無い怒りがこみ上げてくる。

何も間違ったことはしていないのだから。もっと自信を持って堂々としていればいい。

わたしは、花のモチーフが編みこんであるお気に入りのマフラーをふわりと巻きなおして、スクランブル交差点を小走りで駆け抜けた。

受付でクッキーにもらったプログラムを見せ、パンフレットを受け取る。

ホールの後方部の端席に座って、場内アナウンスの指示に従い携帯の電源を切った。

勇人君の言ったとおりだった。ホール内の客席はすでに人で埋め尽くされ、ここしか空いていなかったのだ。

背筋に緊張感が走る。もし勇人君の言ったことが本当で、クッキーが嘘をついていたのだとしたら……。

わたしは気持を落ち着けるため、胸に手を当てて大きく深呼吸を試してみた。

絶対に大丈夫。クッキーは一人でも多くの人に演奏を聴いてもらいたかっただけ。

きつとそうに違いない。

舞台にはまだ誰もいない。指揮台を中心に、扇状に並べられた椅子と譜面台が、薄明かりの中ぼんやりとシルエットを浮かび上がらせている。

今ならここを出ることが出来るのではないだろうか。

やっぱりコンサートに行くのはやめたと言って、絵里たちと合流することも可能だ。

しかし。根拠のない憶測でクッキーとの約束を破ってもいいの？
あの日、満面の笑みを浮かべて手を振っていたクッキーを裏切れるとでも？

わたしはとうとう何も決断できないまま、開演のブザーが会場内に鳴り響くのを聞き、コンサートが始まってしまったことを知った。

クリスマス番外編 5・それは偶然じゃなくて……

クッキーのソロ演奏を聴いたら、すぐにホールを出ようと思う。

というのも。クッキーとは同じマンションに住んでいるので、今後とも彼とばったり出会う確立は高い。

その時のためにも、せめてソロ部分だけでもしっかり聴いておいて、よかったよと感想が言えるようにしておこうと考えたのだ。

ところが、待てど暮らせど、一向にクッキーのソロが始まらない。この調子だと、結局最後まで聴くことになってしまうのではないかと、焦り始める。

彼がトランペットを構えて誇らしげに立ち上がり、その高校生離れた素晴らしい演奏を聴衆に披露した時、すでにプログラムは最後から二つ目の曲になっていた。

途中で退散しようというもくろみは、見事に打ち砕かれてしまったのだ。

でもクリスマスコンサートと名を打つだけのことはあって、知っている曲も多く、一人でも十分に楽しめた。

クリスマスにちなんだ曲を繋ぎ合わせたメドレーが流れた時には、会場が一体になり、我を忘れて手拍子を刻んでいたほどだった。

吉永君とクリスマスを過ごせなかったことは辛いけれど、こんなに迫力のあるプロ顔負けの生演奏を聴けてよかったと、素直にそう

思ったのも事実だ。

アンコールは、またもやクッキーのソロ演奏が組み込まれ、それはもう割れんばかりの拍手で会場が沸き立ち、何度目かのアンコール演奏のあと、ようやく幕が下りた。

人の波に押し出されるようにして、ロビーにたどり着く。

するとそこには、今まで演奏していた部員たちがそれぞれに楽器を持って、演奏時のユニホーム姿のまま観客を見送るために待機していたのだ。

両サイドに花道を作るように部員が立ち、聴き終えた観客ひとりひとりに向かって、ありがとうございましたとにこやかな笑顔をふりまく。

演出だろうか。シャンシャンシャンと、どこかで鈴の音まで鳴り出す始末だ。

十分にクリスマス気分を味わって、最後の最後まで素晴らしいコンサートだったと余韻に浸っていたのも束の間。

花道が途切れ、これでもう何事もなく帰れると思ったその時、突然誰かに腕をつかまれ、その人のそばに無理やり引き寄せられてしまったのだ。

「ごめん。お客さんが帰るまで、ここにいて……」

クッキーだ。彼がわたしにそっと耳打ちをして、その場に引き止めるのだ。

突然のことにびつくりしながらも、帰ることを伝えようと、彼の背後から話しかける。

「あの。クッキー。遅くなると家族が心配するし、わたし、もう帰らなきゃ」

これ以上はここに留まる理由はないのだから。
さっさと帰って、何もなかったことを絵里に報告しなければなら
ない。

でもクッキーは、わたしの話などちつとも聞いていなくて。ひた
すら観客を見送っていた。

「クッキー、ごめんね。お先に……」

わたしは、なんとかここから抜け出そうと、クッキーを突き放す
ようにそう言ったのだが。

「石水、あと少し待って。頼むよ」

クッキーが再びわたしの腕をつかみ、哀しそうな目をして懇願す
るのだ。

帰るタイミングを逃してしまったわたしは、クッキーの背中を見
ながら、途方に暮れていた。

どうしてクッキーは、わたしを離してくれないのだろう。

ならば、彼の掴んでいる手を振り切って走れば、あるいは簡単に
ここから逃げ出せるかもしれないと思うのだけど。

けれど、少し待つてというクッキーのささやかな願いすら聞けな
いほど、わたしは急ぐ必要があるのだろうか。

コンサートに来たことに対して、彼がただお礼を言いたいただけとしたら。

それを無視して逃げ帰るわたしは、冷酷な人間だと思われないうるか。

わたしは、しゅしゅクッキーの願いを聞き入れ、彼を待つことにした。

ようやく観客の波が途切れ、部員たちも列を崩して、思い思いにお互いをねぎらい始める。

どの顔も満足げだ。楽器が出来る人がうらやましいと思える瞬間でもあった。

「石水。待たせてごめん。今日はわざわざ来てくれて、ありがとう」

最後の一人を見送ったクッキーが振り向き、笑顔でそう言った。やっぱり、わたしにお礼が言いたかったただけなのだ。

「こっちこそ、コンサートに呼んでくれてありがとう。すっごく楽しかったよ」

わたしも肩の荷が下りたのか、やっと自然に笑顔になる。待っててよかったと安堵する。

「そう言ってもらえてよかった。予想外に大勢の人に来てもらえて、こっちもやりがいがあったよ……って、お、おい。なんだよ！」

すると突然、むんずとクッキーの肩を掴んだ大柄な男の人が、片側にチューバを携えて、わたしに微笑みかけるのだ。

この人はいったい、誰なの？

「やあ、こんばんは。えっと、こちらのカワイイ人は……。まさかクッキー。おまえのカノジョなのか？ 腕なんか握っちゃってさ」

クッキーが慌てて手を離れた。そして、カノジョなんかじゃないよと言って、迷惑そうに肩にあるチューバさんの手を払いのけた。

「あらあ、かわいいカノジョさん。クッキーにもこんなカノジョがいたんだ。どうりで、今日は張り切っていたはずだわね」

今度はきれいな女の人がやって来て、クッキーに意味ありげな視線を送る。

他にも次々と部員たちが集まってきて、あっという間にわたしたちの周りに人垣ができた。

「せ、先輩。違いますって。彼女は、その、近所の友だちで……」

クッキーが、必死になって、先輩らしききれいな女の人に弁明をする。

「ええ？ うそー。またまた照れちゃって。クッキー、よかったわね。カノジョが来てくれて」

先輩が、クッキーの背中をぽんと威勢よく叩いた。

「だから、違うんです。お願いです、これ以上からかうのはよしてくださいよ。石水も困ってるし」

クッキーはしきりに照れ笑いを浮かべ、トランペットを持った手で器用に頭をぼりぼりと掻いた。

「さあ、みんな。もうひとがんばりお願いね！」

先輩が、手に持ったクラリネットのような縦笛を振りかざし、声を張り上げた。

するとその声に反応した部員たちが一斉にはいと返事をして、楽器を手に散り始める。

「石水、何度も悪いけど……。この後、ステージの片付けがあるんだ。すぐに終わるから、それまでここで待っていてくれる？　一緒に帰ろうよ」

「でも、わたし……」

周りの部員たちに冷やかされ、さっきからいたたまれない気持ちになっているわたしは、すぐにでもここから立ち去りたいというのに、クッキーはまだ待っててなどと言う。

そして、あるうことが、一緒に帰ろうだなんて……。

「石水。何か用でもあるの？」

クッキーが不思議そうに、わたしを覗き込む。

「そうじゃないけど、でも、クッキーも友だちと帰るんじゃないのかなって、そう思って……」

「いや。だってほら、うちの高校は私学だろ？　みんな遠くから通ってるから、帰る方向もばらばらだし。だから別にあいづらとはいっても一緒に帰るわけじゃないんだ。それに、どうせ俺たち、同じと

ころに帰るんだし。ちゃんと家まで送り届けるよ。だから、絶対にここで待ってて。じゃあな」

「クッキー、待って！　ねえ、クッキー」

わたしの叫び声が虚しく響き渡る。でも彼は、またあとで言うて、にこやかに手を振るのだ。

わたしがここで待っているのを、微塵も疑っていないような眼差しで。

ぽつんとひとり、ロビーに取り残された。

本当にわたしは、このままここで待っているべきなのだろうか。

そして、クッキーと一緒に帰って。そのあとどうなるというのだろうか。

わたしはもうどうでもよくなっていた。いったい自分に何が起きているのか、それすらも考えたくないほどに、頭の中がぐちゃぐちゃになっていた。

でも、さっきクッキーが言ったように、帰るところは同じマンションなのだ。

別々に帰ったとしても、バスで再び顔を合わせることだってある。

じわじわと押し寄せてくる不安で胸が痛くなってくる。

勇人君や絵里の言ったことを、もっと真剣に受け止めるべきだったと、今ごろになって後悔し始めていた。

「石水！　お待たせ」

制服に着替え大荷物を持ったクッキーが、息を弾ませてわたしのところに駆け寄って来る。

「クッキー……」

意気揚々と現れたクッキーとは反対に、わたしの声は弱々しく今にも消え入りそうになる。

「石水、なんか元気ないよな。もしかして、腹減った？ 俺、実はさ、もうぺこぺこなんだ。午前中からずっとリハーサルやってたし、楽器吹いてるとハンパなく腹が減る。そうだ、何か食っていかないか？」

クッキーが手で胃のあたりを押さえ、空腹をアピールしてわざとよたよたと歩いてみせる。

でも彼に同調はできない。

なんとしても、クッキーとの食事は避けなければならないのだ。

「ご、ごめん、クッキー。わたし、もう帰らなくちゃ。その……。妹がひとりで留守番してるし」

クッキーに悪いと思いつつも、ひとりで待っている愛花を理由に断る。

もちろん、中三にもなった妹が寂しがっているはずがないのだが。ここは妹の名を借りて、うまく切り抜けるしかない。

だってわたしがクリスマスの夜に一緒に過ごしたい人は……。たとえばクッキーがいい人であっても、それは彼ではないのだから。

「そつか。だめ……か。愛ちゃんのために、石水は家に帰るのか……」

急に悲しそうな顔になったクッキーが、肩を落とし心なしか伏目がちになる。

「ごめんね。でも、クッキー。今日の演奏、とてもよかったよ。クッキー、すっごく上手だった」

「あ、ありがとう。そう言ってもらえて、嬉しいよ」

少し元気を取り戻したように見えるクッキーが、荷物を担ぎ直し、ゆっくりと歩き始める。

なんて気まずいんだろう。クッキーの誘いを断った今となっては、このまま二人で並んで歩くことすら、申し訳なく思ってしまう。

「おい、石水。帰らないのか？」

クッキーが、急に立ち止まったわたしに訊ねる。

「う、うん。気にしないで。クッキー、やっぱり先に帰って。わたしは、その……」

「何言ってるんだよ。そういうわけにはいかないだろ？ 同じところに帰るんだし、おまえをこんなところに置き去りには出来ないよ。それに」

クッキーが、じつとわたしを見つめる。

「俺、石水とこの前の朝、会っただろ？」

「うん」

「あれ、偶然でも何でもないんだ。俺、実は、石水のこと……」

その時だった。クッキーの肩越しに、こっちに向かって走ってくる人物に釘付けになる。

カーキ色のジャケットを着て、紺色のスニーカーをはいて。力強く地面を蹴って駆けてくる、その人に。

「えっ？ う、うそ……」

わたしはそれがとても現実の出来事だとは思えなくて、驚嘆の声をあげる。

そしてぽかんと開けた口元を、咄嗟に両手で覆い隠した。

わたしの異変に気付いたクッキーが、怪訝そうな顔をして後を振り返り、そして……。

クリスマス番外編 6・クリスマスの夜に その1（前書き）

本日（12/25）2話目の更新になります。
ご注意ください。

クリスマス番外編 6・クリスマスの夜に その1

「真澄……」

クッキーが彼に向かって力なくつぶやいた。

「やあ、悠斗^{ゆうと}。そういえば、おまえに言ってなかったよな、俺が引越したこと」

「あ、ああ」

「急に向こうに行くことが決まったから、勇人以外には誰にも言えずじまいだった。昔の仲間に挨拶もせず行ってしまったことは、悪かったと思っているよ」

「だいたいのはことは勇人に聞いた。おじいさんのことで、大変だったらしいな。で、その……。長野にいるはずのおまえが、なんでここに？」

クッキーの問いには何も答えず、まるでわたしに会うためにここに来たとも言いたげな目をして、吉永君がじっとわたしのことを見つめる。

目の前に急に現れたその人が本当に吉永君なのか、まだそれすらも信じられないわたしは、声も出せずにただ見つめ返すことしか出来ない。

彼がたった今、微笑んだように見えたのは気のせいだったのだろうか。

吉永君に、精一杯のぎこちない笑顔を返した時には、すでに彼は別人のように挑発的な目をしてクッキーを睨みつけていた。

「あつ、いや。別に深い意味はなくて。どうして、おまえがここに来たのかなと、思っただけで……」

クッキーが吉永君の威圧的な視線に耐えかねたのか、顔を引き攣らせながらじりじりと後ずさる。

「俺がこっちにいたら、何か都合でも悪いのか？　おい、悠斗。どうなんだ！」

吉永君の目がクッキーを真正面から捉え、冷たく光った。

次の瞬間、わたしの身体に、ぴつと電流が走ったような気がした。指先を通じて、何かが全身を駆け抜けたのだ。

おずおずとその手を見てみると……。なんと、吉永君の手にわたしの指先がしっかりと包み込まれているのだ。

ところが吉永君は、わたしのことなどほんのわずかたりとも見ていなくて、その厳しい眼差しはクッキーに向けられたままだった。

「真澄。だから、俺はただ……」

「ただ？」

尻込みするクッキーに尚も執拗に迫る吉永君を見て、あることに気付く。

ついさっき、わたしがクッキーに何を言われかけていたのかを思い出したのだ。

この前の朝、クッキーに会ったのは、偶然でも何でもないと言っ

ていた。とうことは……。

クッキーが偶然に出会ったように仕組んでいたのだとしたら、今日のコンサートは、クッキーからのデートの誘いだったとも考えられる。

そして、吉永君がその状況を敏感に察知して、今ここでクッキーと対峙しているのだとしたら……。

わたしは、ドキドキと高鳴る胸元にかかる花のモチーフのマフラーをぎゅっと掴み、彼とつないだ手に力を込めた。

クッキーがそんなわたしに、ほんの一瞬だけ助けを求めるような目を投げかけてきたのだ。

「真澄、俺はただ、石水にコンサートを聴きに来てもらって、今から家まで送って行こうと、そう思ったただけで、他には何も……」

クッキーの言っていることに嘘はない。本当だけれど。

でも、ここに吉永君が来なければ、クッキーは次の段階に足を踏み入れていたかもしれないのだ。

クッキーは、わたしの吉永君への気持にも薄々気付いていたのだろう。

そして、まさかとは思うけど。そんな願ってもないストーリーがあるとは思わないけど。

吉永君の気持もわたしにあるかもしれないと、クッキーが感じていたのだとしたら。

突然ここに現れた吉永君に、わたしとは何もないのだと言いつくするクッキーの心中も察することが出来る。

するとクッキーが突然、ある一点を凝視して驚きの叫び声をあげるのだ。

「ええ？ えええっ！ お、おまえたち、やっぱり……」

クッキーが見ていたのは……。つながっているわたしと吉永君の手だった。

そして、わたしたちの顔を交互に見て、目を丸くして。

「つ、付き合っているのか？」

と裏返った声で訊ねた。

わたしは恥ずかしさのあまり、体を硬くしてその場で俯いてしまった。

付き合っているのか、いないのか。

それはわたしにも、まだわからないことだったから。

「おまえたち、本当に、付き合ってるんだ……」

クッキーが苦々しい面持ちで、独り言のようにつぶやいた。

「ああ、そっだ」

吉永君がはつきりと言い切る。

そうなんだ。わたしたち、付き合っているんだと、他人事たにじのように受け止めるわたしがいた。

「今日は、こいつが世話になったみたいけど……。このあと、俺はこいつと約束があるんで。じゃあな」

クッキーに強引に別れを告げたあと、吉永君は優しい目をしてわたしを見て。手をつないだままぐんぐん歩き出したのだ。

彼が市民会館のガラスのドアを大きく開け、わたしはいとも簡単に外に連れ出される。

あまりのスピードに、足がもつれてよろけそうになる。

それでもなんとか振り返り、少し遅れて外に出て来たクッキーに、今夜は楽しかった、ありがとうと言って、バッグを持った手を振った。

そして、ごめんねクッキーと、優しく接してくれた昔なじみの同級生に、心の中でそっと謝った。

吉永君はあれから何も言わない。どうして突然ここに来たのかも教えてくれない。

どんどん市民会館から離れて行く。
このまま大通りを南に歩いていくと、あっと言う間に駅に着いてしまう。

「ねえ、真澄ちゃん……」

わたしはどうしても理由が知りたくて、彼を引き止めた。

「どうして真澄ちゃんが、ここにいるの？　今日は、来れないって言っただよね？」

正真正銘本物の吉永君に向かって、今一番知りたいことを勇気を出して訊ねてみた。

でも、吉永君は何も答えてくれず、立ち止まったわたしの手を再び引いて、歩き始めるのだ。

「真澄ちゃん、教えて。お願い、どうして……」

「おまえに会いたかったから」

わたしの言葉を途中で遮るように、彼がそっけなくそれだけ告げる。

そして、わたしの額を人差し指でつんと押さえた彼は、いつものほわっとした笑顔を浮かべ、片手でわたしの肩を抱き寄せた。

彼の首に巻かれた見覚えのあるマフラーが外れて、ぱらっと目の前に下りてくる。

彼が素早くそれを手に取り、彼の背に回した。

たったそれだけのことなのに、心臓がありえないほどにドキドキと暴れます。

歩くたび頬をかすめる彼のジャケットから、駅のホームで抱きしめられた時と同じ匂いがした。彼の香りだ。

おまえに会いたかったから……。確かに吉永君がそう言ったのだ。夢でも、まぼろしでもない。信じられないけれど、今、吉永君本人がそう言った。

わたしも彼に会いたかった。寂しくて切なくて。毎晩泣いてしまいうくらい、吉永君に会いたかった。

今こうやってわたしの肩を包み込んでいるのは、間違いなく、夢にまで見た見た吉永君の腕だ。

肩を抱かれたまま、ゆつくりと駅に向かって歩く。

駅に近づくにつれて人通りが多くなり、あちらにもこちらにも、見るからに幸せそうなカップルが腕を組み、肩を寄せ合っているのが目に入る。

駅前の広場には、周りのビルの高さに負けないほどの大きなクリスマスツリーが飾られ、幻想的な光を放っていた。

昼間は、大きな木に、ただワイヤーが巻きつけられているだけしか見えなかったあの木が、夜にはこんなにもきれいに街を彩り、人々を魅了するだなんて。

わたしは、その光から目が離せなくなつた。

わたしの首の後ろに回った彼の腕に寄りかかり、眩いばかりのツリーを見上げた。

「わあ、きれい」

周りの誰もが、同じように感嘆の言葉を漏らしている。

吉永君が急にこっちに来れるようになった理由はまだ何もわからないけど、こうやって一緒にツリーを見ていられることが何よりの答えなのかもしれないと思う。

待ち焦がれた彼と同じ場所で、同じ時を過ごしている。
それでももう十分じゃないかと、わたしは自分自身に言い聞かせ、納得する。

「ゆう。今日、学校に行ってる間にうちに届いたこのマフラー、嬉しかったよ。おまえが選んでくれたんだよな」
「う、うん」

わたしはツリーから真横にいる彼に視線を移し、小さく頷いた。

「なあ、ゆう。俺がどれだけおまえに会いたかったか、わかるか？」

吉永君の声がふいにわたしの頭上に降り注ぐ。と同時に肩を抱いていた手を離れた彼が、わたしの目の前に立ちはだかった。

クリスマス番外編 7・クリスマスの夜に その2（前書き）

本日（12/25）3話目の更新になります。
ご注意下さい。

クリスマス番外編 7・クリスマスの夜に その2

青と白の眩い光を放つツリーを背にした吉永君の顔は、逆光になってよく見えない。

わたしを見下ろしている吉永君が、いったいどんな表情をしているのか知りたくて、目を凝らしてじっと見つめてみた。

すると、次の瞬間。彼に少し乱暴に抱きしめられて、上向き加減になったわたしの目には、ツリーの先端と夜空だけしか見えなくなり。

そして、それすらも黒い影で覆われ、いつの間にか彼の顔がわたしのすぐ近くに重なって……。

それはあまりにも突然だった。

心の準備も何も出来ていないわたしに、甘く静かに襲いかかったのだ。

重なった口びるが、冷たくて。

でも柔らかいそれは、確かに彼のもので……。

ほんの一瞬の出来事だったけれど、わたしにとって初めてのキスは、はつきりと心の中に刻み付けられたのだ。

身体中がぞくぞくして、驚きのあまり、息をすることすらも忘れてしまうほど衝撃的だったけれど、彼と交わしたキスは、間違いなく現実起こったことだとわかる。

「ゆづの、その目……。あんまり大きく開けると、落ちてしまうぞ」唇を合わせたあと、彼の第一声がこれだった。

びつくりしすぎてまばたきをするのも忘れ、ぱっちりと目を見開いていたわたしを、吉永君は余裕の笑みで包み込む。

わたしはあわてて、ぱちぱちとまばたきを繰り返した。まぶたの裏が冷たい。

キスのあとが、こんなにも気恥ずかしいものだとは知らなかった。

いったい、何を話せばいいのか。彼は、冗談が言えるほど気持ちにゆとりがあるのに、わたしときたら、火照った顔を隠すように俯くことしかできない。

そして、彼のスニーカーと煉瓦敷きの地面が見えたとなん、その現実にあわてふためく。

ここは。ここは……。

外で、駅前で。周りにもいっぱい人がいて……。

なのに今ここで、いったい何をしたのだろう。

頭から、顔から、そして全身から。ざあーっと音を立てて、血の気が引いていくのを感じていた。

「ま、真澄ちゃん。大変だよ。こんなところにいたらダメ。早く帰ろう。今わたしたちが……その……やったことだけど。誰かに見られていたら、どうするの？」

わたしが大慌てで身を翻し、早く帰ろうと吉永君の手を引っ張る。するとくつくつくと笑う声が聞こえて。そのまま背中から抱き寄せられてしまった。

彼が、変だ。いつもの彼じゃない。人が大勢いるところでそんなことをする彼が信じられなかった。

「ねえ、ダメだって。真澄ちゃん、ダメだよ」

もがけばもがくほど、彼の腕がしっかりとわたしを抱きしめるのだ。

「今日は、許されるんだよ。こういうことも……。周りを見てみろよ。誰も俺たちのことなんか見てないよ。みんな、自分たちのことで精一杯だろ？ ツリーはきれいだし、音楽も鳴ってるし。こんな高校生同士の戯れなんて、誰の目にも止まりはしないって」

吉永君に言われたとおり、周囲をぐるっと見てみた。

チラッとこっちに視線をよこす人はいても、興味本位に立ち止まって覗き見る人はいない。

みんな光り輝くツリーと、横に並ぶ大切な人に心を奪われて、他人のことまで気に留めていられないのだろう。

「な？ 言ったとおりだろ？」

後ろ向きのわたしを抱き寄せたまま、吉永君が背後でそう言った。

わたしはうんと頷いて、そのまま彼に身を委ねる。

自分が気にしてるほど、周りは何も思っていない、とそういつことだよな。

吉永君のぬくもりを感じながら、人の流れを目で追う。

ゆったりと流れていく二人だけの時間が、こんなにも愛おしいだなんて知らなかった。

わたしは次第に身体中の力が抜けていくのを、彼の腕の中でひそやかに感じていた。

「実は俺、おちこぼれだったんだ」

急にとんでもないことを口にした吉永君に、わたしは自分の耳を疑った。

聞き捨てならないその言葉の真意を確かめるべく、彼の顔が見え

るよう、くるりと前に向き直ろうとしたのだけど。

「いいから、そのままで聞いて。こんな話、本当はおまえに聞かせたくないんだけどな」

彼は少しも譲らず、わたしは結局後ろ向きのまま、話を聞くことになる。

「俺の転校した高校のことなんだけど……」

背中越しに聞こえる彼の声にじっと耳を澄ませた。

たまたま定員に空きがあつて彼が編入した県立高校が、地元では超のつくほどの進学校だったらしい。

クラスメイトが同じ学年の生徒だとは思えないくらい、みんなしつかりしていて、転校と同時に自分が落ちこぼれているのを悟ったのだと言う。

でも、それが本当のことだとは、すぐには信じられなかった。

よりによつて、吉永君が落ちこぼれるなど、わたしにとっては到底考えられないことだ。

そもそも彼が落ちこぼれであるなら、わたしは今のこの高校など、成績不振を理由に、とつくの昔に退学させられているはずだ。

聞けば、吉永君の通っている高校は、わたしの高校とは比べ物にならないほど勉強熱心な学校で、転校生である彼の実力を確かめる

ための補習が、他の成績の悪い生徒たちと一緒にずっと続いていたということらしい。

「勉強と家の手伝いに追われていて、おまえに電話すら出来なかった。本当に、ごめんな」

吉永君が、わたしの後髪に顔をうずめるようにして、これまでの行動を振り返り謝ってくれた。

「いいよ、そんなこと。でも、もっと早く言ってくれたらよかったのに。勉強が大変だからってわかってたら、わたしだって、こんなに悩まなかったのに……」

そうだよ。隠し事をするだなんて、これほど辛いことはないのに。

「ごめん。おまえが俺のことを心配してくれているのは、昨日の電話でよくわかった。でもな、自分が落ちこぼれだってこと、ぺらぺらとおまえに言えると思うか？ そんなもの、死んだって言いたくない。俺にだってプライドってもんがあるしな。それに、意地もある。絶対に負けられないって思ったから、必死になって、補習を受けた」

吉永君の負けず嫌いは、誰もが知るところだ。陸上の大会での成績にも、それは顕著に現れている。

「それで、補習はうまくいったの？」

首に巻きつくように掛けられている彼の手に、自分の手を重ねて訊ねた。

「うん。年内は二十八日まで学校に通って、補習を受ける予定だったんだけど、今朝、昨日の確認テストの結果が出て。補習を受けてる誰よりも先に、そこから抜け出せたんだ。数学は満点だった」
「すごいよ、真澄ちゃん！ がんばったんだね。それで、急にここに来れたの？」

心からすごいと思った。そんな優秀な人ばかりの高校で、満点をとるほどがんばった吉永君に、以前にも増して尊敬の念を抱いてしまう。

「ああ。それで、おまえを驚かせようと思って、大阪に着いてからおまえの携帯に連絡を入れたら……。繋がらない」

「ごめん……。なさい。だって、クリスマスコンサートを聴いてて、ホール内では電源を……」

「わかってるよ。でもな、おまえがコンサートに行ってるなんて知らない俺は、なんだってこんな時に電源切ってるんだよ！ って、マジでホームに自分の携帯を投げつけそうになったんだぞ。気を取り直して勇人に連絡したら、コンサートに行ってたって教えてくれてもちろん、久木のことも聞いた。そして、急いでホールに駆けつけたんだ。おまえ、知らなかったんだろ？ 久木の奴、おまえ狙いだっただってこと」

「え……。？」

優花の心臓がどくつと跳ねる。

初めは本当にクッキーの気持ちは何も気付かなかった。

でも、コンサートが終わったあとのクッキーは、そんなこともありかなと思わせる雰囲気をもっていたのは事実だ。

だから、夕食の誘いも断ったのだから。

「勇人も、久木のおまえに対する気持は、前から気付いていたらしくて。早く会場に行けて。あいつ、電話で叫んだ。それともうひとつ。おまえ、今日は勇人ともデートしたんだって？　まあ、本城も一緒だったらいいから、それは許すけど」

そう言ったあと、また彼にぎゅっと抱きしめられる。

しばらく沈黙が続く。点滅するツリーの灯りをぼんやりと眺めていると、背後で彼が大きく息を吸ったような気配を感じた。

そして……。

「……好きだ。ゆうかのことが、ずっと好きだった」

周りの音が何も聞こえなくなつて、行き交う人の動きもぴたりと止まって。

彼の声だけが心の奥に沁み渡る。

その意味を理解した時、わたしはまたもや彼の腕の中で息が止まるほど驚いて、そして、大きく目を見開く。

じわっと膨れ上がる涙の粒が、ツリーの灯りを滲ませ、頬を伝い。

重なったわたしと彼の指先に、はらりと舞い落ちた。

F
i
n

クリスマス番外編 7・クリスマスの夜に その2（後書き）

12/26 00:33 ものすごく面白かったです……とコメントを下さった、Sさん。

感想をいただき、ありがとうございました。
嬉しかったです。とても励みになりました。
こちらを見ていただけていると、いいな。
これからもがんばりますね。

2/27 15:19 そばにいて……。一度に全て読みきりました。

とてもよかったです。クリスマス番外編も、読み終わって心がほっこりしました…とコメントを下さったIさん。

感想をいただき、ありがとうございました。

10代のあの頃にもどりたい……。

私もそんな思いを抱きながら、いつも文章を綴っています。^^
またこちらにお立ち寄りいただけると嬉しいです。
今後ともよろしく願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1329f/>

そばにいて

2010年10月26日14時14分発行